

# 幻想高校の日々

ゆう 12906

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

幻想高校に入学した少女たちが、いろいろなことを繰り広げていきます。

オールキャラでいろんな視点から書いていきたいです。

初め2，3話は説明が多いのでご了承ください。

僕がもう一本書いている小説、「東方好きの優斗と大妖精」と、交互更新で、激しく連動もするので、そちらのほうも見ていただけたらと思います。

# 目次

## 一学期

第一話	初めての？出会い	1
第二話	個性的な先生たちパート1	6
第三話	個性的な先生たちパート2	12
第四話	テストだ！テストだ！テストだ！	20
第五話	従者たちの集い	25
第六話	学生たちの休日	30
第七話	弾幕ごっこ大会 魔理沙VS	36
アリス		

第八話	弾幕ごっこ大会 決勝戦	40
-----	-------------	----

## 夏休み

第九話	竹林の魔物とチルノたち	46
第十話	紅魔館での一日 with プール	52
第十一話	夏祭り	57
二期期		
第十二話	二期期初日から…	63
第十三話	振り回される魔理沙	69
第十四話	振り回される魔理沙その2	

	第十五話 魔理沙と謎の会議と	74	第二十一話 ○○は悩んでいる	
	78		第二十二話 大妖精は考えすぎる	
	第十六話 魔理沙と謎の会議と その	107	第二十三話 依姫はツツコむ	111
2			第二十四話 依姫は考えつつ、優斗の	
	第十七話 社会科見学の行先とは？	82	居場所を謎に思う	115
86			第二十五話 そして真打が登場する	
	第十八話 月世界での攻防く綿月姉妹			
	視点く パート1	91	119	
	第十九話 月世界での攻防く綿月姉		第二十六話 大妖精は戻るが、二人は	
	妹視点く パート2	95	戻らない	123
	第二十話 月世界での攻防く綿月姉妹		弾幕ごっこ大会くタツグ編く	
	視点く パート3	99	第二十七話 組む相手って大事だよ	

第二十八話	準備にもいろいろある	127	をしていた	158
131			冬休み	
第二十九話	開会式で魔理沙は吠える	135	第三十七話	霖之助の苦悩
			第三十八話	霖之助は見る
第三十話	2人はスペルでゴリ押しする	139	第三十九話	魔理沙の楽しみ&趣味
			177	
第三十一話	めーさくの最大のライバル	143	第四十話	大いなる勘違い
			第四十一話	さとのりの裏の趣味
第三十二話	咲夜の作戦	147	185	
第三十三話	咲夜の奇策	151	第四十二話	大妖精の救世主
第三十四話	実は似た者同士	155	三学期	
第三十五話	魔理沙は実は難しいこと		第四十三話	文の取材記事
				194
				189
				182
				173
				169
				162

第四十四話	文のチョコ取材①	197		
第四十五話	文のチョコ取材②	201		
第四十六話	文のチョコ取材③	204		
第四十七話	文のチョコ取材当日編①		208	
第四十八話	文のチョコ取材当日編②		212	
第四十九話	文のチョコ取材当日編③		216	
第五十話	文のチョコ取材当日編④			
第五十一話	テストも終わり			223
第五十二話	慧音が説明中			227
第五十三話	不可視の壁			231
第五十四話	スペカ連打			235
第五十五話	パチュリーの願い		239	
第五十六話	運命のジャンケン		242	
第五十七話	魔理沙の好み			246
第五十八話	魔理沙の救世主			252
第五十九話	弾幕ごっこ大会一回戦			
	弾幕ごっこ大会くクラス対抗編			219

	文&椛VS白黒リリー	256
	第六十話 どんでん返し	261
	第六十一話 消えた妖怪	264
	第六十二話 小傘の助っ人?	268
272	第六十三話 チルノ&ミステイア	



## 一学期

## 第一話 初めてのの？・出会い

桜咲く四月。

満開の花の周りに多くの少女たちが集まっていた。

「よつと……」

その中の一人、箒に乗ってきた霧雨魔理沙が博麗霊夢に話しかける。

「よう霊夢、久しぶりだな」

「久しぶりね魔理沙」

棒読み口調で霊夢が答える。二人が仲がいいのは周知の事実だが、ここのとこあまり会ってなかったようだ。

「しかし今日から幻想高校入学だ。」

「ええ、そうね。みたところ魔理沙と同じクラスみたいだけど……」

「ああそうだ。見ろよ、いろんな奴がいるぜ」

二人はクラスが振り分けられた紙を見た。そこには様々な種族の生徒が並んでいる。それを見てけだるそうに霊夢は声を漏らす。

「バカに、その取り巻き。吸血鬼に、神に天狗……全くめんどくさそうね」

「まあそういうな。住めば都っていうだろ」

「ちよつと違う気がする……」

「とにかく行こうぜ」

二人が教室にいくと、ほとんどのクラスメイトが集まっていた。みんなそれぞれのグループで話している。初めての顔合わせに度合いはあれ、緊張しているようだ。

「よう、アリス」

「魔理沙。あなたも同じクラスだったの」

「おう、これからもよろしくな」

アリスは平静にしているが、顔が少し赤い。つまり、魔理沙と同じクラスになって、うれしいのだが、そんなこと二人が知るはずもない。

「さて、そろそろ先生が来るわよ。席に着いたら」

「んん、そうだな」

皆が席に座ると、変な帽子をかぶった先生が入ってきた。

「みんなおはよう。このクラスの担任の上白沢慧音だ。よろしくな」

よろしくお願いしますと、返事が返ってくる。

「さて、さっそくだが自己紹介をしてもらう。では、1号車の一番前から。どんどんいく

ぞ」

「おう！霧雨魔理沙。得意なことは弾幕ごっこだ。よろしくな」

「博麗霊夢です。よろしく」

「アリスよ。よろしく」

「お空です。本名は忘れました！」

クラスに爆笑が起こった。お空はクラスのムードメーカーになってくれる存在だろう。

「れいうじうつほだよ、お空！みなさんこんにちは。火焰猫燐です。よろしく」

「小悪魔です。よろしくお願いします」

「チルノだ！よろしく！」

「元氣すぎるよチルノちゃん……大妖精です。よろしくお願いします」

「大妖精はバカに振り回されて大変そうだな……」

ぼそつと魔理沙がつぶやいた。

「リグルです。よろしく」

「ねえ、お燐。なんで男の子がひとりいるの？」

「男じゃないよ……」

お燐と大妖精は馬鹿に振り回されるという同じ境遇だった。

「ミステイアです」

「ルーミアなのかー」

「黒谷ヤマメです」

「……キスメです」

「よろしくお願いします」

まったく同時にヤマメとキスメがあいさつをした

「射命丸文です。みなさん新聞づくりのご協力よろしくお願ひしまーす！」

「だれがあんなゴシツプ新聞……」

霊夢が嫌そうにつぶやく。彼女は新聞の恐ろしさをよく知っていた。

「犬走椋です。よろしくお願ひします」

「レミリア・スカーレットです。よろしく」

「お姉様、そんなに無理にカリスマにならなくてもいいのよーフランでーす！」

「大きなお世話よー！」

「鍵山雛です」

「雛、緊張してる！河城にとりでーす」

「小傘でーす。おどろけ！」

いきなり小傘がバサツと傘を広げるが、

「……………」

「まあそう簡単にはいかないよね……」

当然のごとくみんな無反応だった。

「よし、全員終わったな。それじゃ、がんばっていきましょう！」

こうして彼女たちの高校生活がスタートしたのだった。

## 第二話 個性的な先生たちパート1

幻想郷は5月を迎え、幻想高校の一年生も学校生活に慣れていた…

「チルノちゃん、一時間目数学だけど、道具は？」

「忘れた！」

「これで3日連続だけど……」

「ねえお空、数学の教科書は？」

「忘れちゃった！」

「これで4日連続だけど……」

「ん〜大妖精さんとお燐さんは大変そうですね〜」

写真を撮りながら文がつぶやく。

「始まるよ文」

「わかっています」

そんなことを言っているうちに、先生が勢いよく飛び込んできた。

「はいはい！授業を始めます！」

紫先生だ。

「では教科書を……」

なんと紫がいきなり倒れだした。

「おっと、危ない。」

藍が受け止める。

よく紫が眠るので、藍が補助としてついているのだ。

「では、授業を始める」

そのまま藍は始めた。ちなみに紫が最後まで授業を続ける確率は1割にも満たない。

「あー終わった!」

「魔理沙、次理科よ。理科室に行かないと」

「ああ、アリス行こうぜ」

「え!ええ……」

「では、授業を始めるわ。」

理科は幽香先生だ。

「今日はく花の観察く♪」

機嫌がよさそうだ。

みんなは外に出て花をスケッチしていたのだが、

「いいドライフラワーができるかな〜」

チルノが花を凍らしている。

それを幽香が見つけてしまった。

「あなた…いい度胸してるわね…」

「げっ!」

さてどう料理しようか、と恐ろしいことを考えていた幽香だったが、意地悪そうな笑みを浮かべた。どうやら何かとんでもないことを思いついたようだ。

「この前作ったスペルカードをあなたに使ってあげるわ」

「やつ、やめて〜!」

『笑符』ヘルスマイル」

1フレームも隙間がない弾幕がチルノを襲う。当然よけられるはずもなく、何発も被弾する。

「安心しなさい。当たっても痛くないから。けれど……」

「ぎやはははは!」

「その弾幕、被弾するとくすぐられたみたいになるわよ。効き目は……5分くらいかし

らね。」

と、いうとぞつとするような笑みをした幽香であつた。

「次は音楽なのか」

「んん、音楽室にいこう。」

「では、」

「授業を」

「始めるよー!」

音楽の先生はプリズムリバー三姉妹だ。

ポルターガイスト現象が常にあり、音楽室の道具が飛び散る。

「うおつ! 危ないんだぜ!」

いつもこんな感じだ……

「では授業を始める」

四時間目は国語。霖之助先生だ。

「では、この前のプリントを出して」

いたって普通の授業なのだが…

ドガーツ!

隣のクラスからすごい音が聞こえてきた。

「ん!どうしたんだ!」

隣のクラスに行ってみると…

「どうしたんですか!藍先生!」

なんと藍が倒れている。

「ま、まさか…」

橙が立っている。今発言したらしい。

「まさか橙にみとれて気絶を…」

国語の授業の最大の欠点。それはほかのクラスがいろいろやらかして、授業が進まな

いのである。他にも…

「幽香先生、生徒に弾幕を当てないでください!」

「プリズムリバー先生方!こつちに物をとばさないで!」

などいろいろな事があつて大変そうだ…

ちなみに補助として、朱鷺子が付いている。

「えっ?!説明これだけ!」

「昼休みを挟んで五時間目は美術で白蓮先生なのだが、書くことがない…  
「悪かったわね！」

放課後、珍しくレミリアが大妖精に話しかけた。

「大妖精、ちよつといいかしら。」

「ん、何レミリア？」

「今日紅魔館で、宴会するじゃない。」

「うん。」

「その時、あなたと一緒にいる優斗を連れてきてくれないかしら。」

「えっ？」

「お姉様は優斗が、気になってしょうがないのよね〜」

「べつ、別にそんなわけじゃ…」

「分かった、連れてくる〜」

クラスで宴会をするほど、仲がいいようだ。

## 第三話 個性的な先生たちパート2

「うーん…二日酔いだな〜」

「昨日あんなに飲みすぎるからだだよチルノちゃん。もう授業始まるよ。次社会だよ！慧音先生だよ！」

「うん〜」

そのままチルノが机と仲良くしていると、慧音先生が入ってきた。「では授業を始める」

慧音先生の声はいつもキレがある。この一言で生徒全員が集中した。

「ではこの前の課題だったプリントを出してなかった人は出して〜」

「忘れました〜」

「何っ！じゃあ、チルノ、その前に宿題に出した問題集は?！」

「あっ！忘れました〜」

「何っ！チルノ〜！」

ガゴッ！

「あっ！痛っ！」

条件反射的に慧音が頭突きをした。

「じゃあ、ちゃんと出せよ」

笑顔で、しかしとげのある声で、チルノに注意をした。チルノはそんなこと痛くて聞けなかったのだが。

「雖く体育だよ」

「こういうことは苦手なのよね」

「では授業を」

「始めるぞー!!」

体育は雲山&一輪先生だ。

「では今日は……」

「弾幕ごっこをやるぞー!——ハア……ハア……」

雲山先生は、もうだいぶ年の関係でいろいろあるようだ。

と、いうわけで始まったのだが……

「いくぜ! 『恋符』 マスタースパーク!」

「危ないのか」

「きゃはは！いくよー！『禁忌』フォーオブアカインド！」

「弾はよけるだけ。それも弾幕ごっこ。」

何かを悟るように必死に弾をよけ続ける椀。

弾幕ごっこは、妖精や、中ボスの小悪魔や椀、ステージ1、2のヤマメやキスメ、ルーミア、小傘などはだいぶきつかったようだ。

「あいたたたた…怪我しちゃった。」

「大丈夫、小傘？」

「んん、保健室連れてって小悪魔」

ガラガラガラ

「失礼します。」

「あら、小傘いらっしやい。」

永琳先生が出迎える。

「実は弾幕ごっこで擦り傷が…」

「あら、この程度なら消毒液と絆創膏で大丈夫よ」

小悪魔がぼーっとしてしていると、偶然カーテンの後ろに人がいるのを発見した。

「永琳先生、あのカーテンの中の人はなんですか？」

「ああ、あれは私の作った新薬をうどんげに使っているのよ。」

「はあ……」

ぞつとするような声で言った……が、小悪魔は全く気付かず外に出た。

「おーい！みんな急げ！次家庭科だぜ！家庭科室へGO！」

「体育の後はきついわね……」

「じゃあ、授業を始めるぞ〜！今日は調理実習だ！」

妹紅先生が叫ぶ。

「あれ？なんで慧音がいるの？」

「いや〜、今空きコマだったからなチルノ。妹紅先生一人じゃ大変だろう。」

「へ〜」

（偶然なのかな〜）

隣にいた大妖精は少し思った。

しばらくして。

「妹紅先生、火をつけてください」

「おう！——フジヤマヴォルケイノ！」

ボオオオ！

「よし！完了！」

「これが、ここでは普通なのだ。こつちのほうがガス代の節約になる。

「じゃあ、ハンバーグづくりがんばれ！」

ちなみにハンバーグは、みんなちゃんと出来ていた。(チルノとお空を除く…)

「んん、次お昼だけど、お腹いっぱいだわ」

「お姉様、少食だもんね。」

みんなは、購買部に移動する。

「おう、妖夢」

「魔理沙、どうしました？」

「いや、お前のとこの亡霊先生、また全部食べてないよな？」

「いや、行ってみないとわからないですね」

購買部は幽々子先生がいる。そこに購買部は幽々子の天国と化している。

「幽々子先生」

「あら妖夢」

「ちゃんとメニュー残しています?」

「ええ、もちろん。これでも教師よ?」

「あゝ良かったんだぜ。」

「カレーだけね」

「げっ!」

その日、みんなのメニューはカレーだけになった……

「ところで慧音、なんで英語の先生が神奈子なの?」

「ああ、それは五大老の中の余りなんだろう。」

ちよつ、慧音先生メタイこと言わないで」

「じゃあ、授業を始めるぞ」

英語の時間がはじまった。

「ちよつと、雛来てくれるか。」

「はい…」

「雖は神だからgodだな。」

そう前置きをしてから話し始める。

「それに布をかけて、ひっくり返すと…」

「dogになりまーす！」

と、そこには権がいた。

こんなこともやるので神奈子先生は人気である。

く放課後く

「あゝ疲れたんだぜ！」

「魔理沙く」

「げっ！校長の閻魔！」

校長の映姫先生はかなり怒っているようだ。

「また学校の部品壊したわねく！」

「いや、あれは偶然だったんだぜ…」

「いいから来なさい！」

「その背丈じゃ、威厳が無いんだぜ…」

「うるさい！」

ここから一時間は説教タイムであった……

## 第四話 テストだ!テストだ!テストだ!

「みんなー知っているか!」

5月も半ばに入ったところの帰りの会の時間、慧音先生が叫んだ。その内容とは…

「もうテスト2週間前だぞー!」

いつせいにクラスから「えー!」という不満の声が上がった。そう、ここは学校。当然定期テストがあるのだ。

「今回は国・数・理・社・英の五教科だ!テスト範囲配るぞ!」

〈放課後〉

「あゝテストか…」

「どうしたの?大ちゃん珍しい。」

「いや、とうとうテストだなって。チルノちゃんは不安じゃないの?」

「ふふ、あたいはさいきよーだからへいきだよ!」

「別の意味でね…」

「ん?なんか言った。」

「いや…」

ここでチルノが意外な提案をした。

「だったら、みんなで勉強すればいいじゃん。」

「へ？」

「クラスみんなの家に交代でいつて。」

「な、なるほど。」

と、

「お、それはいい考えだな！」

「うん。バカのくせにいい考えしてるわね。」

魔理沙と霊夢も乗ってきた。

「つて、あたいはバカじゃないもん！」

「まあまあ。——じゃあ早速今日からやりましょ。どこの家にする？」

「あ、じゃあ私の家で。」

と、いったのは大妖精だ。

「お、ということは優斗がいるのか！どの位のあたまの持ち主なのかな？」

チルノが言った優斗とは、幻想入りして、わけあって、大妖精の家にいる男子高校生の事だ。

「じゃあ、今からだな。」

そして大妖精の家。

「ねえ優斗。」

「ん、なに？」

「今日ね——」

と、今日話したことを説明する。

「へ〜テスト勉強か。」

「そう、優斗教えられる。」

「ああ、この前教科書見たよ。」

「え?どうだった？」

「めっちゃ簡単だった。俺が三年前に習ったことだ。」

「あ、そうなの!」

コンコン

「あつ、来た!」

あつという間に、クラスメンバーが集まった。

クラスの中でももちろん頭のいい人と、あまりよくない人がいる。

優斗は、後者のほうの人たちのところへ積極的に行った。

優斗に言わせれば、

「要は、理解力があればいいわけだからね。頭のいい人は理解力があるからあまりおしえなくていいんだ。」

特にクラスの2大バカ巨塔、チルノとお空の二人に積極的に教えた。

「なるほど!」

「わかりやすい!」

チルノとお空もよく分かったようだ。

「じゃあ、そろそろお開きですね。ですが…」

文が何か考えている。

「優斗さん、これからも教えてくれませんか？」

「え?!」

「そうすれば、もつと点数よくなりますよ。」

「うん、それがいいと思う!」

椀も賛同する。

「ああ、わかった。」

「あと…学級新聞に優斗さんの事書かせてください。」

「ああ、そっちが本命ね…」

そうして、1年1組は二週間懸命に勉強した。そして、テスト後…

「よし、テスト返すぞ!みんな頑張ったな!三クラス中トップだぞ!」

霊夢や大妖精、アリスなどはだいたい上位のほうへ入った。チルノとお空も平均とはいかなったが、頑張った。

「やった〜!!!」

一斉にみんなが喜ぶ。

クラスの絆が少し深まったような気がした。

## 第五話 従者たちの集い

放課後、会議室に集まった生徒たち。その目的は…

「よし、みんな集まったな。みなよく来てくれた。」

と、集まった人に声をかけたのは藍先生だ。

集まった生徒は妖夢、うどんげ、小町、早苗、お空、お燐、ナズーリン、布都、また生徒ではないが、咲夜がいる。と、いうことは…

「従者たちの集いに。」

そう、ここにいる全員従者なのだ。

「じゃあ、もう一度内容を確認するぞ。」

と、一拍置き話し始めた。

「この会は、自分の主人たちの行動で驚いたもの（常識では考えられないもの）をいいあい、（悪口を言い合い）対策を考える（笑いあう）会だ。」

カツコ内は、みんなの心の声だ。

「ブン屋は締め出してあるな。」

「はい、いわれた通り私とお空で文には『じやましたら権を読んで暴露話をするぞ。』と、

「いってあります。」

「よし。では、妖夢から頼む。」

「はい、私のはいたって簡単です。幽々子様の食事を作る時間で1日の六分の一を使うのを何とかしてほしいんです。」

「あくあれはひどいですよね。」

「うむ、始め見たときびっくりした。」

早苗と布都が口をそろえる。

「では何か意見のあるものは。」

「はい。」

「よし、お空。」

「幽々子にダイエツトしないとババアになるっていつて、食事の量を減らさせるのは？」

一斉に笑いが起こった。

「えっ、それは…」

「まず無理ですね。」

と、口を開いたのは咲夜。

「えっ、なんで？」

「よく考えてごらんよ…」

お憐も突っ込む。

「まず、さすがにババアとは言えないですよ。それに彼女は…」

「亡霊ですもんね。」

「そう、妖夢が一番わかっているけど亡霊はおながいっぱいになることはないです。なぜか空くんだけどね…」

「そうか…」

「そのかわりの案ですけど、他にも幽霊っていますよね？」

「はい。」

「それをメイド幽霊として雇うのはどうでしょうか。」

「なるほど！」

「よし、どうやら解決したな。」

「いや〜楽しいな〜。」

うどんげがぼそつと言う。

「よし、次！」

「は〜い」

「よし、小町。」

小町は三年一組の生徒だが、たまに三途の川の仕事もやっている。

「あたいは従者というより四季様の部下だからここにいるんだけど、あたいの悩みはちよつとサボつただけで四季様が飛んできてその何倍も説教するんだよ」

「なるほどな。——ちなみにこの中にあいつに説教されたひとは？」

咲夜、妖夢、うどんげが手を挙げる。

「あれはしつこいですね。」

「しかも話を聞いていないと余計に怒られるし。」

「なんか私の生き方まで言われたよ…」

と、三人の愚痴を聞いた後、小町が話し始めた。

「まあ、小つちやいんで怖くないけど。」

「そうそう！」

「この前は岩の上に立って説教してましたよ。」

「必死だよね。」

もはや悪口を言い合う会になってきた。その後…

「よし、そろそろお開きにするか。みんな楽しんでくれてよかった！また開くときは呼びかけるからな。」

みんなが解散していく。

——しかしこれがある人が見ているとは夢にも思っていない…

「すごいわね…」

## 第六話 学生たちの休日

幻想高校は土曜日と日曜日は基本的に休みである。今回は日々頑張っている生徒たちの休日の過ごし方を見て行こう。

く八雲一家の場合く

「まずいー!」

藍が何か困っているようだ。

「どうしたんですか、藍しゃま!」

「ちえん! 実は…今日の料理に使う醤油も塩もないんだ。買いに行きたくても料理に手が離せない。このままでは紫様にどんな目に合わせられるか…」

「むむ…」

ちよつと考えた後、橙はこう言った。

「わかりました。ちえんが買ってきます!」

「えっ! でも一人では…」

「大丈夫です! 行ってきます!」

「まって！——分かった。バックとお金だよ。気を付けてね！」  
「じゃあ、行つてきます！」

こうしてちえんのはじめてのおつかい（？）が始まった。

「よしー！」

行先は人間の里だ。

「あつ、ちようちよ！」

と、いきなり走りだす。そのとき石にけつまずいて…

「いてー！」

その拍子にお金飛び出してしまった。

「おっとっと。」

すぐに拾うが明らかにお金の枚数が足りない。——しかしそれに橙は気づかず、

「よし、もう少しだ！」

——一方こちらは藍

「よし、最後に醤油を入れて煮込めば…って、無いのか…——やっぱり心配だ!!」  
そういうと、火も止めず駆け出して行った。

「はくやつと着いた。」

と、人間の里に着いた橙。早速お店を見つけた。

「醤油と塩くださ〜い！」

「はいはい。ん？お金足りないよ。」

「えっ、うそ?!」

やはり落としたときにお金を落としていた。

「どうすれば…」

橙が涙目になったその時、

「お金落としちゃダメじゃないか。」

「藍しやまー！」

藍が助けに来た。

「一緒に帰ろ。」

「はい！」

その頃紫は…

「お腹すいた〜。藍まだ〜？」

もちろん誰も答えない…

くにとりの場合く

「あ〜！出来ない！」

発明で困っているようだ。

「幻想郷内で通信できるような機械があれば便利だと思ったのに…」

と、困っていたその時、

「にとり〜！」

「へっ？あなたは確か…：優斗？」

なんと人間の優斗が来た。

「突然だけど、電気起こせる道具ある？」

「え？——うん、一応。」

と、いつて手回しの充電器を渡した。

「うん、ありがとう。」

「代わりに何かちよーだい！」

「えっ？じゃあ…」

と、いつて優斗はスマホをわたし、帰って行った。

「やったく機械だ。」

と、分解してみると…

「なにこれ！」

今まさに悩んでいた通信関係の機器がそろっていた。

「ラッキー！」

棚からぼた餅とはこのことか。

く魔理沙の場合 with アリスく

「よう、アリス早いな。」

「今日は魔理沙の家で勉強会だしね。」

「おう。——おっ、他の連中も来たぜ。」

と、優斗を先生として勉強していたのだが、意外な人が来た。

「おっ、頑張っているな〜」

「手伝いに来たよ！」

「へっ？ 慧音先生と妹紅先生？」

おもわずアリスが声を上げた。

「まあ、たまたま二人で手伝おうということだな。」

(たまたまなのかな…)

大妖精は思ったが、おかげで勉強がはかどった。

「さて、そろそろ終わりだがみんな、テストと共に大事なことがあるよな。」

「おう、弾幕ごっこ大会だぜ！」

「そう、もう近いぞ。」

「あく勉強したら体がなまったな。どうだアリス、一勝負しないか？」

「えっ、——いや、遠慮しとくわ。こんどやるかもしれないし。」

「おう、そうか…」

そして日は過ぎ…

「それではこれから弾幕ごっこ大会を始めます。」

いよいよ弾幕ごっこ大会が始まった。

## 第七話 弾幕ごっこ大会 魔理沙VSアリス

弾幕ごっこ大会の開会式。

「それでは、校長先生のお話です。映姫先生お願いします。」

「はい。いよいよ弾幕ごっこ大会ですね。そもそもこの大会の始まりは……」

30分後

「ではこれで話を終わりにします。」

「「長げえよ！」」

ちなみにルールは以下の通りだ。

- ・校庭の広さは限りがあるので、弾幕ごっこをする範囲は一定の範囲が決まっている。
- ・スペルカードは一回の勝負につき3枚まで。（勝負を互角にするため）
- ・一回でも被弾したほうの負け（もちろんグレイズはセーフ）
- ・まず、三人か四人でリーグ戦をし、トップが決勝トーナメントに進出できる。

——こちらは魔理沙とアリス。

「いや〜おなじブロックになったな。」

「ええ、これで正々堂々勝負できるわね。」

「では、予選リーグ魔理沙対アリス始めます。」

審判は幽香先生で行われる。

「始めっ！」

「いくぜ！マジックミサイル！」

「ふっ、これくらい。」

細かい動きでよける。

「このくらいじゃ終わらないぜ！」

さらに自機狙いのレーザーも加わり、複雑な弾幕になる。

「これはちよつときついわね……頼むわよ、上海人形！」

アリスの周りに人形が現れ弾幕を出す。

「これで消えるわ。」

「いや～さすがにこのくらいじゃだめだよな。」

「もちろんよ。じゃ、こつちからも！」

アリスの周りにさらに人形が現れる。

「蒼符『博愛の仏蘭西人形』」

一気に人形が弾を放つ。

「おわっ！でもこのくらい。」

「まだまだ！少しきつくなってきたけど…魔操『リターンイナニメトネス』」

さらに魔理沙の近くに人形が飛んでくる。

「おっと、これは爆発するんだったな。ちよつと危険だが…」

ほうきに乗リ高速で先ほどのスペカの間を潜り抜ける。

「どうだ？」

「なかなかやるわね。私も切り札の人形を出そうかしら。」

「えっ？それってまさか…」

「ええ。試験中『ゴリアテ人形』！」

「なっ！——でかすぎるんだぜ！」

「行きなさい…」

ガクリ

突然アリスが倒れた。そのまま地面に落ちていく

「なっ！やつぱり体力の限界だったのか…助けないと！」

と、ほうきに乗ったままフルスピードでアリスに近づく。

「よつと。」

そのまま何とか回収することができた。

「すぐに保健室へ！」

「ええ、分かったわ。」

「うん。——ここは？」

「気が付いたか。」

「魔理沙！」

「いや、それにしてもいいわねあなた。魔理沙がここまでおぶってきてくれたのよ。」

「えっ……——ええー！」

「あたりまえだろ。そんなに驚くことか？」

と、ここで永琳先生がアリスに耳打ちする。

「彼女、必死だったわよ。」

「……」

「まあ、よかつたわね。——そうそう、勝負は魔理沙の勝ちだからね。」

「そう、次も頑張つてね。」

「おう！負けなげ！」

## 第八話 弾幕ごっこ大会 決勝戦

「霊符『夢想封印』」

「おっと、甘いぜ！新しく改造した私のスペル、受けてみる！」

「何っ！」

「恋符『マスタースパーク』！」

「しまった！油断したっ…」

ピチューン

「勝者 魔理沙！」

弾幕ごっこ大会準決勝。霊夢と魔理沙が戦い僅差で魔理沙が勝利した。

準決勝もう片方はフラン対空だ。

「爆符『メガフレア』！いけ！フランを吹き飛ばせ！」

「おっと危ない。強力な弾幕だね。この弾幕には…」

「はい！」

「力勝負だ！禁忌『レーヴァテイン』！」

結果は…

「勝者 フラン！」

「よっしゃ！」

決勝戦は魔理沙対フランになった。

「さすが魔理沙！」

「ああ、ありがとうアリス。」

と、話しているところへ…

「あ、魔理沙！」

「おお、フラン。」

「あら、レミアも。」

スカーレット姉妹が来た。

「よろしくね、魔理沙！」

「ああ、正々堂々とな。」

「あら？レミアアってフランと戦わなかった？」

「え、ええ。まあ、負けたというか、勝ちを譲ったというか…」

「負けたんだな。」

「よし、では決勝戦。魔理沙対フランを開始します。双方とも全力を尽くして頑張ってください。」

長い説明は決勝戦の審判の映姫先生だ。

「では始め！」

「禁忌『フォーオブアカインド』！」

四人に分身する。

「いっけー！」

一気に四重の弾幕が放たれる。

「おっと、甘いぜ。——消してやる！」

と、いうとほうきを一気に加速してフランに接近する。

「魔符『スターダストレヴァリエ』！」

「つつ！」

上に急旋回して避ける。しかし分身は消えてしまった。

「よそ見したなフラン？」

「このくらい余裕！」

「果たしてそうかな?!——マジックミサイル!」

「おっと。」

「うーむ。分身を消したところをマジックミサイルで仕留める。いい作戦だと思ったんだがなあ。」

「このくらいでは負けないよ……!」

フランの顔が少し変わった。

「こつちもいくよ!禁忌『恋の迷路』!」

「いやいや、避け方知ってるぜ。」

「回るように避ける。」

「ふふ、これは改良版よ。」

魔理沙がフランの前に来たとき……

「な、上!」

上から弾が降ってきた。

「ちつ、恋符『ノンディレクショナルレーザー』!」

一気に弾を消す。

「今のは少し危なかったな〜さすがフランだけ。」

「私もお姉様と練習してるのよ。」

「お前の姉さんも大変だな。——そろそろ疲れただろ。次で決着つけないか。」  
「んん〜そうね！」

「いくぜ！やっぱり決着つけるならこれだよな！魔砲『ファイナルスパーク』！」  
「勝負だ魔理沙！禁忌『レーヴァテイン』！」

——二人の技が交差する。

「うおおおお！」

「ぐっ！——フラン、お前はまだ経験が浅いな。」

「なにっ！」

「恋の迷路の時、私がただ避けているだけと思ったか？」

「何っ！」

「お前の剣はお前には扱い切れていない！」

「しまった！」

急いで避けようとするが、周りは弾幕だらけだ。

「——いけー！」

「勝者 魔理沙！ 優勝は魔理沙です！」

「やった！」

アリスも叫ぶ。

「やったわね魔理沙！」

「ああ、ありがとうな！」

と、魔理沙はアリスの手を握り、ぶんぶん振る。

「あつ……まあ、表彰式よ。」

と、いうわけで弾幕ごっこ大会は魔理沙の優勝で終わった。しかし、すべての生徒がこの大会のためにがんばり、成長したことは言うまでもない。

## 夏休み

### 第九話 竹林の魔物とチルノたち

一学期終了式の日。つまり夏休みの前日、チルノがこんなことを言った。

「みんな！迷いの竹林に魔物が出るって知ってる！」

「「「えっ？」」」

と、反応したのはチルノと仲の良いルーミア、リグル、ミスティア、大妖精だ。

「聞いたところによると、月一回出て、緑の髪と大きな角を生やしているんだって！」

「なるほど、それでみんなで探検しよう。」

リグルが話題に食いつく。

「で、明日がその日らしいよ！」

「じゃ、いくのかー。」

夏休み初日もう日が落ち、真つ暗な迷いの竹林の入り口にチルノ、ルーミア、リグル、ミスティア、大妖精、そして大妖精が連れてきたわけあって外の世界から幻想入りした高校生の優斗が集まった。

「みんな！目的は分かっている!？」

チルノが叫ぶ。

「あたいたちで迷いの竹林に潜む魔物を退治するよ!」

おおーと、歓声上がる。

「では、二組に分かれるよ!」

と、いうわけでチルノと大妖精と優斗、ルーミアとミスティアとリグルに分かれて探すことになった。

「うーん。この広いしかも迷いやすいこの竹林で見つかるかな?」

ミスティアは考える。

「ねえルーミア、どう思う。」

「あはははは！闇の中なら私の天下なのかー!」

と、ルーミアが突っ走る。

「あつ！そんなには走ると…」

ゴーンッ

木にぶつかってしまった。

「いたっ!」

「だから言ったのに……」

——その時、

「グルオオオオ！」

うめき声が聞こえた。

「あれは……」

「いこう！」

——その頃、藤原妹紅は夕食のたけのこを集めていた。

「ふう、このくらいでいいかな。——しかし、慧音遅いな。呼んでいるのに。」

と、ため息をついたその時、

「グルオオオオ！」

うめき声が聞こえた。

「ん!?なんだ?行ってみるか。」

「ぐっ、強い……」

その魔物はチルノたちの前にいた。

「氷符『アイシクルフォール!』」

しかし、後ろから迫っている棒状の弾幕にかき消されてしまった。  
「大ちゃん、手伝って！」

しかし、

「……」

放心状態になっている。——そこに弾幕に近づく。

「危ない！」

「っつー！」

優斗が大妖精を抱きかかえるようにして避難させる。

「大丈夫か！」

「うん……ありがとう。」

「ふう……よかった。って、またきてる！」

チルノが叫んだ瞬間——

「フジヤマノヴォルケイノ！」

妹紅が放ったスペルによって、弾幕が消える。

「慧音——」

妹紅が叫び、魔物の動きを止める。

そこにミスティアたちが来る。

「えっ？ 妹紅先生！ えっ？ この魔物は……」

とまどうミステイアたちに優斗が説明する。

「この魔物は大妖精の担任の先生。すなわち慧音だったっていうわけだ。」

その後妹紅の家へ行った。

慧音も今は元に戻っている。慧音の口から説明が始まった。

「そうか、噂に聞いていたがまさか私だったとは……」

慧音は月に一度たまった仕事を片付けるために角の生えている、いわゆるきもけーねになっっているそう。しかし、暴れているという自覚はなかったらしい。

その後色々あり、妹紅と慧音しかいなくなった。

「妹紅……ありがとな。私は生徒たちを傷つけるところだったよ……」

と、座ったまま妹紅の体に顔を埋める。——その目には決して生徒に見せることのない涙があふれていた。

「慧音……そんなことはないよ。慧音は立派な先生だ。」

、かすかに微笑みながら妹紅は言った。

余談だが、その後慧音が暴れることはなくなつた。なぜなら、永琳先生に頼んで月の石をもらい、それを霖之助先生に加工してもらい、ミニ満月を作つたのだ。これは、エ

ネルギーが少ないので少しイライラするだけで済むのである。

さらに、生徒に怒るときにも使えて便利なんだそうだ。

——…転んでもただでは起きない人だ。

## 第十話 紅魔館での一日withプール

——ここはにとりの家兼実験場。

「はあ〜」

「あら、どうしたのにとり？」

「いやね雛。そろそろ泳ぎたいな〜と。」

「それなら妖怪の山のとこで泳げばいいじゃない。」

「いや、あそこは結構狭くてね。ちゃんとこの服が活用できるところがいいの。」

「ふ〜ん。」

と、話していた雛とにとりであったが、

スタツ

そこに一人の人間が現れた。

「あら、あなたは紅魔館のメイドの…」

「う〜ん。あんま人間は入ってきてほしくないんけどな。」

と、二人にいわれた紅魔館のメイド、十六夜咲夜はこう言った。

「話は聞かせてもらいました。ぴったりの場所が紅魔館にありますよ！」  
「へっ？」

「なるほど…これはすごい！」

と、声を上げたにとりがいるのは紅魔館内の大図書館だ。

「ふふ、どうかしら。なんか作ってみたくなつたよね。」

「さすがだなレミリア。これは前の月旅行の後のを再利用したのか？」

と、先に来ていた魔理沙が考え深げに質問する。

「ええ。そのためにちよつと咲夜には頑張ってもらつたわ。」

「へっ。どんなことをしたんですか？」

と、簡単に質問したにとりであったがその答えは想像を絶するものであった。

「はい、まずプールの上にあつた大量の魔術書を片付け、道具をそろえ、プールに水を入れ能力で広くしました。そしてクラスの皆さんを時を止め呼び、全員分のおやつをそろえ、お嬢様の水着を用意し…」

「……」

あつけにとられているにとりの前で鼻血を出している咲夜。

「そんなにすごいメイドとは思えないけどなあ……まあ入ろう！」

と、つぶやきながら飛び込むにとり。

「うん！ 広がっていい！」

そこへ…

「ようにとり！ あのプールの端まで競争だ！」

魔理沙が決闘（？）を申し込んだ。

「望むところだ！ 河童の服の力見せてやる！」

と、一気に魔理沙を引き離すにとり。しかし…

「甘いぜ！ 少し威力を弱くして…——マスタースパーク！」

マスパを撃った反動で一気にゴールしてしまった。

「あつ、ずるい。」

「泥棒はずるいもんだぜ☆」

「くっ…」

その後、クラスのみんなが来て泳いだ。（その中で文が「スクープです!!」といって、みんなの水着姿の写真を撮ったことは言うまでもない）

そしてお昼前、二チームでリレー対決をすることになった。

「今度は負けないぞ魔理沙！」

「ああ、アンカーに志望したってことはその気があるのだな？ 受けて立つぜ！」

「それでは審判&実況は私咲夜がつとめます！ ヨーイ——ドン！」

以下、咲夜の実況の一部。

「おーっと！ チルノ、水を凍らせようとしている！ 今ナイフを投げたので大丈夫です！」

「おっと、文が速い！ 泳いでいても速い！」

「おっと棍がやっているあれは犬かき！ レアなものを見ました！」

そんなこんなでほぼ同時ににとりと魔理沙。それぞれのアンカーがスタートした。

「さあいくぜ！ マスター……」

しかし同じ手は通用しなかった。

「させるか！ いけのびーるアーム！」

にとりが背中から出したアームによってマスパの出る方向が変わった。

「なっ！ 上向きにマスパが……——おわっ！」

上向きにマスパが発射され、水中にたたきつけられる魔理沙。

「おっと！にとりの策略により魔理沙撃沈！ ちなみにマスパで天井に穴が開きました  
が、気にしない！」

そんなわけでにとりが雪辱を果たし、お昼ご飯となった。

——午後。彼女たちに待っていたのは…

「なんで…なんで…——勉強なの〜!」

にとりが天に向かって叫ぶ。

「それはやっぱり…いきなりスキマから慧音がきて『夏休みの宿題終わらせないと夏祭りいかせんぞ』っていつて夏休みの宿題をばらまいたせいね。——この文章読解きついわね…」

「アリス、人形使つてずるくないか?——濃度の計算とかわからん…」

「あら、前も行ったけど全部手動よ。——なんで外の世界の歴史を覚えるのよ…」

こちらはチルノたち。

「ああ!方程式がワカラナイ。ねえ大ちゃん。なんで優斗がないの?」

「やっぱりさつきピチュったからだね。」

「あれは怖かったのかー」

思い思いの感想を述べている内に幻想郷はゆっくりと陽が傾いていくのであった。

## 第十一話 夏祭り

——今日は人間の里で行われる夏祭りの当日。

——午前十時 博麗神社

「あくあ。宿題も終わつたし。今日はゆっくりしようかしら。」

霊夢がつぶやいていると：

「そうはさせないわ！」

「どっからでてきたスキマ妖怪！」

いきなり紫が出てきた。

「ねえ、夏祭り一緒に行きましょう！」

「え〜。」

「ねえ、どうせ暇なんですよ！」

「この言葉のたたみかけに霊夢も疲れたのか、

「もう、わかったわよ！行けばいいんですよ！」

「やった！」

あつさりとOKを出した。

——午前十二時 湖

「なるほど。それは一大事だな。」

「ええ、これは一大事ね。」

「うんうん。これは一大事だね。」

「みんな口をそろえて……」

湖には珍しいことに魔理沙、アリス、チルノ、大妖精が集まっていた。

「なるほど今日の夏祭りにねえ……」

「やっぱり服装を変えて行こう！」

「おう浴衣だ大妖精！いつもとは違う格好で優斗を驚かせろ！」

「ゆ、浴衣……」

どうやらアリス、チルノ、魔理沙が大妖精になにかアドバイスをしているようだ。

「フアイトだ大ちゃん！」

「……」

ガールズトークに他の者が入り込む余地などない。

——午後四時 妹紅の家

「まずい！まずいぞ妹紅！」

いきなり慧音が家に入ってきた。

「ん？どうしたの？」

「今日変身する日だった！」

そう、慧音は月一回怪物に変身するのだ。

「あれ？それはもう治ったんでしょ？」

「いや、そうなんだけどそれでも少しは凶暴になるからねえ…」

「まあ大丈夫でしょ。」

妹紅が適当に言う。

「じゃあ、いざとなったら何とかしてね。」

「さらつと言うな…」

様々な思いがある中、いよいよ夏祭りが開始された。（何このシリアスっぽい感じw）

「ああ、お客さん来るかな〜」

彼は大輔。夜店で射的を開いている。客が来るか（来たとしてもいたずらをしない良

心的な客) 心配していたがそんなのは杞憂だった。

「あつ、ようこそ。」

大妖精と男の子が来た。——男の子のほうが計算して拾ってきた人形をゲットする。

ああ普通の客でよかった。と、思っていたのだが。

「あら〜こんにちは。」

「あ、あなたは確か…」

「射的やらしてもらいわ。」

そう、八雲紫だ。

「あの〜スキマはやめて…——ひっ!」

ひとにらみされ動けなくなり、スキマを使うという反則技を許してしまう。

「もらった!」

——その時、

「ごわっ!」

「あんた何やってるの!」

霊夢が来て止めてくれた。

「ああ〜」

そのままずると引きずっていく。大輔は思った。「霊夢、ありがとう！さすがは巫女だ！あとでお賽銭あげるね！」と

しかしまだ終わりはしない。

「グルルルル」

「えっ、今度は何?! 変な怪物!」

「あくちよつと慧変身中だけど、射的やらせてね。」

と、いったのは、慧音につきそっていた妹紅だ。

「ど、どうぞ……——って、なんでこんなのばっかりなんだー!!!」

ただの人間の大輔にとっては未知の領域だったようだ。

そんなこんなで最後の花火。(省きすぎw)

「わあ……」

「きれいだな。」

「どう霊夢、楽しかった?」

「ええ……(余計なことしすぎよ!)」

「なおったか慧音?」

「ええ、ありがとう。」

「射的屋やめようかな…」

それぞれが思い思いの感想をのべながらゆっくりと祭りが終わっていくのであった。

## 二期

## 第十二話 二期初日から…

「うゝん…」

二期初日、気持ちよく目覚めた魔理沙だったが…

「……やば！遅刻だ！あと十分だって?!」

足でタオルケットをふっとばし、すぐに着替える。朝食を食べる暇もない。

「くっそ!!」

ほうきに飛び乗り、フルスピードで駆け抜ける。

「でも間に合いそう……」——つて、あれは！

魔理沙の真下にあつたのは…

「早くチルノちゃん!!」

「まってよ…」

あたふたしている大妖精とチルノだった。

「なんであんなに遅かったの?!」

「だって……寝坊して……」

「なんだ、私と同じか。」

共感が持てた魔理沙は、二人のほうへと機首を傾ける。

「よお。」

「魔理沙！」

「遅刻になるぞ！早く乗れ！」

「へ？いいの？」

「ああ、大妖精も速く！」

「三人で大丈夫？」

「ああ、重量オーバーだけど…何とかする！」

ギューン

無理をしながら乗せていく。

「遅いな〜」

三人の担任慧音はいつまでも来ない三人を待っていた。

「寝坊でもしたんじゃない？」

「おう、妹紅。——まあ、あの三人ならあり得るな。」

苦笑しながら慧音が言う。

「しかし、あと三十秒だ。やっぱり遅刻か…」

慧音が頭突きの用意をしたその時――

「うおおおおお!!!」

「あつ、きたよ慧音!」

猛スピードで突っ込んでくる魔理沙たち。

「でもあのスピードで止まれるか?」

ズサアアア

と、慧音が危惧した通り、校門にいた二人の前を通過し、派手にほうきが木に激突する。

「痛あゝ。」

「早く、教室に…」

「こりや、まず医務室ね。」

軽く笑いながら妹紅が医務室に連れて行く。

「ううゝひどい目にあつたんだぜ…」

「それは遅刻するからね。」

「ええ、自業自得よ。」

お昼、アリスとパチュリー（二年一組）にいわれ、へこむ魔理沙。

「あれ？なんであなたがここにいるの？」

突然来たパチュリーに驚くアリス。

「あら？いけないのかしら？」

「できればやめてほしいわね。」

「それが先輩に物申す態度？」

「まあまあ、二人とも。一緒に購買行こうぜ。」

二人の間に入り、仲を取り持つ魔理沙。（まあ、二人は視線も合わせていないのだが。）

「幽々子？今日は何があるんだぜ？」

場を明るくしようと、明るい調子で幽々子に聞く。

「ん〜——今日はいつものAランチだけど……実は今日サービステーなのよ。」

「ん？何かもらえるのか。」

「ええ。スープをただであげるわ。」

「へ〜」

スープをもらいながら席に着く。

「じゃあ、座らせてもらおうわよ。」

「じゃあ、私はこっちに。」

アリスとパチュリーがやっぱり目を合わせず魔理沙の両隣りに座る。

（また仲を取り持つのか……）——なんで二人は近づくんのだろ？）

無自覚な魔理沙であった。

「うあく疲れたぜ……」

昼休み、完全にノックダウンした魔理沙。——しかし……

ピンポンピンポン

「ん？なんだ？」

突然放送が流れた。

「えく今日スープが配られたと思います。」

「ああ、そうだったな。」

放送に反応する魔理沙。

「あの中には私お手製、性格が変わる薬が入ってまーす！」

「……………なにー……!!!」

「なんだかおもしろそうだったから協力したわよ〜」

「この声は……購買部の幽々子先生……」

「効果はこれから二十分後から。午後の授業はお休みにしてもらったから存分に楽しんでね〜」

そこで放送が切れた。

「これは……楽しそうだ！」

疲れが一気に吹き飛んだ魔理沙。そしてこれから二学期初日最大の（カオスな）イベントが始まる。

## 第十三話 振り回される魔理沙

「うっ！」

廊下でいきなりうめき声をあげる魔理沙。

「大丈夫ですか?！」

近くにいた文が駆け寄る。

「ああ、大丈夫——」

と、特に悪いことは起きなかった……——そう、体（・）に（・）は（・）（・）。

「——大丈夫よ。」

「はい？」

「心配ないわ。……あれ？」

「口調変わってませんか？」

「ええ。これも薬の効果なのかしら……って！不自然だわー!!」

「くくつ、いいですね。強烈なネタです」

そういつて片手で写真を撮る文。

「おまつ、ふざけないで！」

「そんな口調じゃ威厳がありませんね」

「くっ……なんで口調だけ変わったのかしら？」

顔を赤らめ、教室に入る魔理沙。

「ふう……危ないところだったわ」

しかし教室の中にも薬を飲んだ生徒がいるわけで……

「よう魔理沙」

「あれっ？キスメ？」

キスメはいつもは内気な性格なのだが……

「どこ行くの？」

「なんかいつもとは違うわよ———そうか、薬か」

酔ったようからんでくるキスメを引き離し、視線を上に向けると……

「ねえいいでしょ!!」

誰かが叫んでいる。

「ん？あれはなんですか？」

近づくと魔理沙。———チラチラと赤いリボンが見える。

「あ、あれはまさか……」

「ねえ！その防水服ちようだいよ!!」

「やっぱり……」

いつもは冷静沈着な雛だった。

「どうしたの雛！らしくないよ!？」

からまれて困り果てているにとり。

「ふ、ふははははは!!立場が逆転しているわ!」

「あつ!魔理沙助けて!」

(薬を飲んでいない)にとりが助けを求め。

「あく無理です。自分でなんとかしてね」

「さつきも言われた……って、口調変わってない?」

「それについてはツツコミ禁止!じゃね!」

「ちよっ!」

背を向けて歩き出す。

「危ないところだったわ……」

歩き出す魔理沙の肩に手を当てたのは、

「あら魔理沙。どうしたの?」

「ん……?」

その口調から一瞬紫かと思ったが、聞こえてきたソプラノボイスから、その声がすぐ

に分かった。

「フラン……——つまりフランの性格が変わったってことかしら」

もう慣れたのか頭の回転が速い。

「つまりすごく大人っぽくなった！どうこの推理！」

「その通りよ」

「どう？薬の効果は？」

「ええ、いい感じだわ」

「お前のお姉さんは？」

「ええ。やっぱり大人っぽくなっているけど、持ち前の好奇心でみんなの様子を見に

行ったわ」

「ああそう」

フランと別れた後、教室を出ると、魔理沙にとって最大のイベントが待ち受けていた。

「魔理沙」

「え？」

「魔理沙」

「はい？」

同時に声をかけられた魔理沙。その声の主は……

「アリス、パチュリー……」

しかし2人の様子が違っていた。

「ねえ、お腹すいた」

「疲れた。おぶって」

「え……？」

2人とも性格がロリ化していた。

## 第十四話 振り回される魔理沙その2

「あ〜どうしようかしら?」

首を傾げる魔理沙。(明らかに口調がおかしいのは永琳先生の薬のせいだ。)

しかし、そんな魔理沙より明らかに様子がおかしい者が2人。

「ねえどうしたの?」

アリスとパチュリーだ。薬のせいで性格がロリ化しているのだ。

「いいや、なんでもないからとりあえず袖を引っ張らないで……」

2人を保護者のように見守る魔理沙。とても大変そうだ……——少しうらやまし  
い。(ロリコンということでは断じてない)

「とりあえずどっかいく?」

保育士のように話しかける。

「お腹すいた」

「私も」

「じゃ食堂行こうか」

「どうも幽々子。何かあるかしら？」

「ふふ、口調が変わっちゃったの」

「誰のせいと思ってるのかしら……」

「まあまあ。——えーつと、食事だったわね。優斗と同じカレーでいいかしら？」

「えっ?!あいつが来たの?」

実は、彼は二学期になってから先生となってここで働いているのだ。

「ええ、今のアリスたちみたいなのが映姫先生を連れていたわよ」

どうやら魔理沙と優斗は同じ状況下におかれてるらしい。

「へえ〜——おっ、ありがとう」

「ふふっ、おかわりいくらでもあるわよ〜」

「えっ?」

——見るとアリスとパチュリーが火花を散らしていた。

「……多く食べた方が勝ち」

「……魔理沙が好きなのはいつぱい食べる人」

そういうと、すごい勢いで食べていく。

「ん?何があつたのかしら」

「いいわね〜青春ね〜」

「は？」

「はいおかわり」

魔理沙がよく分からないまま、二人は四杯目でギブアップしていた。

ノックダウンした二人を引きずり、教室に戻る魔理沙。——当然教室の中にも薬の効果で性格が変わっている人がいるわけで……

「ねえねえ！けーねに宿題教えろって言いに行こう！」

「や、やめといたほうがいいんじゃない……」

チルノと大妖精の声が聞こえるのだが……

「なんか不自然ね」

さらに近づくと、その訳が分かった。

「……逆だ」

「逆だね……」

「……すごく変」

そう、立場が逆になっている。

「ほら、チルノちゃんも一緒に！」

「だからやめようって……」

「……ふふつ——はははっ！これは面白いわ！——文——」

「はーい！清く正しい射命丸文です！」

0. 5秒ほどで飛んできた。

「ちよつとこれ撮ってくれる？」

「ほほう。これは面白いシーンですね」

パシヤ

……この写真がいろんな人から買い取られることをみんなはまだ知らない。

くある教室く

「おうおう。みんな混乱しているな」

「ええ、今が始める絶好のチャンスです」

「——では始めようか」

## 第十五話 魔理沙と謎の会議と

「……では開始しようか」

そう口を開いたのは藍だ。会議室にはその他、早苗、小町、文、ナズーリン、咲夜などが集まっている。そう、この集まりは……

「——従者たちの集いを」

一方こちらはロリ化しているアリスとパチュリーに袖を掴まれつつ歩く魔理沙。「はあくこれからどうしようかしらね」

相変わらず口調が変わっている。霊夢が聞いたら大爆笑しそうだ。

「そういえばパチュリーは何年何組でしたっけ？」

「……2年2組」

いつもより無口なパチュリーが答える。

「へえ。まあ行くところもないし、そっち行こうかしら」

そのまま階段を下り2階、2年生のフロアへと歩いていく。

ガラッ

そこで保護者魔理沙が見たのは……

「えくみなさん現在の状況をご存知でしょうか？」

取り仕切っているのは今回集い初参加の文だ。

「ええ」

「ああ」

咲夜と小町が反応する。

しかし、いつもと明らかに様子がおかしい者が一人。

「ああ。あたしも影響受けちゃったぜ……」

と、男勝りな言葉を使っているのは、

「早苗。薬を飲んだとは災難じゃったの。本当に飲まなくてよかった……」

いつもとは正反対な早苗だった。

安堵する布都だったが、効果を食らっている早苗はたまったものではない。

「あーひどいぞー！この言葉だと諏訪子様から白い目で見られるんだよ……」

「まあまあ早苗さん。本題に入りますよ。何人かこれてない人もいますが。——この

薬ですが実は映姫先生も飲んでましてね。」

「えっ?」

みんなが一斉に驚く。映姫はこの学校の校長で小町の上司だ。つまり、ここではネタにされる者の一人である。

「その時の写真がこちらです」

扉をこつそりと3センチほどあけた先にいたのは……

「いいですか!よく聞いてください!」

「ふえ〜」

芳香と青娥が向かい合っていた。しかし青娥が正座させられている。

「えっ? 説教しているの?」

興味を持ったアリスとパチュリーが魔理沙にのしかかる。

「どれどれ……」

「すごい……」

「あつ、ちよ、重い……——うわっ!」

三人とも後ろにすっころんでしまった。

「いてて……おい二人とも大丈夫か?——おお!戻ってるぜ!」

しかし2人とも魔理沙の言葉に反応しなかった。理由は簡単。一つは今まさに葉の効果が切れたこと。

もう一つは、現在うつ伏せになって二人にのしかかっている魔理沙だったが、その手が2人の後ろに回り、二人一緒に抱いているような光景になっているからだ。

「えーつと……二人とも?」

二人とも顔が真っ赤になっている。どうやら今までの事全て、覚えているようだ。

しばらく固まっていた二人だったが、同時に二つの決論に達した。

「私たちの心をもてあそんだ魔理沙クロス」

「ちよっ!?!」

アリスは人形を取り出し、パチュリーの周りに魔法陣が出現した。

## 第十六話 魔理沙と謎の会議と その2

「ふはははは!!」

ここは従者たちが集まっている会議室。そう、いま『従者たちの集い』の真つ最中なのだ。そして今、会議室は笑いに包まれている。

みんなが見ている映姫先生の写真。それがなんと優斗先生におんぶされている写真なのだ。威厳もへったくれもなくなっている。

「ふ……いや…映姫さまもすごいことするねえ。あたいが従者やつてるだけのことあるぜ妖夢とかにも見せてやりたかったな」

一番大笑いしている小町が言う。彼女も普段ストレスがたまっているのだろう。

「そういえば、みんなのご主人様はどうなってるんだ？ふふっ……」

待つてましたとばかりに、

「実はうちのお嬢様がね……すっごく大人っぽくなっているの!」

はああああ…と、身悶える咲夜。彼女が一番従者なのかもしれない。

「さとり様がすっごく社交的になっていてね。驚いたわ!」

「諏訪子さまがカエルが嫌いになっててな。びっくりしたぜ」

さらに続けるお燐と早苗。早苗も薬の効果をばっちり受けていて、こんな口調になっている。

このまま話が尽きることがないと従者一同思ったのだが……

ガラツ

不意にドアが勢いよく開いた。

「くっ、違う！誤解なんだ！——どわっ！」

投げつけられた人形を前転して避けながら魔理沙は叫ぶ。二人に私たちの気持ちを踏みにじったわね！と、勘違いされていて、絶賛逃亡中だ。

「なあパチュリー！お前は分かってくれるよな！」

返事は木と土の弾だった。二人とも『魔理沙く』と、未恐ろしい声でゾンビのように言っている。おそらく半分くらい自我がないだろう。

「くっ、このままでは……」

話し合いはできないと判断し、角を曲がり職員室へと駆け込む魔理沙。そのまま机の下へもぐりこんだ。

「いいかしら大妖精？」

不意に紫の声が聞こえた。どうやら大妖精と話しているらしい。

「終わりに怪談大会するんだけどね、」

「はあ……」

「さりげなく優斗に抱きつけるチャンスよ！」

「ふえっ!？」

「ついでに胸もくつつけちゃえば〜！」

「む、胸っ……」

机の下でニヤニヤしてしまう魔理沙であった。

ドガア

そうこうしている内にアリスたちが入り込んできた。

「このままではジリ貧だぜ……」

すぐに見つかると判断し、職員室を出る。しかし前は行き止まり。窓を突き破ろうと思ったが、また映姫先生に説教されるので、思いとどまった。

「くっ、このままでは……」

一か八か、魔理沙は職員室の反対側のドアへと駆け込む。ドアを勢い良く開け、中へ転がり込んだ。そこには――

「へっ？ 魔理沙？」

従者たちが勢ぞろいしていた。

「あら〜——まあこれも何かの縁。一緒にピチュウさせてくれ」  
「えっ？何を…」

らんが言い終わる前に二人が入ってきてきてスペルが唱えられる。二人の最強クラスの。  
「火水木金土符『賢者の石』！」

『『グランギニョル座の怪人』！』

吐かないピチュウ音が会議室の中に盛大に鳴り響いた。

## 第十七話 社会科見学の行先とは？

「むむむ……」

慧音は一人職員室で考えていた。何を考えていたかというところ、クラスごとに行われる社会科見学についてのことだ。

「みんなが楽しめる場所……どこがいいか……」

と、机を見て目に入ったのは、

「あれ？出してたっけ」

慧音が使っている月の石だった。彼女がきもけーねに変身する際、本物の月を見ると理性を失ってしまうので、これを代用しているのだ。

「……ひらめいたぞ！」

行先を決めたらしい慧音の上で、

「ふふ……予定通り」

天井に紛れてスキマが広がっていた。

「——なあみんな、月へ行きたくないか？」

ち、ホームルームの時間に切り出す慧音。みんなあつげにとられている。

「ほら、もうすぐクラス別社会科見学の時期だろ？」

と、つけくわえる。みんな納得しているようだ。——その時クラスの後方から手が上がった。

「なあ慧音先生、どうやって行くんだ？」

優斗先生である。彼は大妖精と一緒に暮らしているので、よくこのクラスにいるのだ。（ちなみに彼は同居人の気持ちをおわかってない超鈍感な男である）

「うむ、不本意ながら……」

鈍い顔をする慧音。そう、昨日話し合いが行われたのだ……あの人と。

「はーい！わたしの能力よ！」

と、勢いよく入り込んできたのは紫。かわいい子ぶってるが、仕草とかがどう見ても一昔前のそれだ。

「あら？なにかいったかしら？」

い、いえ何でもありません。（震）

「無理ね」

いきなり言い放ったのは霊夢。彼女は乗り気ではないようだ。

「わたし、月に行ったことがあるのよ」

あのでっかいロケットを作って飛んで行ったあの事だ。

「私もだぜ！」

「あら、私もよ」

続けて魔理沙とレミリア。このクラスは三人も月へ行ったことがあるらしい。すごいクラスだ。

「それで？」

「すごく私たちを目の敵にしていたわ」

「ああ、しかもメチャクチャ強いんだぜ……」

「その点については心配ご無用！」

不意に口を開いたのは紫。賢者といわれるくらいだから何かいい考えでもあるんだろう。

「みんなで忍び込んで、何か向こうの大切なものを盗るの。そして『これを返してほしければ社会科見学をさせろ』って、言えばOKよ」

要するに脅迫である。と、ここで優斗はあるゲームを思い出した。

ここからの紫と優斗のやり取りは『東方好きの優斗と大妖精と』の十七話と同じなの

でカット

「では作戦会議を始める」

忍び込む指揮官を任された優斗先生。いくつかのグループに分けた。その中の一つ、明らかに大変そうなグループが一つ。

「ふふふ！私があそこにいるからもう大丈夫だよ！」

「うん！私たちに任せておいて！」

「頭痛い……」

「私たちの役割分かってるのかな？」

「さあ？」

お空、フラン、お燐、大妖精、小悪魔のグループで、やたらとはりきっているのが2人。（誰がとはいわないが）

ちなみにこのグループのやることは優斗？

「囧です」

なるほど。お空とフランには言わなくてもいいんですか？

「まあ、ただ戦ってもらっただけだからね」

ふくん。どういう作戦でいくの？

「まあ、皿をふんだんに使ったやり方であるほど。楽しみだ。  
そうして、作戦の朝がやってきた。」

## 第十八話 月世界での攻防く綿月姉妹視点く パート1

「で？どうするんですかお姉様？」

「あなたは正面をお願い。私は中心部を守ってるわ」

「他のところは？」

「兎たちに2人1組で見張らせるわ。あと、監視カメラもばっちり配置しているわよ」  
「なるほど。完璧ですね」

綿月姉妹が最終確認を行っている。彼女らは永琳から『これは月の威信がかかっているわ。絶対に負けちゃだめよ！』と、釘を刺されているので、この勝負、負けるわけにいかないのだ。

「じゃ、先に行ってますね」

「ええ。わかっているとと思うけど……絶対勝つわよ」

「もちろん」

一方こちらは、クラスのみなどと、担任の慧音と、指揮官の優斗。

「よし行くぞー！」

教室の前方にすきまが広がり、月世界へと転送される。

「うう、退屈だぜ〜」

「まあまあ。もうちよつと待つてろ」

魔理沙をなだめる慧音。わけあって魔理沙、霊夢、レミリア、にとりはお留守番なのだ。

「来たー！」

思わず叫ぶ依姫。見たところ、かなり多い人数だ。

「来ましたね。一人も通しませんよ」

と、軽くにらむ。それに反応するかのように優斗が指揮をする。

「頼むぞ第一グループ」

「よしー！」

と、依姫の目の前に立ったのはフラン、お空、お燐、大妖精、小悪魔。——間髪入れず弾幕を放つ。

「爆符『ギガフレア』！」

「いくよー！禁忌『レーヴァテイン』！」

「私も！猫符『キャッツウオーク』！」

「全力で行くよ！魔符『フェアリーズマジック』！」

「スペルないけど……えいつ!」  
色とりどりの弾幕が依姫を襲う。

「くっ……数が多……」

弾をさばいている間に、10人ほどの人間が横を通り抜ける。

「……少し油断したかしら」

即座に豊姫に通信を入れる。

「お姉様? すいません。何人か入れてしまいました」

「大丈夫よ。さっそく監視カメラに二人ほど映っていたわ」

「よそ見していると危ないよ?」

フランが炎剣を手に襲ってくる。その勇ましさを見て、依姫はあることに気が付いた。

「あなた……この前来た吸血鬼の親戚?」

「え? ああ、多分そーじゃない?!」

めんどくさそうに答えながら炎剣を上段から振り下ろす。——それを避けながら、

「なら少し本気を出そうかしら」

と告げると、爆発するようなオーラを身にまとった。

「あれ？おかしいわね？」

豊姫は見張りながら状況を確認していた。

今のところ2人を捕まえていた。向こうはこの二人にこっそりと行動させ、宝を盗み出す魂胆だったらしい。前に同じ手を食らっていたので簡単に対処ができたのである。

「それで捕まえた人の名前は？」

通信機で兔に質問する。

「はい！アリスと椀だと言っていました！」

この質問をした理由。それは、ほかの人間がまだ捕まっていないからだ。連絡によると、虫を使ったり、歌を歌ったりして兔たちを混乱させているらしい。（それがリグルとミステイアということは、月の人間である豊姫は知るよしもないが）

その時、豊姫の目の前に影が6つ現れた。

「あら、よく来たわね」

## 第十九話 月世界での攻防く綿月姉妹視点く パート

## 2

綿月依姫。月の世界のリーダーで、八百万の神を自分に宿らすという非常に特殊な能力を持っている。

八百万ということはつまり800万回連続で戦うということが出来るわけで……要するに、いくらフランやお空が強くてもかなうわけがないのである。

フラン、お空、お燐、大妖精、小悪魔の五人は全く歯が立たず、ひもで縛られていた。「むむく強すぎる」

「負けたくホントあなた強いね！」

頬をふくらますフランとお空。でも二人はどこか楽しそうだ。

「もうすぐ決着がきます。アリスと権という人も捕まえたし。なのでもう少しここで我慢しててください」

気怠そうに説明する。やはり結構余裕だったようだ。

「で、でもまだ優斗がいるよ！」

「そうですよ！あと雛もいますし……あとバカルテットも！」

と、最後の抵抗をするのは大妖精と小悪魔。二人は弾幕ごっこより頭を動かすことの方が得意だ。

「ああ、そんな人がいましたね。今お姉様が相手をしているわ」

「……………」

そういうと、余裕を含めた声でとどめの言葉を放った。

「あなたたちの負けです」

それを聞いた2人は顔を寄せ合った。

「これはあれだねこあちゃん」

「ほんとだね大ちゃん」

そして依姫に顔を向けこう言った。

「完全に作戦通りだね」

「えっ？」

2人はニヤリと笑い、

「まだ霊夢たちがいないこと気づいてなかった？一番暴れたいのは霊夢たちだと思うよ？」

「なんだか月の裏手って警備が薄そうですね」

「ま、まさか……」

その時、依姫から通信が入った。豊姫からで、若干焦った声だった。

「依姫、そつちは？」

「もう片付けました」

「そう、終わったのね。すぐ月の裏側に回ってちょうだい」

それだけ言って通信が切れた。彼女も敵と向かい合っているのだろう。

「ぐっ、やられたわ……」

そう言っただけで全速力で駆け出す。そのまま最短距離を駆け抜ける。

「ふふ、完全に作戦通りだね」

「うん。これであとは優斗がうまくやってくれるよ。こういうことに優斗は強いからね」

「さすが同居人！そして優斗の将来の……」

「や、やめてよ〜！」

2人は随分と余裕だ。それだけ優斗に信頼を置いているということだ。

「ん？何かしら？」

猛スピードで走っている依姫。その50メートル先がなぜか真つ暗なのだ。

普段の彼女なら注意深く、いったん止まっていただろう。しかしそのまま突っ込んだのはやはり、さっきの言葉で焦りがあつたためか……

「ま、関係ないわ」

そのまま突っ込んでいく。しかし、この言葉が最後の言葉となった。なぜなら――

ゴオン

暗闇の中で何かと激しくぶつかり、意識がブラックアウトしてしまったからだ。

## 第二十話 月世界での攻防く綿月姉妹視点く パート3

焦ると周りが見えなくなる。というの誰しもが一度は経験したことがあるだろう。特に揺さぶりをかけられて気持ちに余裕がなくなつたときは特にそうだ。

それが普段は冷静沈着な依姫がミスを犯した原因なのかもしれない。

「うくん」

先に目を覚ましたのは豊姫だった。そう、暗闇の中でぶつかつたもの、それは戦闘中だった豊姫だったのだ。

「あらあなたは……」

「どうも」

「あれ……は……」

豊姫と会話をしているのは優斗。この作戦を立てた張本人でもある。彼の立てた作戦はこうだ。説明よろしく。

「ルーミアの能力であたりを真っ暗にして、雛の能力で綿月姉妹を不幸にさせたんだ。そうすれば二人がうまいことぶつかるかなうって思つただけど……うまくいった」

そして倒れた二人を運んで布団に寝かしておいたのも優斗である。優しい男だ。

「2人運ぶのは疲れたよ……」

「あら、ありがとう。——あく私たちが負けちゃったのね」

そういうところんと寝転がった。

「私の体好きにしていいわよ」

「はい？」

思いがけない豊姫の言葉にたじたじになる優斗。

「いや……俺がいろんな人にピチューンされるからやめてくれ……」

「ふふつ、冗談よ。面白かったわ」

一矢報いたようだ。そのあと少し真面目な顔になった。

「しっかし、私と依姫をぶつけて倒そうなんて……よく考えたわね」

「まあな。大妖精と小悪魔がいい仕事してくれたんだよ」

あの2人の言葉。あれもただ悔し紛れに言ったのではなく、ちゃんとした作戦だったのだ。二人は弾幕ごっこがとても強いとは言えないが、フランやお空より口は達者なので、依姫と戦わせたのである。

「じゃ、協力しようかしらね」

そういうと豊姫は楽しそうに外に出た。

「ふあく疲れた」

「良かった。大成功だったね！」

緊張が解け、ゆっくりと休んでいるのは大陽性と小悪魔。この作戦の大事なメンバーの一人である。

「んも〜そんな作戦があるんならちゃんと言ってよ！」

「そうそう。協力したのに」

頬を膨らませて抗議するフランとお空。

「ちよつとね……」

「作戦がばれる可能性が……」

「えっ？何か言った？」

「お空たちがいなかったら、勝てなかったって」

「そうそう。そうだよね！」

お燐を信用しているのか、コロツとだまされた。

「いや〜疲れたぜ」

ふいに現れたのは魔理沙、霊夢、レミリア、にとりの月世界の裏側から攻撃したグループ。

「まあ、優斗の作戦は健闘に値するわね」

余裕たっぷりで分析をするレミリアに、フランが質問した。

「じゃあ、お姉様。お姉様と優斗ならどっちがカリスマがあると思う?」

「ふっ、そんなの答えるまでもないわね」

「ああ、優斗に決まってるぜ!」

「右に同じく」

「お賽銭をあんなに入れてくれた人は初めてよ!」

「もちろん優斗だよ!」

「そうそう。紅魔館の誰よりもあります!」

「あの頭は河童にはないな」

これらの言葉は、レミリアの心を砕くには十分だった。

「な、なんですって……でも確かに、私には月世界の征服ができなかったが……いやいや、しかし……」

一人で頭を抱えている。そんな中……

「皆さーん!月世界を見たいですか!」

「見たーい!」

豊姫の案内で月世界での社会科見学がスタートした」

## 第二十一話　〇〇は悩んでいる

「綺麗……」

クラスみんなが思わず声をあげていた。ここは月世界の大展望台。月世界が一望できるその壮麗さは、幻想郷ではあまり見かけないものである。

「じゃあ、次は兎たちの練習を見てもらいます」

きりつとした口調で依姫が話す。もう怪我からはすっかり回復しているようだ。

「これは？」

慧音先生が質問したのはウサギたちの練習方法についてだ。

「見たところただ歩いているだけのように見えるが……」

「これはですね、何か所かに落とし穴を設置しているのですよ」

ウサギたちが慎重に進んでいる。時たま地面が崩れ、「わあっ！」という声とともにウサギが消えている。

「こうすることによって集中力を鍛えるんです」

「なるほどなあ、——ふふっ……」

突然慧音先生が含み笑いを漏らした。

「どうしたんですか？」

「なるほどな。これを作った理由ってお前が引つ掛かったからか」

「なっ!？」

「なるほどどうどんげたちに負けたのか……ま、災難だったな」

「どうしてそれを……」

「まあ、見えたからな」

依姫の顔は、トラウマを思い出した時のように白くなっていた……

「みなさーん！旅の思い出にお土産どうですか！」

大体見学を終え、スキマで帰ろうとしたとき、兎の一匹に声をかけられた。

「土産物店なんてあるのか」

「はい、今作りました！」

どうもこの兎はてるののように商魂たくましい兎のようだ。

「よっしみんな！30分ばかり買い物タイムと行こうか！」

これが生徒たちに大きな選択を突きつけることになるのはこのとき誰も知らない。

大ちゃんは悩んでいた。何に悩んでいるかというところ、お土産についてのことだ。

みんなこんにちは！チルノだよ！おみやげ選びでことのでアタイはさつさと選んじやっただけど、大ちゃんがなかなか優斗へのお土産を決められないんだ。

おつ、なんか手に取ったぞ。あれは……指輪？二つセットの指輪だ。あれ？大ちゃん顔真つ赤だな？どうしてだろう？

大妖精は悩んでいたんだぜ……何にかというと、指輪をお土産にするか、ということだ。

久しぶりの登場、魔理沙だぜ！まったく大妖精は本当に優柔不断だな。それだから優斗にいつまでたっても気づいてもらえないんだぜ。

にしても指輪か。大妖精が迷うのも無理ないな。しようがない、肩を押してやるか  
「それにしろよ（しなよ）！」

「ふえっ?!」

この後さんざん大妖精をいじる二人だった。

私、上白沢慧音は悩んでいた。何にかというと、妹紅へのお土産だ。

指輪だと……欲しい。非常に欲しい。しかし一つしかないし、大妖精も欲しがっているし……しかしあれがあればもこたんが……いかん、顔がゆるんでしまった。

私、アリス・マーガトロイドは悩んでいた。何についてかというところ、あの指輪を買うかどうかだ。

——そしてたった今決めた。買うわ。そして魔理沙にプレゼントして……いけない、つい妄想が膨らんでしまったわ。

私は迷いなく指輪へ手を伸ばした。

ガシッ

「あれっ？」

大妖精、慧音先生、アリスの三人が同時に指輪へ手を伸ばした。

## 第二十二話 大妖精は考えすぎる

大妖精、慧音先生、アリスの3人が同時に指輪へ手を伸ばした。言葉にするとこれだけだが、言葉以上にこれからの先行きが果てしなく不安だった。

3人は、一瞬理解が追い付かずしばらくお互いの顔を眺めあっていたが、魔理沙の「おい、3人とも?」と、いう呼びかけがあった途端、うわっ!と、声をだし後ろへ一歩下がった。

「ア、アリス! お前もこれがほしいのか!」

「そ、そういう慧音先生だって……あと、大妖精も」

「わ、私は二人の邪魔をしようなんて気は全くなくて……」

3人とも指輪を手に入れる! という気持ちが強すぎてこういう状況を想定していなかったのだ。そう、指輪の争奪戦が始まるのであるだろうこの状況を。

「なるほど……ならばアリス。その指輪の片方を誰に渡すつもりなんだ?」

「なっ……そういう慧音先生こそ誰にあげるつもりなんですか? そちらが先に行つてくださいよ」

「いやいや、お前が言ったら私も言おうじゃないか」

早速言葉での応酬が始まる。忘れてしまいがちだがここは女子高だ。殴り合いなんて無粋なまねはしない。あくまで口と弾幕が最高の武器なのだ。

「あゝ私は遠慮しておきますので〜」

2人の火花の飛ばしあいにつきかり萎縮してしまった大妖精は一步下がってこの戦いを棄権しようとした。が、その肩をがつつかむ腕が2本。いうまでもない、魔理沙とチルノだ。

「おい、ここであきらめていいのか?」

「そうそう、ここであきらめると……ちよつとききて」

チルノが勿体つけて大妖精を慧音とアリスの遠くに連れてって、もう一度話し始めた。

「さつき豊姫から聞いたんだけど、さつき私たちと戦った依姫っでいるでしょ。実はあいつ……」

「依姫がどうしたの?」

「ああ、もしかしたら優斗に……」

「優斗に?」

「ここまで行ってもわからないようで小首をかしげている大妖精。他人の恋愛感情のことは疎いようだ。」

「ああ、もうじれつたい！今から実演するから見てろ！私が依姫、チルノが優斗だ」  
「いいよ！なんだかとおもっても楽しそう？」

「だからなに？」

「ここからは優斗と依姫の演技をしたチルノと魔理沙なのであしからず。」

「優斗さん……ちよつとよろしいですか」

「ん？なんだ依姫。リベンジのお願いならまた今度……うわっ！」

突然依姫が優斗をギュツと本当に強く、抱擁した。

「優斗さん、その強いところ……優しいところ……全部が大好きです」

「だ、だめだ依姫。こんなところ見られたらお前の尊厳が」

「私のこと心配してくれるんですね。嬉しい……でも構いません。あなたがいるのなら

……」

「依姫……」

2人は強く抱きしめあつたまま唇と唇を1センチ、また1センチと近づけ……

「ハ、これは……」

真つ青な顔になつて震えている大妖精。無理もない、こんな将来死んでも嫌なはず

だ。

「もし大ちゃんは何にも行動しなかった場合の未来予想図だよ」

「こうなってもいいの？」

「ふ、ふえっ」

大妖精の頭の中で様々考えが交錯している。その量は膨大でとても処理速度が追い付かなかったようで……

「わかったよ……」

「おっ、やる気になったか？」

大妖精の口から発せられた言葉は魔理沙とチルノの想像を逸脱していた。

「慧音先生もアリスも……依姫も……全員ぶっ飛ばしちやえばいいんだよね」

大妖精が完全にぶっ壊れた。もう一騒動起こりそうだ。

## 第二十三話 依姫はツツコむ

月世界のお土産店でアリスと慧音は相変わらず腹の探り合いをしていた。

「先生、もうそろそろ諦めたらどうですか？生徒の幸せを一番に考えるのがよい先生と言われる必須条件ですよ」

「残念だが私は良い先生にはなれないと自負しているからなあ……まあそんなわけで諦めてくれるか？」

「なるほど。ではごっこ遊びで決着つけますか？」

「私は全然構わないが？アリスが後悔するだけだからな」

幻想高校は生徒と先生の垣根が無いに等しい。その結果がこれなのだ。いろんな意味で女子高、しかもひと癖もふた癖もある生徒と教師が集まったこの高校は恐ろしいところなのだ。

「あら、なんだか楽しそうね」

空気を全く読まず二人の間に入り込んできたのは豊姫。なんだかニヤニヤしていて楽しそうだ。

「どこが楽しく見えるんですか？」

「と、どうか私の手伝いしろ」

「まあまあ、私は基本的に中立だから何もできないけど……あなたはと思う？」

「いや、私はどうでもいいんですが」

突然話をそっけない顔になる依姫。しかしちよくちよく顔を見せているあたり少し地上人に対する態度が軟化しているのかもしれない。

その時、外から焦ったように魔理沙の声が聞こえ、チルノと共に店の中へ転がり込んできた

「おい大変だ！——何やってるんだ依姫！さっさと隠れるんだ！」

「はあ？何を言ってるんですか？」

事態が全く呑み込めていない依姫。

「いやもう……とにかく大変なんだ！もうすぐ恋に溺れて暴走しちまった妖精が来るんだよー！」

「だから何を……」

依姫のその言葉はさえぎられた。音速に近い緑の弾によって。

「なっ!!?今のは……」

依姫が驚愕の表情を浮かべる。そのまま恐る恐る斜め上を見上げると、

「いたね……依姫」

R指定されそうなくらい未恐ろしい顔の大妖精が浮かんでいた。微笑を浮かべているが、目が全く笑っていない。顔には青筋が浮かんでいて、漫画なら額のところに暗い線が入っていきそうだった。

「ちよつと待つてください！ いったい何があつたんですか!?! あんな顔見たことありませんよ!」

「それが……私たちがちよつとあいつを焦らしたただけなんだよ……」

「うん。まさかあんなことになるなんて……」

魔理沙とチルノはみんなを輪にして、こうなつた経緯を説明し始めた。話している間、依姫の顔がみるみる赤くなつていく。

「つまり……、あの大妖精は勘違いしているんですか?」

説明が終わつて最初に出た言葉がこれだったが、魔理沙とチルノはこの言葉の意味が分からなかった。

「はあ? 勘違いつてなんだよ」

「私が優斗のことが好きということですよ! そんなわけないでしょう!」

「えっ? 違うの?」

「そうですよ……— あんたの仕業か」

依姫が憤怒に満ちた表情で見つめたのは、この状況を楽しんでいるかのように笑顔を浮かべている豊姫だった。

## 第二十四話 依姫は考えつつ、優斗の居場所を謎に思う

キツ、と豊姫をにらみつける依姫。しかし豊姫は慣れっこのようで、涼しい顔をして笑いながら先ほどの依姫の言葉の続きを話し始めた。

「そうなのよ、魔理沙とチルノに嘘を吹き込めば何か面白くなるかなと、思っていたけれどまさかこんなことになるなんて思わなかったわ。まあ、実際面白くなったから結果オーライよね」

「んなわけないだろうが！」

思わず口調を荒げ、ツッコむ依姫だったが、目を閉じ、深呼吸をして落ち着きを取り戻す。

そのまま頭の中で情報を整理し、この問題への回答を出す。

「はあ……要するにあの指輪が原因つてことですよ。ならばそれを譲る意思を表示すれば……」

「それはできない相談だな」

「ええ、それはどうしても無理ね」

「こんな状況なんだから譲れや！」

冷静さを吹き飛ばし慧音とアリスに怒鳴りつける依姫。

二人の気持ちはそう揺らぐものではない。この方法では無理があるだろう。

「さつきから何ごちやごちやしやべってるの？」

我慢の限界、というように割り込んで入ってきたのは現在絶賛ぶっ壊れ中の大妖精。

「ああもう……なら、お二人が大妖精を止めてくださいよ」

「もちろんそのつもりだ」

「どっちにしるどうにかしないといけない存在よね」

そういつて、ふわりと浮遊する慧音とアリス。そのまま大妖精を挟むような形で静止する。

「さあ、いくぞ」

「何ですか？ 邪魔しないで下さいよ」

どうやら慧音とアリスとのやり取りは完全に忘れてるようだ。それだけさつきのシヨックが大きかったということだろうか。もはや依姫しか眼中にないだろう。

「邪魔です」

大妖精はそういうと、両手を一薙ぎした。しかし、その動きが慧音とアリスには認識することができなかった。

「なんだ……？——おわっ！」

「へっ？——きやつ！」

もはやマツハに近かっただろうか。超高速で飛んできた無数の小弾に慧音とアリスは被弾してしまったのだ。そのまま重力によって地面へと落下していく。

「おいマジかよー！」

慌てて魔理沙がほうきに乗り、フルスピードで二人を空中に乗せる。二人が地面にたきつけられるという事態だけは回避された。

「あ、あんなに強かったですか!？」

困惑の色を浮かべる依姫。前の戦いで一度弾を交えていて、大妖精の力量は理解していたはずだが、

「まゝこれが、絶対に譲れないものを背負った女の強さかしらね〜」

隠された力、とはいっ発動するのがわからないのが漫画のセオリーだが、こんな勘違いでスイッチが入ったことがあっただろうか。いや、少なくとも幻想郷では無かった。

「不本意ですけど、力づくで止めるしかないですね……」

依姫はそうつぶやくと一気に飛翔した。十メートルほどの距離を保って、大妖精をよく観察する。

（あの強さですからね。倒すというより目を覚まさせたほうがよいですね。というか優斗はどこですか！大妖精を止められるのはあの人しかいないでしょう!）

そう、この異変（？）の原因の一端である優斗がさつきから全然顔を見せていないのだ。

そして、その優斗はというと……

「おお、この月まで届けクッキーいいな。買おっかな」

この異変に全く気付いておらず、店の奥の方でお土産選びをしていた……。

## 第二十五話　そして真打が登場する

(さて……どうしますかね)

大妖精をしっかりと正面に見据えながら思案する依姫。オーラが感じられるくらい集中していた。

(いくら強くなっても相手は妖精。一発叩き込めば——)

途中で思考を中断せざるを得なくなる依姫。いきなり数発の弾が飛んできたので、反射的に刀で受け止めたのだ。

「速いですね。うちの兎たちを教えてもらいたいくらいですよ」

「……………」

軽口を完全に無視する大妖精。もう思考のほとんどは目の前の敵を倒すということにしか割かれていない。いや、依姫と優斗がイチヤイチャしている光景も浮かんでいるだろう。

「ゆ、優斗とあんなうらやま……卑猥なことをするなんて！わ、私もした……とにかく倒す！」

「それあなたが勝手に想像したことですよね!？」

余りに大妖精の言葉が的外れで思わずツツコミが入る。

「うわっ！今完全に頭狙いましたよね！」

またすさまじいスピードで弾が飛んできた。しかも狙ったのは頭と四肢。完全に行動不能にさせようとしている。

「しかたありませんね……みねうちにしますからね！」

苦渋の決断で、依姫は大妖精を気絶させることを選択した。猛スピードで大妖精の近くまで突進する。

「それっ！」

そのまま大上段から力いっぱい振り下ろす。いくらみねうちとはいえ、妖精程度の防御力では一発で昏倒してしまうだろう。だが――、

「はれっ?」

すつとんきような声をあげる依姫。全く手ごたえが無かったのだ。

「こつちですよ」

「なにっ！」

いつの間にか依姫の背後を大妖精はついていた。なんと、依姫が認知できないほどのスピードで。

「はははっ！倒れちゃえ！」

普段絶対にあげない奇声をあげながら、多くの小弾を放出した。

「くっ……」

しかし、そこは月で一番の腕前を持った依姫。素早く反転し、すべての弾を刀一本でさばいた。

（あんなスピードとは……あんな化け物勝てるんですか？）

もちろん依姫だって、自分の体に神を憑ろして戦えば勝つのは造作もないことだろう。しかし、こんなことで力を使うのはバカらしいことこの上ないので、剣一本で倒そうとしているのだ。

「じゃーそろそろ本気ですよ？」

「つつ……やつぱり本気で行くしか……」

誰もが依姫と大妖精の全力のぶつかり合いを予想していた。だが、そんな空気は無視できるものがこの場に1人だけいた。

「おい」

突然、それまでの張りつめた空気とは全く異なった声が地上から聞こえた。

「はっ？」

「ほえっ？」

あまりに場違いだったので、集中力が途切れてしまった二人が声のする方を見ている

と、

「どうしたんだ2人とも。らしくないぞ？」

この学校の臨時教師で、いまやこの問題の一番の原因でもあろう、朝霧優斗が土産店の前で佇んでいた。

## 第二十六話 大妖精は戻るが、二人は戻らない

この異変の一端。いや、もうほとんどといっていいくらい関係している朝霧優斗。彼はいろいろなとあつて、大妖精と同居している。

同居しているということは必然的にいろいろと行動を共にしているということだ。それなのに優斗は大妖精が抱いている好意に気づかないような男である。そんな彼が、「2人ともなんで喧嘩したんだ？そもそも何があつたんだ？」

2人のやり取りをこう解釈するのもある意味当然のことなのだろうか。  
「えつ、喧嘩？——いや違いますよ。ここにいる大妖精が……あれ？」

依姫が指差した先に大妖精はいなかった。なんと、すでに優斗の目の前に移動している。依姫が視力2.0の眼でじーっとみると、もう瞳は元の優しそうな緑眼に戻っていた。つまりもう完全に元の状態に戻っている。

（いや正気に戻るの早すぎですよ！てか、こんなんで戻るのなら優斗もつと早く来てく  
ださいよ！）

思わず叫びたくなった依姫だが、月人のプライドと誇りを胸にぐつとこらえる。  
一方、一瞬で正気に戻った大妖精はというと、優斗にきわどい質問をしていた。

「ねえ優斗大丈夫だった！依姫にいけないことされてない？」

「ちよ、何を言ってるんですか？」

思わず依姫も優斗の前に移動する。

優斗は大妖精に質問の意味を取り違えたようで、

「いけないこと？いや、別に痛いことはされてないけど」

「そうじゃなくって〜」

「大丈夫。依姫は見かけは怖いけど、根は優しいから」

「どういう意味だ！」

「よかったわね。優斗の好感度アップよ♪」

「あんたは話をややこしくするだけだから黙ってる！」

「しゃしゃり出てきた豊姫を一蹴する。」

「ああ、喧嘩してたわけじゃないのか。じゃ、一応……」

子供っぽくじやれる月世界の姫二人を横目に、優斗はごそごとポケットを探る。何か魔法のアイテムでもあるのだろうか。

「はいこれ。2人で使って」

優斗がそのものを出した途端、ここにいる誰もが目を見開いた。なぜなら――、

「えっ、みんなどうしたんだ？指輪ってなんかおかしかったか？」

そう、優斗が取り出したのは、この異変のキーアイテム、ペアの指輪だったのだ。優斗は、そのまま依姫と大妖精の指の人さし指にみんなが正気に戻る前にはめた。

「はいこれ仲直りっつと」

優斗が軽く微笑むと、みんなががほんわかした。そこからは彼独特のカリスマが垣間見えた。

「ふう……これで解決ですね。そろそろ時間のようです。すみませんスキマお願いします」

依姫がそういうと、どこからともなく大きいスキマが現れた。

「じゃあまたねー!」

「ええ。いつか会いましょう」

大妖精が満面の笑みになると、依姫もいつもに真面目な顔を少し崩した。それは、幻想郷と月世界のつながりが強固なものになった象徴でもあった。

「よし、みんな帰ろう」

優斗がそういうと、ぞろぞろとクラスのみんなが集まった。——ある二人を除いて。

「ちよつと待てよ……」

「ええ、このままでは終われないわ」

遠くから聞こえる怨霊のような声。その声は1デシベル、また1デシベルと近づいて

きた。

「二人とも……」

思わず声を漏らす依姫。この状態の人間を彼女は今さつき見ていた。

「なあ、アリス。これって全部依姫のせいだよな？」

「ええ先生。彼女が勘違いされなければ……ですよ」

死んだ目をして依姫をにらみつける慧音とアリス。

「いやちよつと待っててくださいよ！——そうだ、優斗。この二人も説得して……」

しかし優斗たちはすでにスキマに喰われていて、そこには存在してなかった。

「じゃあ、ぶっ飛ばす」

「ちよ……！」

慧音とアリスの我を忘れた攻撃は依姫がブチ切れて本気を出すまで続いたとか。

## 弾幕ごっこ大会くタツグ編く

## 第二十七話 組む相手つて大事だよ

四季がはつきりしている幻想郷。その幻想郷に雪がちらほら降り始めた。つまり冬の訪れ、12月だ。外ではレティが授業中だというのに飛び回っている。

12月、ということは3学期制の学校では2学期の終わりまで1カ月を切ったということだ。言い換えると学期末。と、いうことは……

「よっしーとうとう来たなこの大会が！」

魔理沙が運動会の日を指折り数えて待つ子供のようによく叫ぶ。彼女は前回この大会でトップに輝いている。そう、この大会は……

「んじゃ、今回のルールを説明するぞー」

気だるそうに黒板の前でしゃべる慧音。

「みんなにとつては2回目になるな。——弾幕ごっこ大会の」

弾と弾が華麗にぶつかりあい、強さを美しさで競い合う、弾幕ごっこ大会が行われようとしていた。

「まあ、以上の通りルールはあまり変わらないんだが……」

壇上では慧音の説明が続いていた。といつてもルールは前回とあまり変わらない。スペルは3枚までで、1回でも被弾したらそこで終了。リーグ戦の後、トーナメントで優勝を決めるといふ至極簡単なものだ。

「一点だけ違うところがあつてな」

「前置きはいいから早くお願いなんだけ」

せかす魔理沙を完全にスルーして慧音が続ける。

「今回の勝負は2対2だ。まあチームバトルというのか？誰かとペアを作って私のところまで申告してきてくれ。別に他学年の生徒とでも構わないぞ」

「何だつて!？」

生徒たちが一斉に目の色を変えた。何と今回は2人で戦うのだ。今までは絶対的な弾幕の量が多い者ほど、上へ行けることが多かった。しかし今回はそうとは限らない。ペアでの連携がいかに取れているかがカギとなるのだ。

「あ、ちなみに申告しなかったものは強制的に一人で参加してもらうからな」

またクラスがざわついた。マズイ、ぼっちにはなりたくない、彼女たちに焦燥感が募る。

「魔理沙、あなたどう？」

この状況でやはりあせっている者が一人いた。いうまでもない、アリスである。

彼女は前回の弾幕ごっこで魔理沙に助けてもらっている。ペアになりたいのは当然だろう。

「ちよつと待った！」

いきなり後ろのドアが勢い良く開いた。そこから現れたのは薄紫色のローブに身をまとっていて、眉一つ動かしていなかった。誰が予想しただろうか、動かない大図書館ことパチュリーである。

「私がペアよ……」

アリスに向かって暗い声で告げる。当然、アリスも椅子から勢いよく立ちあがって反論した。

「いや、私がいちばん人形でサポートできるわ！」

「わかってないわね。私のエレメントに敵う者はいないわ」

まさに一色触発状態。いまにも前哨戦が起こりそうな雰囲気だったが、

「2人ともごめん！」

突然魔理沙が思いっきり頭を下げた。

「実は……もう組んでるんだよな。霊夢と」

非情な現実を2人は理解することができなかつた。しかし、5分くらいたつと事態が呑み込めたようで、

「わかつたわ。じゃあパチュリー一緒にやらない？」

一瞬パチュリーは言葉の意味がわからなかつたようだが、すぐに軽く笑みを浮かべた。

「了解したわ。おもしろそうね……」

校舎内では続々とペアができていく。それは弾幕ごっこ大会の日は刻々と迫っていることを意味していた。

## 第二十八話 準備にもいろいろある

タツグマツチのためには当然誰かと組まなければならない。ここで一つ問題がある。その中で当然あぶれるものが出ていく。ということだ。

自分が組みたい相手のもとへ行つたらもうすでに決まつていて、しょうがないから他の人の元へ行こうとしたらやっぱり相手がいてその繰り返しであれよあれよというまに人がいなくなる。ということも珍しくない。そしてその状況に置かれているのが……

「誰かいませんか」

現在廊下を歩き回っている、3年2組、紅美鈴であつた。

「はあ……」

彼女だつてただ待ちほうけていたわけではない。彼女が真つ先に行つたのは1年1組のフランとレミリアのところだ。しかし、

「あらごめんなさいね。もう組んでるのよ」

「そうそう！私と妹様とで組んだら最強よ！」

「ああ、そうですよね」

これは彼女も予想できていた。そりゃあ、姉妹で組みたいに決まっている。次に行つたのはパチュリーのところだ。彼女はコミュニケーション能力が低いので決まってるはずがない、と考えていたのだが……

「悪いわね。あの金髪と組んでるのよ」

これには彼女も心底驚いた。あの引きこもりのパチュリー様がもう決めただって！そんな大変失礼なことが頭を駆け巡った。

こうなるともうなりふり構っていられない。とにかく声をかけまくった。しかしにとりは雛、チルノはルーミア、文は権と、ことごとく断られたのだ。

「ど、どうすれば……」

燃え尽きてがっくりと肩を落としたその時、

「まったくしようがないわね」

「さ、咲夜さん……」

一筋の光が差し込んだような気がした。そう、瀟洒（仮）なメイドが救いの手を差し伸べたのである。そのタッグは確実に優勝候補の一角だった。

一方、先ほど美鈴に引きこもりと揶揄されたパチュリーはすでに図書館に戻っていた。

「ふっふっふっ……これで……」

不敵な笑みを浮かべて、大きな釜の前でいろいろと混ぜている。その姿はさながら本物の黒魔法使いの雰囲気だった。

「あの〜パチュリー様？」

不安そうな顔で小悪魔が訪ねる。もともとアリスと組むと聞いて何か起こるだろうと考えていたのだが、今まで見たことのない主人の一面を見て困惑の色を隠せないでいる。

「あら心配ないわよ？」

「はあ……」

「ちよつと毒薬作ってるだけだから♪」

「なっ……」

もはや私には止めることなんてできない。小悪魔がそう思うのも当然だった。

「ふふふ……あとはこの人形にこれを詰めれば……」

「あのくアリス？」

パチュリーのとツグ相手、アリスもパチュリーと似たり寄つたりのことをしていた。

心配する魔理沙にアリスは思いつき微笑んで、

「大丈夫よ魔理沙。大会の準備してただけだから♪」

「あ、ああ……」

パチュリーと全く同じ調子で明るく言い放つた。

## 第二十九話 開会式で魔理沙は吠える

弾幕ごっこ大会は開会式を迎えていた。と、いつても前回の映姫の長話に苦情が殺到したせいで簡略化したものだったが。前回七月に行つたときは、さわやかな風が吹いていたのだが、今回は真逆。凍えるような風が吹いている。

今回は3学年一斉に行うので必然的に待ち時間が増える。校庭の端の方に座つていた霊夢と魔理沙も例にもれず、無言で座つていた。

しかし、静かな雰囲気が大の苦手の魔理沙。しかもないが不安なことがあつたのか、唐突に霊夢に話しかけた。

「なあ、霊夢」

「はい？」

「なんだか背筋に嫌なものを感じるんだが……何か不吉なことが起きる前触れかな？」

「はあ？ あんたらしくもないわね。大丈夫よ」

「そうだよな……ハハ！ 悪かつたな」

（たぶん絶対あの事よね……）

そこを伝えないあたりが霊夢の事なかれ主義を表していた。

「クシユン！」

「あら、風邪？」

「いいえ、大丈夫よ」

先ほどの話で話題が上がったアリスとパチュリーはさつきからほとんど言葉を交わしていなかった。

他のペアは連携の確認をしていたが、2人は一切目線を合わせていない。それだけ相手を知っているのだ。言い換えると、連携をする気などさらさらないということなるが。

「あの〜」

「こんにちは〜」

何物も近づくことのできない絶対零度の雰囲気を出していたが、小悪魔と大妖精が話しかけてきた。

彼女たちはリーグ戦でアリスたちと対戦する。試合前のあいさつに来たのだろう。しかし、この雰囲気を感じることでできない彼女たちは、場を察知する能力が無いようだ。

「何かしら?」

アリスが彼女たちを鋭い目つきでにらんだ。

「いや、えつと……」

間の抜けた顔の彼女たちに、パチュリーも無表情で続ける。

「あくまで私たちは敵よ。なれなれしくしないで頂けるかしら?」

「は、はい……」

逃げるようにして去っていく彼女たち。少し涙目になっていて、完全にアリスたちは悪役になっていた。

「全くどんな神経しているのかしら」

もちろんアリスたちに悪気は全くなかったのだが、この後手痛い目に合うことになる。

「ちよ、おかしいだろ! お前生徒じゃないだろ!」

魔理沙は先ほどとは違い、大声をあげて抗議していた。その目の前にいたのは、

「あら、この校長にちゃんと認めてもらったわよ」

得意げに許可証を見せつけたのはこの生徒ではないのに参加する咲夜。そのペア

の美鈴は気まずそうな顔で見守っている。

「しようがなかったんですよ。だって相手がいなかったんです……」  
「つつ、その顔を見せられるとつらいぜ……」

美鈴の申し訳なさそうな顔に思わず声を抑えてしまう。

そんな中で、背後から魔理沙の肩を誰かが叩いた。

「あ？ 今取り込み中なんだが」

「時間だ。早く来い」

「す、すみませんだぜ」

慧音だった。時間だったので呼び出しに来たのである。

「と、とにかく絶対私たちが倒すからな！」

そう強がって魔理沙と霊夢は本会場に向かった。

## 第三十話 2人はスペルでゴリ押しする

「儀符『オーレリーズサン』!」

「はいはい、これで終わりよ。 霊符『夢想封印 散』」

魔理沙と霊夢が2枚のスペルカードを同時に発動する。両方とも弾をばらまくだけのスペルだが、対戦相手のルーミアとチルノを蹴散らすには十分すぎる火力だった。

「は、反則だこんなの!」

「こんなの避けられない」

魔理沙から放出された4色の弾と、霊夢が出した光る弾に悲鳴を上げる2人。

ほとんど反射で飛び回り、何とか避けようとするが、たまらずルーミアは被弾してしまった。

「よ、よくもルーミアを! 氷塊『コールドスプリンクラー』!」

最後の抵抗とばかりに、苦し紛れにスペルカードを発動するチルノだったが、

「氷が熱に弱いなんて常識だぜ? 邪恋『実りやすいマスタースパーク』」

「がっ……」

真正面からぶつかるのは分が悪く、魔理沙の出した高温の光線によって、すべてかき

消されてしまう。さらにマスパに力負けして、どんどん追い詰められていく。

「か、はっ……もうダメ」

そして、力及ばず被弾した。

「勝者、霊夢&魔理沙チームだ。圧勝だったな。さすがだ」

「ふう……これで決勝進出ね」

「ああ、ここからがスタートだ」

特に疲れの色も見せず、すでに先の戦いを想定している二人。やはり今回の優勝候補である。

「幻符『殺人ドール』」

「さっすがです咲夜さん！」

咲夜、美鈴ペアも危なげなく決勝進出。

アリスとパチュリーの対戦相手はにとりと雛であった。

かなり苦しそうな様子にとりと雛。彼女たちの手にはスペルカードが握られている。

そのスペルカードは3枚目、つまりこれをお手上げたよ……光学『オペティカルカモフラージュ』！」

「これをかわされたらお手上げだよ……光学『オペティカルカモフラージュ』！」

「厄符『厄神様のバイオリズム』！」

にとりの姿が消え、座薬弾が交差されて発射される。

雖はゆつたりと移動しながら米粒弾を配置し、弾が一気に拡散されていく。

2人が放った座薬弾と米粒弾は、お互いが打ち消しあうことが無く複雑な弾幕へと変貌していく。

とても密度が濃く、ただの妖精なら一発で被弾してしまうレベルの驚異的な弾幕だった。だが2人は、

「あら、弾がよく見えるわ。足引つ張らないようにね」

「あらそつちこそ。勢い余って突っ込まないように」

お互いに全く干渉せず、それぞれ高速で飛びまわる。

被弾してしまいそうな弾幕にはそれぞれ人形と結界で打ち消す。そしてにとりと雖のスペルは、

「このくらいなら切り札使わなくても大丈夫ね」

グレイズさえしていなかった。

「これでだめって強すぎるよ！」

「これはきついですね……」

簡単に避けられてしまい、思わず声を漏らすにとりと雛。その反応を無視し、2人がスペルを宣言する。

「蒼符『博愛の仏蘭西人形』」

「木&火符『フォレストブレイズ』」

「ま、まだこのくらいなら……」

「まだよ。咒詛『魔彩光の上海人形』」

「日符『ロイヤルフレア』」

「え、それはひどいよ……」

4枚のスペカで構成された厚い弾幕の壁に、にとりたちが避けられるはずもなく、  
「アリス、パチュリーチームの勝利だ。——えげつないな」

藍の宣言で試合が終わった。

## 第三十一話 めーさくくの最大のライバル

「うわっ！ ちょっと、いきなりきつすぎませんかね！」

大弾の影に小弾を隠すという避けにくい弾幕に思わず声をあげながら上下左右にかわす美鈴。

さてここで一つ問題。彼女は普段ほとんどの人に対して碎けた口調でしゃべっている。咲夜とは現在タッグを組んでいる。では現在戦っている相手は……

「あら、これ異変の時にあいつらに最初に出した弾幕だけど、簡単に避けてたわよ」  
「ほら、咲夜も早くやろうよー！」

レミリア&フランという最強の姉妹だった。

「咲夜さん、なんで今お嬢様たちと戦ってるんでしょ？」

「んーやつぱりトーナメントの不思議な巡り合わせよね」

「そんなにゆつたり喋ってる場合ですか……」

「ほら、さっさと勝ちましょ」

いつの間にか手にしていたナイフをレミリアの左右から襲い掛からせる。

「ほらほら、もっと本気出してよ」

しかし、パキツつと音を立てて壊れていく。

「くっ……能力まで使うなんてちよつとおいたがすぎるのでは？」

「ふふー♪ こんな時にしか全力出せないからね」

得意げな様子でピースサインを作り出すフラン。弾幕ごっこ中というのにとってもかわいらしい。

「ごふっ！ 強烈だわ……」

「ちよ、咲夜さん！ 鼻血出さないでください！」

「ご、ごめんさい。あまりにも愛くるしくてね……」

「ほら、私が突っ込みますから！」

「OK、作戦通りにね」

それと同時に一気に速度を上げてレミリアに襲い掛かる美鈴。

「華符『破山砲』！」

美鈴の拳に光が宿り、レミリアの真正面から襲い掛かる。

対してレミリアは、少し意地の悪そうな笑みを浮かべ、

「へえ……力勝負？ 受けて立とうじゃない！」

握っていたスペルカードをグシャツ！と握り潰し、スペルを発動する。

「神槍『スピア・ザ・グングニル』！」

「負けませんよ！」

拳と槍が激突し、火花が飛び散る。

「ほら、もつとかかかってきなさいよ。それだけの力じゃ私は崩せないわよ？」

レミリアの挑発に美鈴は意外にも軽く微笑んで答えた。

「ええ……もともと力で勝てるなんて……思ってませんからね！」

「はあ？——うわっ！」

美鈴がいきなり力を抜き地上へと急降下する。

レミリアはその反動に耐えきれなかったようで、空中でくるくると回っていく。

「さあ、いくわよ」

「つつ!？」

レミリアの背後には咲夜。間髪入れずにスペルを発動する。

「終わりです。奇術『エターナルミーク』」

ナイフを使わない力任せの弾幕だが、ここではレミリアをピチユらせる必殺の一撃になる。——はずだった。

「禁弾『スターボウブレイク』」

咲夜とフランの出した中弾が、お互いの弾幕と相まって相殺されていく。

「私も忘れちゃだめだよ？」

「まあ、そう簡単にはいきませんよね……」

## 第三十二話 咲夜の作戦

校庭の中心では咲夜&美鈴対レミリア&フラン戦が繰り広げられている。

それぞれ先ほどの戦いでスペルカードを1枚ずつ消費し、全員残り2枚となった。

「相変わらずお強いですね」

「あら咲夜こそ。弾幕の量増えたんじゃない？」

空中で静止してお互いをにらみ合う4人。最初に動いたのは、

「ではいくわよー!」

この中で比較的好戦的なレミリアだった。先ほどのスペルで手に入れた槍をひっさげ、美鈴へ突撃する。

「また1対1ですか……受けて立ちましょう!」

美鈴が不敵に口角をあげた瞬間、拳と槍を打ち付け合った轟音が会場全体に響いた。

「ぐぐつ……さすがのバカ力ですねお嬢様」

「あら、もうちよつとカリスマっぽい言葉使ったら？」

「まあ、そうかもですね……なんせこれは、」

美鈴の言葉に今度はレミリアが不敵に笑った。

「あら、ブラフでしょ？——フラン！」

「はい！ ほらほら、そこにいるんでしょ咲夜〜」

フランが手のひらから真紅のレーザーを2本発射させる。その狙いはちようどレミアの真下にいた咲夜。

「やっぱり2度もうまくはいかないか……」

レーザーを軽くかわしながら落胆する咲夜だったが、

「では美鈴、フランBで」

「了解しました！」

すぐに美鈴に指示をだし、自分はレミアの元に移動する。美鈴はフランの元に飛翔しようとする。

しかし、移動という隙を最恐姉妹が逃すはずもなく、

「今よフラン！」

「まっかせてー！ 美鈴、終わらせちゃうよ!? 禁弾『カタディオプトリック』！」

「終わりよ咲夜！ 神罰『幼きデーモンロード』！」

咲夜と美鈴を挟み込むような形でそれぞれスペルを発動させる。2枚ともレーザー中心の高難易度のスペルだ。

一方挟み撃ちの状態の咲夜と美鈴は、背中合わせの状態でスペルに立ち向かう。

「ここはしのぎ切るわよ！ 幻幽『ジャック・ザ・ルビドレ』！」  
「もちろんです！ 幻符『華想夢葛』！」

2人の弾幕がレミリアたちの弾を相殺する。

もちろんすべては消えないのでそれぞれの武器を使って叩き落とす。その最中、  
「ではいくわよ……」

「準備完了です……」

お互い背を向けながら何か話し合っている。

「ほら、どうしたの！」

レミリアが意地悪そうに挑発する。それに呼応するように、

「はあっ！」

2人が決着をつけるため、動く。

さて、こちらは先ほどにとり&雛チームを超ごり押しで破ったアリス&パチュリー。

先ほどは藍先生を引かせるほど暴れた彼女たちは、

「はあはあ……」

「これは強敵ね……」

苦戦していた。相手は大妖精&小悪魔チーム。

アリスたちはスペルを使い切ってしまい、息切れも激しくなっている。

一方大妖精たちは最小限の動きしか見せておらず、まだまだ余裕そうだ。

「こうなったら……」

「こうするしかないわよね……」

何かを思い立ったようにお互いを見据える2人。

次の瞬間、2人は全く同じようにある行動に出た。

## 第三十三話 咲夜の奇策

背中合わせの状態でレミアアたちの弾幕と対峙している咲夜と美鈴。

吸血鬼姉妹に挟み撃ちにされ、スペルの雨を食らっているこの状況。ただの人間や妖怪なら思考停止してもおかしくない状況だ。

しかし彼女たちは違う。

「あら、随分と余裕そうね」

「まあ、お嬢様の弾幕は嫌というほど見てきましたし」

「めいりん！ あなた笑ってるなんてすごいね！」

「まあ……そういうもんじゃないですか、弾幕ごっこって」

いままで微笑を浮かべてた咲夜だったか、一瞬にして生真面目な顔に戻ると、

「さて、本当に終わりにするわよ！」

「はい！ もう疲れましたしね」

美鈴に大声で発破をかける。

「へえ？ ずいぶんとからかってくれるじゃない」

その動作が気に入らなかったのか、レミアアが面白くなさそうに睨みつける。美鈴の

顔、その一点だけを凝視して。

それは、一瞬だけ周りが見ていないことを意味する。

「行くわよ！」

その一瞬を使って咲夜は、

「えっ？　咲夜何してるの？」

思いつきり突っ込んだ。ただ、レミアリアにはない。美鈴にだ。

もちろんこのままでは正面衝突で頭に星が出るだけだ。

しかし美鈴の身体能力は並大抵のものではない。

「いきますよー！」

わずかに下に移動し、両手を伸ばし、バレーボールのレシーブのように体の中心で合  
わせる。

そのまま手のひらに咲夜を乗せ、

「もういっちょよ！　そりゃー！」

真後ろに跳ね飛ばした。咲夜の移動速度が一気に増幅する。

さらに咲夜の手握られているスペルカード。それを上へと投げ飛ばし、スペルが発  
動する。

「幻世『ザ・ワールド』」

このスペルはただナイフを展開するだけのものではない。数秒だけ時を止められる。現在咲夜は投げ飛ばされ、レミリアに迫っている。

この時、時間を止めたら咲夜はどうなるだろう。答えは簡単、

「なっ……」

レミリアが絶句した。咲夜が瞬間移動したかのように、面前に現れたのだ。

「終わりです」

思考が追い付いていないレミリアの背中にナイフを軽くあてる。

「よっしや！ やりましたね！」

「ええ、でも油断は禁物よ。まだ妹様が」

「いえ、私たちの負けよ」

咲夜の言葉はレミリアの一言で打ち切られた。

「えっ？ それってどういう……」

「私たちがどつちかが負けたらもうリアアしよーって決めてたの」

「はあ……」

美鈴が困惑の表情を浮かべる。

「私たちは一心同体。完全勝利じゃないと意味が無いわ」

「なるほど……」

咲夜は相変わらずクールな表情を崩していない。——この瞬間までは。

「じゃあ……——咲夜あ！」

「めいりーん！」

「うわっ！」

「い、いきなりどうされたんですか？」

レミリアは咲夜に、フランは美鈴に思いつき抱きついたのだ。

驚愕の顔になった咲夜たちだったが、すぐに顔いっぱいの笑顔になった。

「負けちゃったし、たまにはこんなことしてもいいかなって？ お姉ちゃんと打ち合わせしておいたの」

「ですって咲夜さん！ 頑張つてよかったですね！ こんなことめつたに……あら、もう聞いてないか……」

抱きつかれて1.5秒後、鼻から忠誠心があふれでて昇天した咲夜であった。

## 第三十四話 実は似た者同士

アリスとパチュリーは窮地に陥っていた。

現在の対戦相手は大妖精と小悪魔。まさか負けないだろうとタカをくくってたアリスたちであったが、全くの見当違いであった。

大妖精と小悪魔はただ余り者同士が組み合わさっただけの弱小チームではない。

彼女たちがタッグを組んで2週間、練習に励んでいたのだ。

教えていたのは外の世界の男子高校生にしてこの学校の教師、朝霧優斗。

彼は人にうまく物事を教える能力が高い。さらに大妖精たちから厚い信頼を受けている。そんな3人で鍛錬を積み強くなるのは当然のことだ。

「こうなったら……」

「こうするしかないわよね……」

アリスたちは息も絶え絶えになっていて、相当辛そうだ。魔法使いというのは総じて体力が低い。

アリスたちのスペルカードは共に1枚ずつしか残されていない。もう彼女たちは特攻するという選択肢しか残されていないなかった。

「試験中『ゴリアテ人形』！」

「火水木金土符『賢者の石』！」

以前2人で魔理沙を追いかけたときと同じスペルカードを発動する。

アリスの周りには彼女の体より大きいゴリアテ人形、パチュリーの周囲には色とりどりの弾幕が展開される。

——そしてお互いの弾幕が動き出す。

「行きなさい！」

「これで倒すわよ！」

お互いの弾幕を潰そうと。……要は2人も同士討ちをしようとしている。

パチュリーの弾はアリスを360度囲んでいる。対してゴリアテは1体しかない。

「はっ！ もう終わりよアリス！ そのまま永眠するといいわ！」

ものすごくゲスな顔でパチュリーが叫ぶ。対してアリスは軽く舌打ちし、

「ゴリアテ人形……」

こう命令した。

「私のことはどうでもいい！ あいつを切ってしまいなさい！」

「はあ？」

「ほんとはあなただけ逝かせたかったけど……どうやら地獄の底まで一緒のようね！」

ゴリアテ人形がアリスの元を離れ、パチュリーに猛獣のごとく飛びかかる。

「うわっ！ 何コイツ……弾当たってるのに全然効かないじゃない……！」

「この密度を避けるのは無理そうね……まあ害虫が消えただけでも良しとしますか」

ゴリアテ人形が切りかかるのと、アリスが被弾したのはほぼ同時だった。

相手の弾幕があまりにも強力過ぎて、2人とも気絶している。そのまま重力に従って

落下していく。

「危ない……！」

素早く今回の審判の優斗が受け止めようとするが、結局スピードに乗った2人を同時に受け止められなかった。

ただ、スピードは殺すことができたので、2人が大したけがを負うことはなかった。

「えーつと……大妖精たちの勝ち。決まり手は自滅だ」

しばしの沈黙が競技場を支配していた。

が、平静を装っていた優斗たちも相当困惑していたらしく、

「はああああああ!!？」

「ええええええええ!!？」

「な、何があつたんですか!？」

優斗と勝利した大妖精たちの絶叫があたりに響いた。

## 第三十五話 魔理沙は実は難しいことをしていた

「それでね、咲夜。やつぱり最後のは反則だと思ふのよ」

「え？ いや、いまさら蒸し返さないでくださいよ」

「あつ、これ私知ってる。カリスマブレイクってやつよね！」

「妹様……それ禁句ですよ！」

「いま変なことを言ったのはこの口かしら！」

「痛たた！ もげちやうもげちやう！」

びよーんとほっぺを引っ張るレミリア。

レミリアとフランは弾幕ごっこで咲夜と美鈴の奇策によって敗れた。

終わった時間がちようどお昼時だったので、咲夜が用意してきた弁当で休憩中だ。

「ところでパチュリー様はどうしたんですか？」

「ああ、なんだか怪我して保健室に行っているらしいわよ」

「ちなみにパチュリー様の分は……」

「ああ、食べていいわよ」

「どうもです♪」

美鈴ががつついていているサンドイツチが、もう1人分ある。それを目ざとく発見したフランが、

「ねー、これもらつていい?」

「ええ、構いません」

口にサンドイツチを運ぼうとした瞬間、

「ちよつとまつてくださーい!」

背後から小悪魔がフランと背中をたたく。

「ぐえっ! —— ああ、小悪魔じゃん。どうだった試合は?」

「そういえば小悪魔つて大妖精と組んでたわね。覚えていた咲夜?」

「いえ、全く」

「う……皆さんひどいですよ」

「ごめんね! それでどうだった?」

「ああ、霊夢と魔理沙にぼっこぼこにやられました……」

えへへくと苦笑いする小悪魔。小悪魔と大妖精は決勝トーナメント3回戦で霊夢&魔理沙というチート級の相手と当たってしまったのだ。

一応、霊夢たちに1枚ずつスペルカードを使わせるまでは善戦したのだが、やはり実力差が大きかった。

「あら、霊夢たちはトーナメントの山の「反対ね」

「決勝まで行けば当たりますね」

「まあ、多分そこまではいけるでしょう」

咲夜の声は自信に満ち溢れていた。

次の日、

「いや〜今回も快勝だったな!」

「ええ、まあこのくらいはね」

昨日咲夜たちの話題に上がっていた霊夢と魔理沙。たつた今、準々決勝に勝利したところだ。

2人は現在「マスパで相手を被弾させる」縛りをやっている。これは魔理沙が面白くしようぜと言いつ出したことだ。

霊夢は最初反対したのだが、なし崩し的に決まり、協力してここまですべてラストはマスパで決めている。

「それよりもお昼よ」

「おお、もうそんな時間か。ちゃんと飯持ってきたか」

「何歳だと思ってるのよ」

「いや、金銭的な意味で」

「バカにしてんの？　ちゃんとそのくらい持つてるわよ。それよりあなたこそちゃんとしたもの持ってきたの？」

「ちゃんとキノコ持ってきたぜ！」

「どうせ毒でしょ……」

「こちらも余裕を見せていた。」

## 第三十六話 決勝戦

弾幕ごっこ大会最終日。

「恋符『マスタースパーク』!」

「ごっこまで強いとは思いませんでした」

準決勝でも霊夢と魔理沙は、盤石の強さを誇っていた。己に科した課題、「マスパで相手を倒す」という制約も順調にこなしていった。

今倒したのは早苗&諏訪子ペア。

風陣録5面ボスとエクストラボスという強敵にもマスパ縛りで勝ってしまう。そんなところがいかに2人がチートじみているかを表している。

「ふいふやつと決勝か」

「ええ、でもその前に、」

「ああ、もうこんな時間だな」

並んで歩きながら会話する。2人とも全く目を合わせていないが、お互い次にいうことは分かっている。

「昼食ね(だな)」

「この勝負もらいました！ 三華『崩山彩極砲』！」

「うわっ！」

美鈴が相手の出してきた弾幕を華麗にかわし、少名針妙丸に拳をたたきこんだ。それとほぼ時を同じくして、

「時符『プライベートスクウェア』」

「なるほど、周りを囲まれている……反則じゃないか？」

「あら、あなた相手ならスペルカードルール無視してよかつたんじゃないの？ まっ、これは多分、探せば隙間あるだろうけど」

咲夜が出した4つの正方形が、四方から鬼人正邪を襲った。

「美鈴、最後のあれはひどくなつたか？ 貴方の拳、私にはちよつと酷だったの」

「すみません……でも勝負ですから」

「あくあ。せつかく幻想郷ひっくり返そうと思つたのに……」

「あなた、もしかしてまたナイフ投げられるの？」

「おやおや、冗談に決まつてるじゃないか」

「美鈴、やりなさい」

「2人ともそうケンカ腰にならないで！ 行きますよ咲夜さん」

美鈴が気を使う程度の能力を発動し、2人を引き離す。そのままずると引つ張つて校庭の端つこまで移動させた。

「ちよつと、何をするのよ！」

「まあまあ落ち着いて。確かにあいつにはいろいろ苦労させられましたけど……いいじゃありませんか勝てたんだから」

「むう……あなたがそういうならいいってことにしとくわ」

「ふふ、なんだかかわいいですね」

「!? ちよ、何を言つて……」

予想だにしなかつた美鈴の一言で激しく狼狽している咲夜。そんなことは気にも留めず、美鈴はちらつと時計を見る。

「わわく何も聞こえないく。そんなことより、もうお昼ですよ。早く食べましょう！」

「わ、わかつたわよ」

「今日のメニューはなんなの？」

「いつでも安心・安全・安価のキノコだぜ！」

「何其のうさんくさい宣伝みたいな謳い文句は」

美鈴が咲夜をからかっている頃、霊夢と魔理沙も昼食をとっていた。やはり校庭の隅、枝だけの桜にもたれかかっていた。

「それで本当に大丈夫なんでしょうね？　これでお腹壊しましたー、なんて洒落にならないわよ。ちなみにどこでとつてきたのよ？」

「もちろん森だぜ！」

「まあ、魔理沙のことだし……大丈夫よね」

「なんだ、そんなに不安か？　なんなら食ってみろよ」

ぐいっと差し出されたきのことを見て霊夢は一瞬嫌そうな顔をする。が、すぐにあきらめたようにため息を一つついて、

「はいはい、わかったわよ」

「さすが霊夢なんだぜ」

一個丸々、一口でほおばった。

「どうだったか？　ちゃんとあぶつてあるんだぜ」

「悪くはない……かしらね」

「だろ？　毒なんかないんだぜ」

魔理沙がニカツと笑うと、珍しく霊夢も微笑み返す。そこには2人の信頼、そして次の試合に勝つという決意が込められていた。

一時間後、決勝戦、霊夢&魔理沙VS咲夜&美鈴

「咲夜さん、あの2人どうしたんでしょ?」

「さあ、知る由もないわね」

咲夜たちはすでに空中にとどまっていて準備ができていた。が、

「なんでこんな時に綺麗に2人とも食あたりするのよ……」

「さ、さあ? だが1つ言えることは、こういう状況を『フラグ回収』というらしいぜ……」

「誰から聞いた?」

「霖之助」

「信用ならないわね……」

霊夢たちはあの時食べたキノコが2人のおなかをむしばみ、唸っていた。

魔理沙の言うとおりの見事なフラグ回収である。

ほうきとお祓い棒を杖のような状態にしないと立っていることすらできない、かなり

重症のものだ。

「こうなったら……」

「ああ、私と霊夢は……」

2人でうつむいたまま震え声で宣言する。

「棄権します！」

咲夜と美鈴の優勝が決まった瞬間であつた。

「やりましたよ！ 優勝ですよ優勝！」

「最後がすごいあつけなかつたわね」

表彰式も終わり、紅魔館へと帰っている2人。

「咲夜！ おめでとう。よく頑張つたわね。さすが私のメイドね」

「はい！ ありがとうございます！」

「次こそは負けないからね！」

「次も手加減しませんよ！」

レミリアと咲夜も後ろから合流してきた。みんなそろつての帰り道である……

「あれ？ 小悪魔とパチエは？」

「パチユリー様はまだ療養中ですよ。——あれ？　そういえば小悪魔は？」

咲夜が思わず忘れてしまった小悪魔。彼女にもいろいろと用事があったのだが深く突っ込む者もない。やはり影が薄いのであろう。

「ねーねーお腹すいた！　早く帰ろう！」

「そうですね。今日は本気でいっちゃいますよー！　美鈴、あなたも手伝ってね」

「あ、はい！　咲夜さんよりおいしいの作ってもいいですよね!!」

「ふふ、私に敵うのならね」

紅魔館の住人達もいつも通りの日常に戻っていく。弾幕ごっこ大会というイレギュラーが入ってきてもうこうしてゆつくりと、時は進んでいくのであった。

## 冬休み

## 第三十七話 霖之助の苦悩

森近霖之助は普段は香霖堂という何でも屋の店主をしている。

が、もう一つの顔として、幻想高校の国語教師を兼任しているのは誰もが知っていることだ。

高校内では数少ない常識人の立場で周りの暴走を止めることが多かった。

春に突然教師となった外の世界の住人、朝霧優斗が来てからはその役割が半減したが、代わりに別のことで悩まさせるようになった。

「むむ……どうするか」

1人、香霖堂の隅の椅子に座って頭を悩ませている霖之助。

彼は1年2組の担任をしている。早苗やうどんげなどがいて、テストではいつも上位の位置を占めていた。

ところが、優斗が1年1組に副担任としてきてから、だんだんと平均点でおいぬかれるようになっていったのだ。

特に彼が絶対の自信を持っていた国語で抜かれたときは少なからず布団で落ち込ん

だものだ。

「どうやったらあんなに点数が上がるんだろうか……」

「教えてほしいか？」

「ああ、来てたのか」

霖之助のつぶやきに魔理沙が反応した。

魔理沙はちらつと霖之助の手元を見た。そこにあるのはテストの点数データとクラスごととの平均点。

魔理沙は2度ほどデータと霖之助の顔を見比べた後、すべてわかったというように、にやつと不敵な笑みを浮かべた。

「なるほど……優斗に嫉妬しているわけか」

「違うからな。不思議に思っただけだ」

「それを妬みっていうんだぜ」

「まあ、羨ましく思うことはあるよ。確かに知識量では勝てないからね」

「外の世界に詳しいもんな」

彼自身、優斗が外の世界のことについて豊富なのはよく知っている。というか、すでに根掘り葉掘り聞いている。

しかし、聞けば聞くほど訳が分からなくなる。ますます外の世界への謎と興味が増し

ただけだった。

「よっし！ 物は試しだ！ 聞きに行こうぜ！」

「うわっ、ちよっ……」

魔理沙に引つ張られ、香霖堂の外へと連れ出される。

「ちよ、ちよつと待つてくれ。わかった、行こう。けどちよつと準備させて」

「準備なんてする必要あるのか？」

「一応この店の店主だぞ？ 戸締りをしとかなないと」

「私しか客がいないから心配ないぜ」

「いや、霊夢もいる」

「それはそれで悲しいな……わかった。早くするんだぜ」

「ああ」

用意といつてもすることは簡単だ。「休業中」の札を店の前にかけるだけ。

魔理沙の言うとおりほとんどすることがなく、少し悲しくなったのは内緒だ。

「さてと……準備完了だ魔理沙。ちなみに霊夢はどうしたんだ？」

「あいつは初詣の準備で大忙しだぜ」

「ふーん」

初詣は博麗神社にとって大変貴重な収入源だ。遊んでいる暇などないのだろう。

「よっし！ 私についてこいー！」

「優斗の家くらいわかるさ」

横に並んで寄り添うようにして、ゆっくりと歩を進めていく。

## 第三十八話 霖之助は見る

朝早くから歩いた結果、魔理沙と霖之助は太陽がまだ東に傾いているときに、大妖精の家へと到着した。

「さーて、じゃあドアに突っ込むぜ！」

「さて、なんでそうなる」

「さっさと教わってすぐに帰りたいからな。まあ、大妖精とどっか行ってもいいんだが。

——とにかく早く終わらせるんだぜ！」

「あんまり迷惑かけるんじゃないよ」

「わかってるぜ」

魔理沙が家のドアをどんとどんと強くたたくと、午前中ということもありしばらく間が空く。少しドアの前で待っていると、ゆつくりとドアが開いた。

「はい。どちらさま……——うわっ！」

「ちよ、なにやってるんだ」

大妖精がドアを開けたとたん、魔理沙が家の中へ駆けていく。

たちまち大妖精の華奢な体が吹っ飛ばされた。素早く霖之助が大妖精の様子と確か

める。こういう事態に多々遭遇しているので、対処の仕方は体が覚えているのだ。

「おーい。大丈夫か」

「うん……霖之助先生？ どうしてここに」

「魔理沙の付き添いだ。悪かったね、迷惑掛けて」

「い、いえ……ところでなんで魔理沙に付き合わされたんですか？」

「分からない。大方荷物持ちでもさせたかったんじゃないか？」

「あ……—あ……—」

何かを悟ったように大妖精が首を縦に振るが、霖之助は相変わらず真顔を崩していない。

霖之助と大妖精が魔理沙の方を見てみると、魔理沙が優斗に絡んでいた。

「優斗、さっさと数学教えるんだぜー！」

「まず大妖精を起こしてからにしろ」

「いや、もう助けてあるぜ」

優斗が反射的にドアの方を見る。視線を向けられた霖之助は、魔理沙への愚痴と大妖精の無事を報告する。

「まったく……あんまり無茶をするなよ。大妖精の方は問題ない。まだちよつと錯乱状態だけど」

「あれ？ 霖之助先生、付き添いですか？」

「付き合わされただけだ」

「いや／＼さすが優斗だな。まさかこんなに早く終わるとは思わなかったぜ」

「ふむ……さすがだね」

魔理沙が持つてきた数学の難問はほんの三十分ほどで攻略できた。

確かに優斗は現実世界で高校生だったので、この程度の問題はすぐに答えられるだろう。だが、あの魔理沙に勉強を深く理解させるのはかなり困難なことではないだろうか。

それを涼しげな顔でやってのける彼は一体どんな思考回路をしているのだろうか。一番近くにいる大妖精でもよく分かっていないので、恐らく説明されることはないだろう。

「さて、私はちよつと出かけてくるぜ」

「帰るのか？ それなら僕も香霖堂に戻るよ」

「違う、出かけるんだ。いくぞ、大妖精」

急に話を振られた大妖精は、反応できずしばらく固まる。

「……私!？」

「他に誰がいるんだ。いろいろ買いたいものあるからな。一緒に見てもらいたいんだ」  
「いや、今日はこの後予定が……」

実は大妖精、というより優斗が初詣のことで霊夢と早苗から相談を受けていて、この後優斗共にある場所へ行く予定があるのだ。今日は大みそか。早く準備しないと初詣の客が来てしまう。

「まあ、いいんじゃないか。午後までに帰ってくれば十分間に合うし」  
「でも……」

「大丈夫、大丈夫」

「ほら、お墨付きも出たし行こうぜ！」

「う、うん。じゃあお昼くらいには戻るから」

「ああ、いつてらっしゃい」

ただ、優斗は頭脳明晰な割に能天気なところもあるので、軽い調子で魔理沙に賛同した。

## 第三十九話 魔理沙の楽しみ&amp;趣味

霧雨魔理沙は好奇心旺盛である。とにかくなんでも興味を持つのが彼女の特徴でもある。

時としてそれは余計なことに首を突っ込むというが、本人は全く自覚していない。

さて、最近魔理沙が興味を持ったことはなんだろう。それは今一緒にいる相手の相談に乗る&茶化すことである。

「はあくしつかしまだ駄目なのか？」

「はは……いろいろあつてね」

魔理沙の嘆息のため息で返す大妖精。目を閉じて軽く首を振っていて、あきらめの様子さえ見受けられる。

「まったく……お前がいつまでもそんなんだからいつまでも伝わらないんだぜ。あいつはばっかみたいにお手、いや、無自覚っていうのか？」

「それはわかってるけど……」

「まっ、お前にその気がないなら私がもらっちゃうけどな」

「!? それって……」

大妖精の鋭い反応に、魔理沙は新たな面白いことを見つけたとばかりにまくしたてる。

「まったく、今まで気づかなかったのか？ いいか、私はあんなに完璧な人間を見たことないぞ。頭脳は明晰だし、だれに対しても優しいし、弾幕ごっこもなかなか強いしな。そりやお前だけではないさ」

「そ、そんな……」

「まあ、お互い頑張ろうな」

「ふええ……」

魔理沙の迫真の演技に、顔を手に置いてうずくまってしまふ。強力なライバル出現、とても思っているのだろう。

（ありやりや、ちよつとやりすぎたか？ こういうところで幼児だから優斗も気づかないんだぜ。なんかすつごく楽しいな）

魔理沙は自分かものすごく不純な考えをしてると気づいていないだろう。

が、彼女の本当にもちつぽけな良心が働いたようだ。わざと声を裏返し、明るい調子で大妖精ににこやかに話しかけた。

「なんてな！ 冗談だよ」

「え？ でも優斗は確かにすごい人間だし……」

「まあ確かにそれはあるな。けど問題ない、大丈夫だ。みんなお前に幸せになってもらいたいと考えてるから」

「え？ それって……」

「みんな気づいてるぞ。知らなかったか？ みんなお前らの関係にニヤついてるぜ？」

「そ、そんなあ……」

大妖精なりに思いの丈を伝えるビジョンがあつたのだろうか。それが簡単に打ち砕かれて、また崩れ落ちた。

しかし、彼女にも意地がある。このままいじられ倒されるだけで終われない。彼女のプライドに火が付くと同時に、反撃が開始される。

「ま、魔理沙はどうなのさ……」

「どうなのかって？」

「霖之助との関係のことだよ。ただの友達には見えないけど」

「はあ？ ——まったく、お前はまだまだ子供だな。そんなわけあるはずないだろ」

「ほんと？ 隠してるんじゃないの？」

「まあ確かに便利なやつではあるけどな。恋愛感情なんてみじんもないぜ。大体あいつ半妖だし」

言葉巧みにかわされてしまった大妖精だったが、ここで終われるわけがない。そのく

らしいの根性は魔理沙につけられている。すつくと立ち上がって、魔理沙を正面に見上げる。

「わかったよ……じゃあ確かめよう」

「どうやってだ？」

「ついてきて」

眉一つ動かさずに、スタスタ歩き出す。魔理沙もつられて手を頭の後ろに組んで気だるそうにしながらも進んでいく。

「くしゅん！」

「おや、風邪かい？」

「今日は寒いですからね」

唐突に優斗からクシヤマが聞こえた。なぜ出たのかなんて彼は知る由もないだろう。

「暇だねー」

「暇ですなー」

霖之助は優斗の顔をちらりと確認した後、覚悟を決めたように向き合った。

眼鏡の奥に光るのは霖之助お得意の気だるそうな半目。はたから見ればやる気がな

さそうだが、内心はかなり本気である。

「優斗、ちよつと話があるんだが……」

「なんですかー」

魔理沙と大妖精、優斗と霖之助。2つの場所でそれぞれの考えに沿って勝負の時が始まる。

## 第四十話 大いなる勘違い

「優斗、これを見てくれるか」

眼鏡をずりあげながら霖之助は懐から一枚の紙を取り出した。

「これは？」

「1年1組と1年2組の国語の点数グラフさ」

「どれ……うわつ、最初こんなに差あつたんですか」

4月の時点では、棒の高さが2組のほうが圧倒的に勝っていた。が、ある月を境に1組の棒グラフが右肩上がりには上昇していた。

「ところが9月になると目に見えて上がってきた。明らかに優斗が入ったからだろう」

「そうですかね？ クラスのみんなが頑張ってくれたことが一番だと思います」

「そうだとしても、やる気を出させたのは優斗、君の功績だ」

「そこまで言い切った後、霖之助は再び優斗のほうへ視線を向けた。いよいよ疑問の革新へと迫る。

「優斗、君は本当に学生なのかい？ 僕には一介の高校生には見えない」

霖之助の最大の疑問でもあり、また純粹な興味でもあること。それはそもそもなぜ普

通の高校生の優斗がここまでスペックが高いのか？ という根本的なものだ。

彼は1年2組の担任であると同時に、すべての学年の国語教師を担当している。

自分ではそこそこわかりやすく教えられているつもりであった。しかし、データとして現実な結果が出ている。認めざるを得なかった。

そこで直接聞くのが一番早いだろう。霖之助はそう考えたのだ。

そして、その答えは、――

「まあ……幻想郷らしくていいんじゃないですか？」

一瞬、霖之助の頭が真っ白になった。

すぐに目を閉じ、冷静に頭の中を整理する。

（なるほど……幻想郷らしいか。まったく答えになってない気がするのは僕の気のせい  
か？）

考えるほど、形容しにくい笑いがこみあげてくる。

なるほど、彼らしい答えだ。きつと彼なりに幻想郷に溶け込める方法を考えているの  
だろう。

どうせ彼はたいていのことはできるのだ。ならば彼のまねをしようとは思わないほ  
うがいいだろう。自分は自分でいいではないか。

霖之助は優斗の一言でここまでのことを一気に悟った。いろいろな思いが脳内を駆

け巡っている。

結局、霖之助と優斗は教え方も違えば考え方も違う。うまく国語を教えるには自分なりの方法を考えるしかないのだろう。

(なるほど。さすが優斗だ。こつこつと簡単に淀んでいたものが晴れるなんて)

霖之助はくつくつとこみあげてくる笑いを抑えながら、再び優斗のほうへ顔を整え、向いた。

「参考になったよ。ありがとう」

「あれ？ もう帰るんですか？」

「ああ、もう十分だ。じゃあね」

「あ、はい……」

満足げな顔をして、霖之助はドアを閉めた。

「何がわかったんだらう。超適当だったのに」

優斗のつぶやきは誰にも聞かれなかった。

## 第四十一話 さとりの裏の趣味

「で、なんでまたこんなところに？」

魔理沙が率直な感想を大妖精にぶつける。

大妖精は今日、魔理沙にある疑問を持った。

魔理沙は普段、アリスやパチュリーの家にいろいろなものを借りに行っている。（それをきちんと返すとは限らないのだが）

それと同等の頻度で、香霖堂へも足しげく通っている。普段から霖之助を振り回しながら明るくしゃべっている魔理沙は誰の目から見ても楽しそうだった。

「これでハッキリわかるからね。魔理沙の本心が」

そこで大妖精が思った疑問。それは、「魔理沙本人は気付いていないが、心の奥には恋心を秘めているのではないか？」というものだ。

大妖精が魔理沙に逆襲したいのももちろん理由がある。

大妖精の優斗への思いは、彼以外、ほとんどのものにばれている。

当然、そんな面白いことをみんなが見逃すはずがない。いつもニヤニヤした笑いを浮かべながら、大妖精を言葉攻めに行っている。

もちろんみんな、大妖精の幸せを願っている。

が、優斗のことを持ち出すと、すぐに言葉少なになってしまふ大妖精がいじつて面白すぎるのだ。

そんな不憫な大妖精が自分がやられていることを魔理沙にやり返したくなりたくなるのも当然だろう。

「さあ、行くよ魔理沙！」

「わかった。ほら、乗れ」

「ふふ……楽しみだな」

いつもはやらない、何か企んでいるような笑みを浮かべる。

二人を乗せたほうきは、地下へと続く巨大な穴に猛スピードで突っ込んでいった。

「そんなくだらないことでわざわざ大晦日に来たんですか」

「くだらなくないです！」

「あー、すまんなさと。さつき同じようなことを私も言ったんだ」

「まあまあ、大妖精さん。そうなる気持ちもよく見えますから。あなたにしては珍しいですね」

地底の主、さとりは第三の目をさすりながら大妖精をなだめる。

大妖精と魔理沙はさとりに会うためにここへやってきたのだ。

さとりは学校の心理カウンセラーとして、大妖精たちとも面識がある。能力のせいで何でも見透かされるせいでカウンセラーとしては不評だが。

大妖精たちが来たのは、もちろんそのさとの能力目当てだ。

「ふくん。魔理沙さんの本心ですか」

「さすが先生。わかっていますね」

「あなたたち妖精は特に読みやすいですよ。氷のなんてのぞかなくてもいけますし。それにあなたも最近似てきましたよ」

「チ、チルノちゃん?!」

「いや、認めたくないのはわかりますけど……。イチヤイチヤしたいってやましい心しか見えないですよ」

「えっ!?! ——そ、そんなこと……ないもん!」

大妖精は顔を真っ赤にして、手をバタバタ振って反論する。

それを見たさとりは、今までの無表情から、片方の口角を上げて不敵に笑った。目を見開いたその顔は、ゲス顔という表現が適切だろうか。

「今の間が証明している気もしますが……なんといいてもですね、」

地底の主の本気が、大妖精に向かう。

## 第四十二話 大妖精の救世主

さとりは基本的にSっ気がある。地底の管理人ということとは関係ない。おそらく能力のせいだろう。

心が読める程度の能力の性質上、相手の弱みを握ることが多い。別に彼女はそれをもとに金をゆするなんて野暮なこととはしない。幻想郷では逆に弾幕で返り討ちになることもあるからだ。

しかし、せっかく手に入れた情報を使わないというのももったいない話だ。では、どうするのか。

「なんといつてもですな……すぐく面白いんですよ。それが一番です。なんですかねあの優斗の態度。そしてやきもきしているあなたを見ているのもまた面白い！ さつさと夜這いでもすればいいのに」

「う……それはそうかもしれないけどさ……」

さとりはどうも、人をいじって楽しむことに執念を燃やしているフシがある。

「あの態度、まさにラブコメ！ ドロドロしてないですが、書物のような展開！ もうなんですかね、とにかくすばらしい！」

「おいさとり、あんま自分の世界に入るな」

1人で大仰に叫んでいるさとりを魔理沙がたしなめる。

さとりは大きく上げた両手を戻した後、元の冷静な顔に戻り、今度は口元に手をやり考え込むような顔をした。

「しかしあそこまでとなると……不能の可能性があるかもしれませんね」

さとりは真剣な口調だった。が、大妖精は小首をかしげている。

「不能って？」

「ああ、知りませんでしたか。不能というのはですね……」

「ちよつと待て。それは……」

魔理沙が慌ててさとりの口をふさぐ。そのままさとりを引つ張つていき、二人にしか聞こえないくらいの小声で、

「それを教えるのは……やめておいたほうが……」

「いいんじゃないですか。どうも夜這いという言葉も知ってるみたいですし」

「そうかもしれないが……なんかこう……罪悪感みたいのはないのか？」

「ふふ、魔理沙さん意外と優しいんですね」

「誰だつてそう思うんだぜ。お前、もしかして……」

「なんかいいじゃないですか。健全な子にポルノ叩きつけるような罪悪感つて」

ここにクズがいた。

薄ら笑いを浮かべていて、心底楽しそうである。

「まあ、あれが健全かって言われるとわかんないですけどねー」

「だったらやめとけ」

「まあ、どっちにしろおもしろそうなので教えてきますねー」

「おまつ、ちよつと待て……」

ルンルンと大妖精のほうへ走っていく。一人の純粹であろう妖精の心に闇が刺さってしまふのであろうか。

「大妖精さん、不能ってのはですね……」

その時――、

「させないよー！」

「うわっ！ 何をするんですか！」

さとのりから突然現れた誰かが羽交い絞めにし、さとのりの口をふさいだ。

「大ちゃんを汚そうとするなんて見逃せるはずないでしょお姉ちゃん！」

「離しなさいこいし！ くっ、力が強い……わかった、わかりました！」

古明地こいし。無意識を操る程度の能力にして、さとのりの能力が効かない唯一の相手である。

普段はさとりと一緒にいることがほとんどだか、よく消えている。さつきまでさとりにも居場所がわからなかった。

「はあ……今までどこに行ってたんですか？」

「まあいろいろとね。さつきまではちよつと見てたんだ」

こいしが見るものとは、基本的に一つしかない。

「見てた？ 誰の無意識をですか？」

「さつきずつと話聞いてたからねー」

「大妖精さんの心の中なら私が見透かしてますよ」

「違う違う、魔理沙のほうだよ！」

「うえっ!？」

突然出てきた自分の名前に魔理沙はすつとんきような声を上げた。今まで安全地帯にいたかと思ひ込んでいたが、突然の落下である。

「へえ……ちなみに魔理沙さんの乙女心の度合いは？」

「私も気になる！」

にやけ顔に戻ったさとりと、待つてましたとばかりに顔を輝かせる大妖精がこいしに詰め寄る。

「えーとね、『無くはない』程度かなー。これから変化する可能性は十分にあるよ」

「ほら、その程度だろ？ 私は潔白の身だぜ」

「でもあるつてことですよね」

「やったね！ 魔理沙にそんな感情があるなんて知らなかったなー」

「大妖精さん、さつそく霖之助さんに報告に行きましょう。魔理沙さんに似合うのはラ  
ブコメより甘々な純愛ですよ！ 霖之助さんに頭を撫でられて、デレデレになる魔理沙

さんを激写しましょう！」

「そうだね！ さつ、全速力でここから出よう！」

「ちよ、ちよつと待てー！」

変なところで弱みを作ってしまった魔理沙であった。

この後、さとりと大妖精を押しさえつけるのに相当苦労したとか。

## 三学期

## 第四十三話 文の取材記事

「うむむ……大変困った事態になりました……」

1月末日、射命丸文は1人、教室で頭を抱えていた。

頭を叩いてみたり、こねくり回しているその姿は、彼女にしては珍しく、スキだらけだ。それほど切羽詰まっている状況に追いやられているのである。

その、文を困らせている頭痛のタネとは、

(ネタがありませんっ……)

彼女が、よく発刊している文々。新聞。そこに書く、話題がないのだ。

1月の初めはお正月特集として、教師たちに取材した。

そこから1か月間。びっくりするほど何も起きなかった。情報収集能力では、他の誰にも負けないと自負していた文が駆けずり回っても、いいのが全くなかった。

(これではさすがに……)

静かに首を振る。手元にあるのは、三枚の取材記事。

1枚目は、『魔理沙の調子がおかしい?』という題名である。3学期の始業式から、魔

理沙のボケが少し弱くなったというものなのだが、

(テンションが変わることなんていつものことですよ)

無言で、メモを引きちぎる。

続いて、『大妖精、なんだかとても嬉しそう』。これはその名の通り、始業式から大妖精が、へらへら嬉しそうな顔をしているというものなのだが、

(ドーせあの人にかわいいと言ってもらったんですよ)

一蹴すると、メモを引き裂いて、ゴミ箱に突っ込んだ。

3つ目は、『鬼たち、節分の日には逃走か?』というもの。もうすぐ節分で、本来ならば萃香と勇義が鬼をやるのだが、2人が本当に体が傷つくからやめると、申し出た話だ。

(これはもう知られてますしねえ……後任の鬼も決まっていますし)

男たちが鬼に駆り出されることになっている。記事に出すのには、遅すぎるだろう。

(つて、冷静に考えてても何も変わりません。動かなくて)

沈んでいた顔を上げ、教室の外へと歩いていく。

頭をかきながら、後ろのドアを開けようとするが、

「あれっ?」

立てつけが悪いのか、ガタガタいうばかりで開かない。

「えいっ……おかしいですね」

両手で取っ手のところを持ち、力を込めて横へスライドしようとするが、やはり動かない。

「このっ……!」

少しいらだちながら、思いっきり取っ手をドアを移動させようとしたその時、

「お困りのようねー!」

「うわっ! ——なんだ、あなたですか」

勢いよくドアが開いた瞬間、上からにゅつと人が降ってきた。空中で静止し、さかさまの状態で文を見つめていた。

その者の足元、つまりドアの上側には、真つ黒な世界が広がっていた。つまり、スキマであるので……

「なんですか紫先生?」

「あら、不機嫌そうね。せっかかないネタを仕入れてきたのに」

「なんですか!」

「2月14日にあるイベントなんだけどね……」

紫の入り知恵は、学校全体を巻き込むことになる。

## 第四十四話 文のチョココ取材①

「なるほど……外の世界にはそんな行事があるのですか」

紫から細かく説明された文は、大きく首を縦に振る。

2月14日に外の世界で行われるイベントといえば、想像できるのは1つ、バレンタインデーである。いろいろな人に感謝の気持ちを込めてチョココレートを贈る、人によって好き嫌いが分かれるイベントだ。

ちなみにチョココがもらえない人が嫌いであることが多い。

「そして一番大事なのが……」

「本命チョコ、というわけね」

自分が思いを寄せる人にチョココレートを渡す、いわゆる本命チョコが一番ネタになると文は判断した。

少し考えるだけで、本命チョコを渡しそうな顔がすらすらと頭に浮かんでくる。文はその人たちに、集中的に取材しようと決めた。

——よしよし、これはもらった。

自分の顔がゆるむのを止めることもなく、文は素早くメモ帳を取り出した。すばやく

効率よい取材計画を立てていく。その気迫は天狗の本気を垣間見せた。

「ありがとうございました！」

手帳を固く握りしめ、廊下へと駈け出して行った。

「よしよし……いい感じになってきたわね」

紫がとてもいい笑顔になっていることにも気付かずに。

夜の竹林はなかなか不気味な場所だ。油断していたら、即捕食されてしまいそうな空気が流れている。

ガサツガサツ

そんな中、文は茂みに潜んでいた。ご丁寧にも、頭に木の葉をかぶせて迷彩をしている。カメラを向けているのは、ある人物の家の中。先ほどからキッチンにじっとレンズを構えている。

（ふむ……そろそろですかね）

キッチンにその人物がやってきた。手には、香霖堂で買ったであろうチョコを持っていく。ルンルンととても気分がよさそうだった。その人物は、

（しっかし、自分の担任を盗撮するのみなかなか緊張しますね）

文の担任の慧音であった。見つかったら頭突き間違いなしであろう。

「さて、作るか〜♪」

窓越しに慧音の上ずんだ声が聞こえてくる。それは、普段は絶対見せないであろう甘ったるい声を聴いた文は思わず歯噛みした。

(録音できる機械があれば…)。

文の手元にあるのには、一眼レフに見える、旧式のカメラのみ。そもそも録音機は幻想郷にはほとんどない。

文の知り合いで持っているのは小悪魔くらいだろうが、文はそれを知るはずもない。「ふむふむ……まずチョコレートを溶かすのか。それでもう一回形を作り直す……なるほど、これで……」

本を読みながらチョコを作っている慧音の顔がどんどんとろけていく。読んでいるのは、チョコレートと一緒に買った、「これで完璧チョコの完成できるスーパーマニユール!」という解説書。香霖堂ではこれが飛ぶように売れた。

(でもあの顔はレアですね! 新聞に載せたら命が危なそうですが……)

普段ならば、慧音は一発で文に気付くだろう。ただ、今の慧音は目の前のチョコに集中しすぎていた。完全に脇が甘い。

珍しい写真が撮れてご満悦の文は、竹林を抜け出した後、自身の家へと帰っていた。

バレンタインデーまであと2週間ほど。取材先はまだまだいくらでもある。

## 第四十五話 文のチョコ取材②

「さあて……」

翌日の夕方、文は別のところに来ていた。

前日撮った慧音のキャラ崩壊写真で、新聞を八分の一ほどが埋まった。一面トップにこれを持ってくると、慧音に頭をぶち抜かれる恐れがあるので、あまり大きくは書けないのである。

別にバレンタインデーは、ゴシップだけしかない行事ではない。甘く、ほほえましいシーンだっていくらでもある。そう文は考え、ここにやってきた。

「すみませーん。射命丸文なんですが……取材よろしいでしょうか？ ——あの？ おや、寝ていますね……」

そのの門番の肩を何回か叩くが、起きる気配が感じられない。気にせず、その横を通り過ぎることにした。

ちようど日没を迎え、あたりが暗くなってくる。その対比で、館の中が明るく見えってくる。程よく明るい廊下を文はすたすたと歩く。

二十分ほど屋敷の中を歩き回り、お目当ての部屋を発見した。通常なら侵入者には、

即座にここのメイド長が対処に来そうなものだ。だが、これまで文がいろいろな部屋を漁っても何の反応もなかった。それだけ、メイド長も手が離せないのである。

(なんだか緊張しますね……)

慎重に、その部屋のドアノブをあける。そこには――、

「ふ、フランお嬢様!? 今度はいったい何を……」

「何って……甘みと酸味を共演させたらいいものができるでしょ!」

「確かにそういうものもありますが! だからって、だからって……」

プルプル震えながら、咲夜は問題の品を手取る。

「トマトとレモンと酢を丸々入れるなんて、いくら何でもやりすぎです!」

「そ、そうなのか?」

「そーなのだ……って違います! ——けど可愛い……」

文はその様子を、メモを取りながらのぞいていた。

これは記事になる……のだろうか。文にも判断しがたかった。確かに、すっぱいものを入れまくったフランの行動は面白いかもしれない。

だが、それを書いた瞬間、ナイフが飛んできそうな気がする。よつぽど面白いものが書けないかぎり、ナイフという代償は払えなかった。

そう文が悩んでいると、背後からゆつたりとした足音が聞こえてきた。

(マズっ……)

慌てて空いていた窓から外に出て、中の様子を観察する。自分がいたところに紅魔館の主、レミリアが通った。

こちらに気づいていないようで、ドアを開け、フランたちのいる部屋へ入って行った。

「ふふ、お困りのようね咲夜」

「お嬢様！　こちらへ来てはなりません！　チョコがすさまじく……パチュリー様も犠牲に……」

「ふっ、任せなさい。神槍『スピン・ザ……』」

「それをここでやるのはやめてください！　屋敷に住めなくなります！」

「わかった！　じゃあ私がやる！」

「ちよ、やるってまさか……」

「炎剣『レーヴァテイン』！」

「させません！　『咲夜の世界』！」

(なんだか……楽しそうですね)

これ以上は見えていられないとばかりに、立ち去っていく文。

十分写真は撮れたし、記事にするのは確定だ。あとは咲夜がどうかしてくれるだろう。

## 第四十六話 文のチョコ取材③

「魔理沙さん！ そのチョコは誰に渡すんですか！ つてか、絶対霖之助先生ですよ  
！」

「いきなり来て何言いやがる！」

紅魔館での一件から二日後、文は魔理沙の家に突撃をかけていた。

実は、始めのほうから魔理沙に目星をつけていた。没になった取材記事の中に、『魔理沙の調子がおかしい』というのがあったのだが、文はその原因もぼつちり突き止めていた。

「まあ落ち着いてください。実は私、古明地姉妹と大妖精さんからおいしい情報をいただいております」

「さとりたちと大妖精？ おい、まさか……」

「私の行動範囲は地底までも網羅しているんですよ」

「大晦日のアレかー！」

ギヤーと、叫び声をあげながら頭を抱える。

大晦日、魔理沙と大妖精はさとりを訪れている。そこで魔理沙は、さとりと大妖精に

さんざんいじられて、それ以来ボケが弱くなっていた。

「お前の言いたいことは大体わかった。どうだ、取引をしようじゃないか」

魔理沙が呼吸を整えつつ、そう提案した。あまり文に詮索はされたくないようだ。

「実は、とっておきの情報を持っている。それと教えてやるから、これ以上かかわるな」

「ふむ……情報次第ですね。どんな内容ですか？」

「大妖精がアイツにチョコを渡す場所と時間だ」

「ああ、それなら決裂ですね」

「うえっ!!」

断られるとは思わなかったのか、魔理沙ののどから大きな声が飛び出る。

この情報は魔理沙の切り札だった。必ず文を落とせる、必殺のスペルカード。そう思っていたのだが、計算が一気に狂う。

「なんでだよ!! お前にとってはのどから手が出るほど……」

「一歩遅かったですね。私、大妖精さんとさとりさんから取引を持ちかけられたんですよ」

「何だっ!?」

文の口角がわずかに上がる。

「『チョコをあげるから、2月14日までそっとしておいてほしい』と、言われましてで

すねー。ほら、見てくださいこのチョコ」

ポケットから取り出されたのは、ファンシーに包装されたチョコと、ごく普通の板チョコだった。

「さとりさんからののはなんと、外の世界のやつですよ！ 大妖精さんのはかわいくて……たまりません！ さすがの私でも了承せざるを得ませんでした」

「そんな約束破つちまえばいいだろ！ こっち側につけよ」

「お断りです。一応、約束は守れてというのが天狗の教えですし。それに……」

「大妖精を応援したい」という言葉は飲み込んだ。こんな発言は自分らしくない、そう文は思った。

「そんなわけで、これから密着取材させていただきますねー」

「ああ、わかったよ……」

「許可をいただいて何よりです」

「密着できるならな！」

魔理沙は天に向かって叫ぶと、胸ポケットから細長い紙きれを取り出す。

「ちよ、何するんです！」

「恋符『ダブルスパーク』！」

「力づくってわけですか。まあ、今はいったん退きましよう。また来ます！」

「2度と来るなあ！」

開いていた窓から大きな黒い羽根をはばたかせ、飛び出していった。その顔は、終始笑い続けていた。

## 第四十七話 文のチョコ取材当日編①

「はあ……はあ……心臓が高鳴りますね」

文は、鼓動が早くなる胸を、独り言をつぶやいて抑えようとする。今日は2月14日。文が待ち望んだバレンタインの日だ。

この日のために多くの下調べをしてきた。慧音やフラン、魔理沙などなど、10数人に突撃取材をかけ、多くの傷を負ってきた。しかし、今！ その成果が！

「つてことで魔理沙さん、あなたに決めました！ 勝手に密着取材させていただきます  
！」

「それだけ取材しといてなんで私に行きつくんだ！」

「いろいろ取材してわかったんですよ。結局魔理沙さんが一番面白いですね。感服です」

「おちよくつてんのか？」

露骨に顔をしかめる魔理沙。文はそれを軽く流し、軽い調子で、

「まあまあ。何も四六時中つてわけではありませんよ。他の人にもマイクを向けなければいけませんからね」

「まあそれなら……」

「ですから味方を雇っておきました。お二人ともこちらへ」

文が声を上げると、廊下の角から影が2つ現れた。1つは魔理沙と同じくらいだが、もう片方はとても小さい。

大きいほうの手には棒、小さいほうの肩に尖っているものが見え、魔理沙は察してしまった。

「ヤツホー魔理沙！　なんだかとっても面白そうだね！」

「いつもはこんなことしないのだけれど……なんだかとっても面白そうだから来たわ」  
「同じ言葉重ねるのやめるんだぜ！」

その妖精と巫女は仲のいい姉妹のように、同じようなニヤケ顔になった。

「というわけで、霊夢さんとチルノさんです」

「言われなくても知ってるぜ」

「では、よろしく願いますよ」

「あ、待て！」

魔理沙の言葉を聞くことなく、音速に近い速さで廊下を駆けていく。

「こら、廊下を走ってはいけません！」

「あつ、すみません」

映姫校長に止められたが。

「フランさん、そのチョコは誰にあげるんですか？」

教室に戻ってきた文は、さっそくメモ帳を取り出していた。

取材相手は、先日潜り込みのフラン。

あの時はよくわからない食材をチョコに詰め込んでいたが、その後どう修正したのだろうか。それがどうしても聞きたくて、文はエアマイクをフランの口元に置き、詰め寄った。

「誰って、いろいろな人だよ」

「まあそうですね。——では質問を変えましょう。その中にはいったい何を入れたんですか？」

積みあがっている十個ほどのかわいくリボンで包装されたチョコを指差し、尋ねる。

「チョコの中身ってこと？」

「それ以外に何が？ もしかして酸味がある物入れてませんか？」

「いや、それは咲夜に止められたよー」

「ああ、それならよかった」

ほかの人間ならば、文が言っていることがおかしいことに気づくだろう。

なぜ文は、フランがチョコにトマトを入れようとしたことを知っているのか。ここに咲夜がいれば一発でばれるのだろうが、そこまで考えられる頭脳はあいにくフランは持つてなかった。

「そんなにいうなら、はい、あげるよ」

「ありがとうございます！」

両手で大事そうにフランからチョコを受け取る。開けてみると、いたって普通のチョコだった。半分に折って口に運ぶと、柔らかい甘みが口の中に広がった。

「確かに普通においしいですね……」

「でしょー！　これがみんなで作った成果だよ！」

「そうですか。ところで、その頑張ってくれた紅魔館の皆さんは？」

先ほどから教室を見渡しているのだが、レミリアも咲夜も見えない。少なくとも、隣の席のレミリアはいないとおかしいはずだ。

「ああ、今日はお休みだつて。なんだかとおつても疲れたつて言つてた。きっと、カリスマを出すと体力が少なくなつちやうんだね」

「あ、そうですか……」

何も知らない純粹な少女の残酷な一言で、察してしまった。いまごろレミリアと咲夜は紅魔館でダウンしているところだろう。

## 第四十八話 文のチョコ取材当日編②

フランへの取材は予想外の収穫だった。具体的には一面トップに載せられるほどの。フランのアップ写真を新聞の中心にはつておけば、昼夜もとがめることは無いだろう。むしろ、数十部くらい買ってくれるのではないだろうか。見出しは「フランの暴走チョコ特急！」といった感じで。

(やりました……)

恍惚な表情で幸せをかみしめる文。追いかけても、殺人光線を向けられても、粘り強く取材した結果がこの成果だ。

(けど、まだ足りませんねえ……)

しかし、これで満足するような文ではない。1つスクープを見つけたら、それ以上の特ダネを見つけたくなる。その探究心こそ、幻想郷のブン屋だ。

午前の授業中に次の取材先は決めてある。

もう昼休み。この長い時間は格好の取材タイムとなる。

すでにその人物を尾行中だ。気づかれないようにそつと、物陰に隠れつつあとをつけていく。

その人物は、後生大事そうにチョコを抱えている。両手でギュツと握りしめていて、緊張していることが伝わってくる。帽子の羽がぴよこぴよこはねているのは、その影響だろうか。

常識を鑑みるなら声をかけるべきではないのだろうが、あいにく文はそんなデリカシーを持ち合わせていない。

大妖精とはチョコを引き合いに出され停戦協定を結んでいるが、慧音とは何一つ交渉しておらず、新聞のコラム欄を埋めるのにうつつけだ。

その人物が角を曲がった瞬間、光の速さで突撃する。

「慧音さーん!」

「うわっ!?! ああああああ、文!?!」

文が後ろから肩をたたいた途端体を激しく揺らし顔を真っ赤にするのは、文の担任、慧音。

「突然話しかけてすみません。お取込み中でしたか?」

「い、いや、別に大丈夫だ」

慧音の手が後ろへ回ったのを文は見逃さなかった。

「あれ? 何か持つてるみたいですが……なんですか?」

慧音の手が後ろへ回ったのを文は見逃さなかった。慧音の手の内を知っているながら、

意地悪く文は尋ねる。

「な、なんでもない。つまらんものだ」

「そうですか。——うわーひどいなー」

「いきなり急になんだ」

「慧音さん、それをつまらないものなんて言うてはいけませんよ。妹紅さんへ渡す大事なものなんですよ?」

「!? なんでそれを知っている!」

「あなた、この前1人で手作りチョコを作成してましたね。しっかりと取材させていただきました。慧音さんにしては脇が甘かったですね。割と近くでのぞいてたんですよ?」

「のぞいたのは認めるんだな……」

「まあ取材の一環ってことで」

顔を暗くした慧音の頭が反る。お得意の頭突き攻撃の準備態勢だ。

「おっと。頭突きしたら、この情報いろいろな所にばらしますよ」

「……いい性格してるな」

慧音の頭が戻る。

「まあまあ、ここは取引と行きましょう。新聞の片隅に慧音さんの記事を載せるだけで、

邪魔をしないと約束しますから。それでいかがですか？」

「絶対にだぞ？」

「ええ。記者魂にかけて誓います」

「ふん……いいだろう」

落ち着いた顔に戻った慧音は踵をかえし、歩いて行つた。

(天井裏から、ひっそりと観察するのは邪魔な行為ではないんですよ慧音さん)  
文の記者魂は紙のように薄いという当たり前のことに気付かずに。

## 第四十九話 文のチョコ取材当日編③

(ふふ……さすが慧音さんですね)

文は自分のだらしない顔を元に戻すことができないうでいる。

先ほどの慧音との契約で、彼女と妹紅の邪魔をしないと文は約束した。

ただ忍者さながら、天井から写真を撮るのは迷惑行為とは言えない。そう勝手に解釈した文は、結局チョコを渡すところをばっちり確認した。

普段絶対に見せることのない、慧音の緊張した顔。それを激写できた文は、有頂天に達している最中である。

「さーて、これで記事の内容は固まりましたよ！」

思わず廊下であげた大声に、ちょうど廊下ですれ違ったチルノと大妖精が驚き、二人の肩がビクツとはねた。

(さーて、残るはあと一つ)

だが、これでも、こんなに撮りつづけても、まだ満足できない。それほどまでに文の取材欲は強大だ。

慧音の時と同じように、こっそりと尾行を開始している。さながら探偵に見えるが、

彼女は一介の新聞記者である。だが、その尾行能力は、下手な名探偵には匹敵していた。(にしても、寒いですね……)

二月の夕方ともなれば、かなり冷え込む。特に学校の廊下は暖房が全く聞いていないため、極端に寒くなる。文は自分の息を手につけ、少しでも寒さを和らげようとしていた。

(けど、あの人の心はヒート真っ盛りでしょうけど)

再度、文は尾行している人物を確認する。彼女は透き通るような金髪を真っ黒な帽子で隠し、白い息を吐いていた。手には、後生大事そうに抱えられているチョコレート。

「さあ、どうしてくれるんですか魔理沙さん……!」

小声で、しかし力のこもった声で文がつぶやく。

魔理沙を尾行しているのは当然、彼女が誰にどんなチョコを上げるのかを徹底的に探るためである。先日にも単独取材を魔理沙に申し込んだのだが、門前払いならぬマスパ払いされてしまった。

ならばと、勝手に取材中だ。

「さて、そろそろですかね……」

こちらに全く気付いていない魔理沙がいるのは、会議室の前。

扉に手をかけ、入っていく。

なぜ慧音も魔理沙も会議室なのか文は疑問に思ったが、むしろ好都合だった。忍のよ  
うに天井裏へ侵入し、天井の穴から覗き込む。

予想通り、魔理沙と霖之助が向かい合っていた。

はたして魔理沙がどんな言葉をかけるのか。期待と緊張で文の胸の鼓動が早まっ  
ていく。

「どうしたんだ魔理沙、こんなところまで呼び出して」

「いや、ちよつとな……」

文のニヤつきが止まらない。すべて、すべて自分の予期した通りの結果だ。おそら  
く、霖之助はまだここに呼ばれた理由を理解していない。

どう魔理沙が気付かせるのか、お手並み拝見だ。

一時の間があつた後、魔理沙の口が開かれる。

「ちよつとネズミの駆除に手伝ってもらつたんだぜ！」

魔理沙が叫び、チョコを持っていない右手を高々と揚げる。

「妖器『ダークスパーク』！」

誰が予想したであろうか。魔理沙がチョコを投げ捨て、はつらつとスペルカード宣言  
をした。

## 第五十話 文のチヨコ取材当日編④

魔理沙が叫んだ瞬間、文の中に多くの考えが廻った。

魔理沙の大声に驚いた。なぜスペカを用意していたのか疑問に思った。迫ってくる黒光りする光線に恐怖も感じた。

だが光が天井を突き抜けるまでのほんの一瞬、何よりも強く頭を支配したのは、

(あゝ！ これじゃ一面に書けないじゃないですか！)

そんな、至極純粹な記者魂だった。

自分がどうなろうと新聞は出す。そんな強い意志を持った文は、被弾するまでのほんの数フレーム、最後の行動に出た。

「……………」

顔をしかめて、自分のメモ帳を天井の端のほうへ投げる。

数回跳ね、壁にぶつかって静止したメモ帳は暗がりにも隠れてよく見えなくなっていた。

(ああ、これで…………)

なんてことはない、すべて満足だ。

ピチューン

天井に穴が開いたせいで、会議室が一月くらい使用不能になったらしい。

「やったか？」

天井を見上げて確認する魔理沙。

魔理沙は文の尾行に気づいていた。彼女はそれをわかったうえで、珍しく冷静な考えを持った。つまり、「気づいてないフリ作戦」の画策である。

あまりに熱くなり過ぎていた文は、魔理沙の作戦に全く気付かず返り討ちにあったのだ。

——だが、それだけのために魔理沙は霖之助を呼んだりしない。

口をぽかーんとあけ、現状を理解していない霖之助のほうへ向きなおる。

「おい、大丈夫か？ まあ、驚くのもしょうがないな」

「そ、そりゃあ驚くに決まってる。いきなりスペカを取り出したかと思えば天井に放つ……保健室へ行つたほうが」

「そこまで頭狂つてない。まあちよつと付きまとつてるやつがいたもんでな。そいつを吹っ飛ばしただけだ。なかなかの威力だっただろ？」

「それは前から知ってるけど……」

「まあ、今ダークスパーク撃つたのはちゃんと理由がある」

「? —— そりゃ興味深いね」

霖之助が落ち着きを取り戻したところで魔理沙は自分の帽子をまさぐり、髪の中から何かを取り出した。

「ほら、やるよ」

それを霖之助へ投げつける。

「おっと。 —— これは……」

「チョコレートだ。今日は2月14日だろ? 普段から買い物ツケにしてくれるお礼つ

てことで」

「これ買うお金があつたらちゃんと代金を払ってほしいものだが」

「いやいや、ちゃんと手作りだぜ。先に行つとくが、毒キノコは入ってない」

魔理沙は終始ニヤついている。

このチョコレートは、「友チョコ」といわれる分類であろう。魔理沙は文に逆襲するため、そして霖之助に日頃のお礼をするため、このような方法をとつたのだろうか。

「それじゃあな、これからもよろしくだぜ!」

くるりと背を向け、勢いよく会議室を飛び出していく。

「チョコか……ありがたいものだな」  
霖之助のつぶやきを聞き逃さずに。

「ふっかーっ!」

翌日、すでに文は回復していた。手にはこの日のために刷った大量の新聞。昨日コテパンにされた後、徹夜でかきあげた渾身の記事だった。

魔理沙の記事は無くても慧音にフランと、紙面を埋めるには十分なほど、ネタは集まっていた。

「さあ、配りまくりですよー!」

この日、バレンタインの後日談で学校は大いに盛り上がった。

## 弾幕ごっこ大会くクラス対抗編く

## 第五十一話 テストも終わり

「う……おお……」

「や、やった……」

それぞれ手に握りしめている紙を見て、チルノとお空が目を輝かせている。

その紙の右上には、赤字で43と41と書かれている。その下に、「ギリギリだぞ！」という慧音先生の角ばったコメントがあった。

「やったねチルノちゃん！」

「なんだかんだ頑張ってたからね、あんたが報われてたと思うとホツとするよ」

それぞれの肩に大妖精とお憐が手を置き、祝福する。

三学期の期末テスト、バレンタインデーに気を取られて、勉強が手につかなかった生徒が大半だった。

そんな中で特に点数の悪かったチルノとお空は再テストを受ける羽目になった。

大妖精やお憐、その他多くのクラスメイトが一つとなり、テストという強大な敵に立ち向かう。その姿はさながら月世界との対決を彷彿とさせた。

最終手段で高校生教師、朝霧優斗のもとでほぼ徹夜で知識をたたきこみ、ようやく点数の呪縛から逃れることができたのだ。

「うう……ありがとう大ちゃん！」

感極まったチルノが、たまらず大妖精の胸元に飛び込んだ。

突然の行動に少し口を開けた大妖精だったが、こういう時も反応の仕方も慣れているようだ。何も言わずに、右腕をチルノの後ろに回し左手を頭に置いて優しくなでた。

その行動を見て、心底うらやましそうにしているお空にお燐が気付いた。

「おや、これは同じことすればいいのかい？」

「それでお空も満足するんじゃないかな」

「それじゃ、……よしよし、よくがんばったね」

若干棒読みだったが、お燐も同じようにお空の頭に手を置いて静かに撫でる。

「ふへへ……♪」

「ご満悦だったらしく、ただただ気持ちよきそうな声を上げている。

あまりこういうことに慣れていないのだろうか。あまりに有頂天になっていて、よだれがたらたら垂れている。

「あくもうー！」

見かねてお燐がポケットから取り出したハンカチで口を「ごしごし拭いておく。今度

はかなり強い力を込めていたので、お空の口のあたりが赤くなった。

「ほら、しゃんとしなさい！ もう時間だよ！」

「あつれ、もうこんな時間か……」

お空が目をこすりながら時計を見ると、すでにHRの時間になっていた。慌てて背筋を伸ばしたのと同時に、慧音が中に入ってきた。

「みんなおはよう。——どうしたお空、眠そうだな。ああ、そういえばやつとテストが終わったんだったな」

「そうなんですよ。そもそも歴史の問題があんなに難しいなんて……」

「あれを難しいというか……」

軽くため息をついた慧音は、視線をお空から学級全体に戻し、もう一度しゃべり始めた。

「さて、みんなもわかってると思うが今度、弾幕ごっこ大会があるな。今からそのチーム分けをするぞ」

毎年学期末に行われる弾幕ごっこ大会。テストも終わり、生徒たちのテンションもあつていて、最高に盛り上がりそうだ。

「おい、今回もペア戦なのか？」

質問した魔理沙に、慧音はうなずく。

「ああ、また2対2で戦ってもらおう。ただ……」

「なんだ？」

「魔理沙、お前は霊夢と組むな」

## 第五十二話 慧音が説明中

「何だつて!？」

「はあっ!？」

魔理沙と霊夢の叫び声が教室に響き渡る。

魔理沙は思わず立ち上がったが、霊夢は顔を動かしただけという違いはあるものの、心の中では同じように驚愕していた。

前回の弾幕ごっこ大会でもタッグマッチと聞いた瞬間、2人は即座に手を取り合った。

まさしく最強と呼ぶのにふさわしいこの2人は、予想通り決勝まで勝ち進んだ。だが、決勝戦の前に食べたキノコが腐っていたらしく、不覚にも準優勝という結果になったのだ。

それを悔やみ、今回こそは! と、強い気持ちで臨む。——はずなのだが、

「なんでだよ! なんで霊夢とじゃダメなんだよ!?! なんでだよ!？」

「同じことを繰り返さないでくれ……。最近忙しくて頭痛が……!？」

魔理沙の叫びを慧音は手で制す。

教師全員に言えることだが、弾幕ごっこ大会が間近に迫っているため慧音も睡眠不足だ。ただ、あのスキマ数学教師だけはいつも爆睡しているが。

そういう理由もあり、さっさと話を終わらせた社会科教師は、

「まあ、落ち着け。お前たち前回の大会で準優勝しただろ？ しかも、決勝戦も大方の予想では二人の勝ちだったそうじゃないか。それで、一部生徒から苦情が出てな。優斗先生によると、『チート』って反則行為らしい。そこで教師内で協議した結果、霊夢・魔理沙組は無しって話になった。他の誰かと組んでくれ。」

「お、おう……」

「ふん、わかったわよ」

「じゃあ大会の説明始めるぞー」

まくしたてた慧音に圧倒されたのか、2人は何も言えなかった。

生徒全員が自分を見ているのを確認してから、慧音は話し始める。

「今回の弾幕ごっこ大会はみんなも聞いているだろうが、」

「クラス対抗戦でしょ！」

チルノが立ち上がって話をさえぎったため、慧音が睨みつける。

それに一瞬で気付いた大妖精は青い顔になったが、当の本人は満面の笑みで続ける。

「追試に受かんないと、これに出れないから頑張ったんだ！　ねー、大ちゃん！」  
「ふえっ!?　——うん、そうだね……」

くるつと半回転したチルノに突然話を振られた大妖精は反射的に受け答えをする。  
恐る恐る慧音に眼だけ向けると、

「……………」

(ひえーっ！)

ひたすらジト目でこちらを凝視していた。

「ほ、ほら慧音先生の話はまだ続いているよ?」

「あ、そういえばそうだね。忘れてた!」

「じゃあ続けるぞ」

頭突きは無いらしく、大妖精は大きな息を吐いて安堵する。

「今回はクラス対抗だが、前回と同じでタッグを組んでもらう。うちのクラスは20人だから、10組作れるな。今日の放課後までに作って、報告してくれ」

はーい、と元気な声が数か所から聞こえた。

その発言者はチルノやお空、キスメなどの、一見タッグ相手が決まってそうな人物だ。それ以外に心の中に野望を秘めたものが1人、

(これは……チャンスだわ!)

七色の人形遣いと聞けば、その願望がわかるだろうか。

## 第五十三話 不可視の壁

休み時間になった途端、アリスは教室を飛び出した。これは誰かに話しかけられ野を避けるため。つまり、一人になりたかったのだ。

魔理沙と協力して弾幕ごっこという、夢のような話。そのチャンスが今まさに目の前に転がっている。

その作戦を練るには、だれにも邪魔されない空間が必要だ。トイレの個室か、はたまた屋上の隅っこか、あるいは自分の家か。

いずれにせよ、教室にいたままでは都合が悪い。誰かに見つかることなく隠密に行動……

「見つけたわよアリス」

「どっから嗅ぎつけたのよ紫もやし」

できるはずもなかった。アリスが角を曲がると、その魔法使いは立ちはだかつていた。た。

「聞いたわよ。魔理沙と霊夢がコンビを解散するんですってね」

「情報が早いな……」

アリスの元タツグ相手に犬猿の仲、パチュリーが低い声で話す。

前回の弾幕ごっこ大会で、意外にも二人は手を取り合った。しかし、その魂胆は互いをつぶすためというわかりやすいものだった。

結局、大妖精&小悪魔戦のときにアリスはゴリアテ人形、パチュリーは賢者の石をそれぞれぶつけ合って、自滅した。

それ以来特に関係を持たなかったのだが、なぜ今パチュリーは突っかかってきたのだろうか。

アリスの心底嫌そうな顔に氣にも留めず、パチュリーは続ける。

「つまり今、魔理沙はフリー。またとない絶好のチャンスってわけね」

その言葉にアリスは怪訝な顔をした。数秒思考したあと、困惑した表情になる。

——何を言ってるんだらうかこの喘息魔導師は。

どうやら夢を見ているのだらうと判断し、アリスは現実を突きつける。

「あら？ あなたにチャンスがあると思ってるのかしら。よく考えてみなさい、今回はクラス対抗の戦いのよ。あなたは確か……3年生だったわよね。対して私たちは1年1組。入り込む余地なんてないのよ」

「ええ、よくわかってるわ」

「ならさっさと指くわえておけば？」

「そうするわけにもいかないでしょ？」

「はい？」

アリスの背筋が冷たくなる。いまのパチュリーの言葉と表情に恐ろしい狂気を感じたような気がした。

「まあとにかく！　今私は一人になりたいの。もう話はないわね」

話を強引に切ってパチュリーの横をすり抜けようとする。が、

「ぎやつー！」

パチュリーの真横で、歩が止まる。一見すると何もない空間にしか見えない部分に、異物がある。

「な、なんなのよこれ!？」

まるで壁があるかのごとく、前に行けない。強くこぶしでたたいても、まったく変化がない。

右も左も後ろも同じような壁。アリスとパチュリーだけ隔離されたような、そんな一辺2メートルほどの正方形に閉じ込められた。

たまたらずアリスがパチュリーの肩をつかんで詰めよる。

「パチュリーー！　いったいなんのマネよー！」

「ふふ、ふふふふ……。私考えたのよ。このままあなたが幸せになるくらいなら……」

「一呼吸おいて、低い声でアリスの耳元にささやく。  
強引な手を使っても、あなたを止めるわ」

## 第五十四話 スペカ連打

低く、冷たいパチュリーの言葉にアリスは一瞬固まった。だが、首を何度も横に振り強引に脳を再起動させる。

要するに閉じ込められたのだ。ここでもたもたしていれば、そのうち魔理沙はほかの相手を見つけて声をかけるだろう。それまでの間にこの女狐はその身を犠牲にしても、この空間に押し込めておくのだろう。

ここまでの思考を数秒でめぐらせたアリスは間髪入れずに判断をする。

——見えなくなつて、壁は壁だ。ぶつ壊すのが早い。

パチュリーの細身を押しつけ、懐からスペルカードを取り出した。握りつぶすようにして発動すると、右手で何とかもてるくらいの大い人形が出現した。その体の中には大量の爆薬がつめこんであり光っていた。

「魔符『アーテイクルサクリフェイス』！」

大声で発動したと同時に下手投げで透明な壁の中心めがけて投げつける。放物線を描いた爆弾人形は前方の壁の中心で轟音とともに煙を上げ、爆発した。

黒煙が消えてくる。何か視覚的な変化があったわけではないが、魔法の壁にダメージ

を与えたはずだ。

アリスはその壁の近くに寄って確認する。

「まだか……」

手で触れてみると、無機物の堅い感触が伝わってくる。

さすがに人形一体程度で壊れるほどもろくはないだろう。当然、織り込み済みだった。

「どうかしら……私の全身全霊をかけた結界は……」

「これ結界なの？ あと、息絶え絶えね。そんなにエネルギー使うの？」

「あなたの人形が結構高火力なのよ……脳筋ね……」

どうやらこの結界に負荷をかけるほど、パチュリーの体力も削られていくらしい。

三メートル四方に区切られた空間で、いつまでも爪を噛んでいるわけにはいかない。

アリスは出し惜しみをやめた。

「なら、速攻で打ち破らせてもらおうわよ」

「やれるものなら……やってみなさい」

結界にもたれかかっているパチュリーの言葉を背にして、もう一枚スペルカードを取り出す。

アリスの頭上に今度は複数の人形が浮かぶ。

「呪符『ストロードールカミカゼ』！ 行きなさい！」

アリスが号令をかけると、背後からアリスの頭ほどの人形が複数現れる。せきを切ったように次々と突進していき、衝突すると先ほどと同じように爆発四散する。

結界の中心一点に十数個の人形が刺さる。確認はできないが、確かに結界を傷つけている。

「これでどうかしら……って、もう聞いちゃいないか」

アリスが再び振り返ると、パチユリーはうつむいたままピクリとも動かなかった。今の攻撃でもうノックダウンであろう。

そう判断したアリスは満足げな表情を浮かべ、もう一度結界へ近づく。

結界を通過しようとする、

「……固いわね」

ガン、と鈍い音がした。

「簡単には……破らせないわよ……」

「あなたいつの間にかこんなに成長したの？」

「魔法が私の一番の得意分野。これであなたに負けるわけにはいかないのよ」

「なら消耗戦としゃれこむ？」

「のぞむところよ」

今のスペルカード2枚でかなり息が上がっているが、こうなったらアイツが気絶するまでやる。

そう覚悟を決め、2枚同時にスペカを取り出そうとする。

「ん？　なんだこれ？」

「!？」

——だが、その後ろから唐突に声が聞こえ、踏みとどまった。

## 第五十五話 パチユリーの願い

「ん？　なんだこれ？」

アリスは後ろからの声で、反射的に動きを止めた。

これがただの1生徒なら、アリスはそのまま無視していただろう。しかしその声に反応しないわけにいかなかった。なぜならその声こそが、パチユリーがアリスを閉じ込めた一番の元凶。

アリスは即座に後ろを振り返り、話しかけた。

「そこにいるの魔理沙？」

じつと声のする方向を見据え、反応を待つ。

だが、アリスの声は届いておらず、

「なんで通れないんだ？　こりや見えない壁か？——そんなわけないか」

ぼそぼそと魔理沙のつぶやきが聞こえるだけだ。

どうやらこちらの声は聞こえないが、向こうの声だけは届くマジックミラー式らしい。パチユリーも凝って作ったものだ。

ならば、さっさと壁をぶち破るのが得策だ。こちらの存在を気付かせるのが一番手っ

取り早い。

アリスは止めていた指を動かし、胸元から三枚一気にスペルカードを取り出す。

(これで終える……!)

覚悟を決め、アリスが目を大きく見開いたとき――、

「待ちな……さい……」

「これ以上話すことなんてないわよ」

背後からパチュリーのか細い声。

パチュリーは息絶え絶えで、今にも意識を落としそうだ。だが、アリスのほうをにらみつけるように凝視した。

その剣幕に少し気後れしたのか、アリスは黙って見つめ返す。

「あなた……これからどうするの……」

「そりや当然、壁を破壊してから魔理沙に会うのよ」

「ならその前に……お願いしたいことがある」

「はあ? あんたが私を閉じ込めておいて? ちよつと虫が良すぎるわよ。さつさとどきなさい」

「どうしてもやりたいことがあるのよ。――あなたと!」

「えっ!?! 私?」

パチュリーの言葉が斜め上から降ってきてアリスは思わず聞き返した。

「（こいつは魔理沙じゃなくて私に用があった？　じゃあ閉じ込められた理由も魔理沙がらみじゃないってこと？）」

考えれば考えるほどパチュリーの心理がわからなくなる。これまでアリスとパチュリーはほとんど関係を持っていなかったが、なぜ今になって話しかけてきたのか。

兎にも角にも、話を聞かないことには始まらない。相変わらず息絶え絶えで横たわっているパチュリーに声をかける。

「何か頼み事でもあるの？」

「ええ、こつちへ来なさい」

「何よその偉そうな態度は」

「もう一步も動きたくないのよ。あなたが何にも考えずにスペル連発するから……あいかかわらず火力だけは高いのね」

「あんたがここに閉じ込めたからでしょうか」

文句を言いながらもパチュリーの隣にしゃがみ込み、聞き耳を立てる。

「あなたと………したいのよ」

「………えっ？」

## 第五十六話 運命のジャンケン

アリスとパチュリーのやり取りから数十分後、

「よっし、学級会始めるぞ〜」

「待ちわびてたんだぜ！」

「相手は見つかつたのか魔理沙？」

「はっ、よく考えてみる。霊夢は禁止されてて、アリスも姿が見えない。他に誰かいると思うか？ まったく短慮だな」

「よーし、あとで職員室で頭突きな」

1年1組では、弾幕ごっこ大会のペア決めが行われていた。といつても、叫んでる魔理沙や、無言で青い顔をしている霊夢以外は、ほぼ決まっているようなものなのだ。えっと、それでどこまで決まってるんだ？ ——ペアが決まってる2人は、黒板に書いてくれ！」

慧音の支持でわらわらと黒板の前に殺到する。

全員が席に着くと、7組の名前が書かれてあつた。

「なるほどなるほど……ルーミアとリグル、大妖精と小悪魔。お燐とお空にヤマメとキ

スメ、レミリアフラン。文と椀。それと、雛とにとりでいいか？」

はい、と元氣な反応が14人から聞こえてくる。

残されたのは、6人。

「じゃ、残った奴は決めとけよ」

「ま、待つてくださいい！」

声を張り上げたのはミスティア。彼女はリグルあたりと組もうかと思っていたが、夜に開いている八目鰻屋台の準備に忙しく、あぶれてしまったのだ。

「チルノ、一緒にやらない？」

「え？——うん、いいぞ！」

「私、チルノとやるのでいいですよね！」

「別にかまわないが。書いておくぞ」

黒板に、ミスティアチルノと整った字で書かれる。

正直なところ、ミスティアはバカなんかとはなく、常識人と組みたかった。例えば大妖精やリグル。しかし、霊夢や魔理沙などの鬼強いものと組んで、足を引っ張るのはもつと嫌だった。

「あと残ったのは、霊夢と魔理沙と小傘とアリスか。あいつどこ行ったんだ？——まあいい。さっさと決めておけよ」

「私アリス！」

「さて、アリスは渡さん！」

霊夢と魔理沙が同時に挙手をして、慧音に訴えかける。

別に小傘が嫌いというわけではない。ただ、小傘は所詮からから傘お化けだ。霊夢と魔理沙とは、明らかに実力が違う。

一方アリスは体力こそないが、その火力は非常に魅力的だ。二人が所望するのも当然であろう。

「わかったわかった。じゃあ公平にジャンケンで決めろ」

2人は立ち上がり、お互いをにらみつけてけん制しあう。

「負けねえぞ霊夢……」

「そうね。弾幕ごっこは私のほうが強いんだから勝つしかないわよね？」

「いいやがるぜ……」

「さっさとやるわよ。ジャン、ケン、」

「ポン!!」

気合を込めて出したお互いの手は、

「やった！」

「な……嘘だろ……」

魔理沙がグーで、霊夢がパーであつた。

## 第五十七話 魔理沙の好み

そんなこんなで、翌日。魔理沙と小傘は大木の下で話していた。

「準備できたか小傘？」

「も、もちろんさ……あれだけ頑張ったから」

「よしよし、その心意気だ。今日は絶対に勝つぞ！」

「うん！ やってやるんだ!!」

実はこの小傘、並みの小傘ではない。

魔理沙とのタツグが決まった瞬間、魔理沙は小傘を連れ出して校舎の外へと向かった。

そこから始まったのはもちろん、魔理沙との地獄の特訓。特に魔理沙はお互いのスペルカードを理解し、連携を取ることを重視した。12時間という短い時間では、できることは限られているのだ。

しかしそこは弾幕ごっこに命を燃やしている魔理沙。見る見るうちにコンビプレイができるようになり、急造コンビの2人は1日で見違えるほどに成長したのだった。

「しかしまあ……疲れたな。なんだか目がとつても重いぜ。お前はどうか？ いけそう

か？　もうだめか？」

「ぜんっぜん！　こんなんで疲れちゃったの？」

「バケモンか……いや、本当に化け物唐傘妖怪か。こういう時は妖怪にあこがれるぜ……」

夜を徹しての特訓で、魔理沙は睡魔に襲われていた。対して小傘は目を輝かせていた。むしろ、一日中起きていて肌にハリがある。

人間が劣るところをまざまざ見せつけられ、肩を落とす魔理沙。

「調子はどうだ？」

そんな魔理沙をあおるような発言が後ろから聞こえた。

ドスのきいた声で、魔理沙は振り返り答える。

「どこを見ればそんなこと言えるんだ？　私の目の下をしかと確認するんだぜ」

「私は小傘が気になったから行っただけだぞ。なっ、小傘。元気だよな？」

その声の主、慧音は飄々として小傘に笑顔を向ける。

「あつたりまえじゃない！　こんなんで疲れているようじゃ、驚かせられないよ！」

「そうだよな。たった一晚寝てないだけで疲れるなんて、人間は弱いな」

「うん！」

「小傘てめ……あとで覚えておけよ」

魔理沙は暗い声で脅迫した後、手の指10本をわきわきと動かした。

瞬間、小傘の顔から血の気が引き、慧音の後ろに隠れた。小傘の口から、低い震え声が出てくる。

「やだ……あれはもう……」

尋常ではない豹変に、慧音は目を丸くし、魔理沙に疑いの目を向ける。

「大丈夫か!? おい、魔理沙、いったい何をやらかしたんだ。まさか……小傘の初め手を強引に……」

「なあっ!? ちげえぜ!!」

「そうか……まさかとは思ってたがお前はそういう……」

「そういうってどういうことだと思ってたんだ!!」

「そりやもちろん、小さい女の子が好きなんだろう? チルノとか」

「今まで私をどんな目で見てきたんだ!? ——ああ、周りのやつが変な目を向けてるじゃねえか!」

慧音は微笑みの中にどこかさみしきの混じった表情を浮かべ、親指を突き立てた。

「心配するな、私は教師だ。生徒のそういうのも認める。ただ強引にやるのは犯罪だから、一緒に警察に行こう。なっ、私が弁解してやるから」

「だから事実無根だつて叫んでるだろうが! ——くすぐつただけだよ」

「まあそんなことだろうと思ってた」

深刻な様子から一瞬で真顔に戻る。あいかわらず後ろでは、「いや……くすぐりいや……」と小傘の悲痛な声。

「冗談きついで先生……」

「ふふ、普段の仕返しだ」

普段めつたに見せないピースサインで喜びを表現した。魔理沙は白状したように理由を話し始める。

「実は昨日大妖精の家に行ったんだ。そこで『私をびつくりさせてみて!!』なんてあいつが言ったんだよ。悩んでたら優斗が助言してくれて……」

「つまり、悪いのはすべて優斗だと」

「そういうことだ」

「あとであつたら頭突きだな……」

罪が朝霧優斗になすりつけられたところで、

「そろそろ本題に入っていいか?」

「まだあつたのか?」

「なになにー!?!」

どうやら小傘は完全に復活したらしかった。

慧音は二人にまっすぐな瞳を向ける。

「こっちの3組戦の対象覚えてるか？」

「えつと……」

「はい！ ヤマメとキスメでしょ！」

「そう、責任重大なポジションだ」

試合は対2組と対3組で2回ある。1試合で誤解弾幕ごっこが行われる。3クラスしかないため当然総当たり戦で、各クラス10回試合を行い、勝利数の多い暮らしの優勝となる。

そんな中で、3組戦の対象とは最後に行われる大トリ。絶対に負けられないのだ。

「くじ引きで決まった後二人が涙ながらに懇願してきてな……『私たちには到底似合っていない』とかで。仕方ないから、こうして頼みに来てるわけだ」

「だってさ小傘。どうする」

「もちろんやるに決まってる!!」

魔理沙の問いかけに、小傘は間髪も入れなかった。魔理沙も白い歯を見せ、心底楽しそうな顔になる。

「私も同意見だ。こんな緊張するシユチュレーション、嫌いじゃない」

魔理沙の力強い握りこぶしが、答えとなった。

「じゃあ頼むぞ！」

「組を勝利に導いてくれ!!」

## 第五十八話 魔理沙の救世主

「眠い……疲れた……ぶっ倒れそうなんだぜ」

「ねー暇だよー。なんか一発芸やってー」

「袖を引つ張りながらむちやな要求をするんじゃない！」

徹夜で練習に励み、慧音にとんでもない疑いの目を向けられ、今や魔理沙の眠気は限界を突き破っていた。

慧音から頼まれて、試合は午後になったので魔理沙はさっさと寝たい。ただ小傘を引つ張つて木陰まで来たのはいいものの、暇が大嫌いな小傘に邪魔されて目を閉じることもままならないのだ。

「ねー、暇なら私が思考錯誤した驚かせレパートリー100連発見てよ」

「お前は体力バカだからいいよな。高貴な人間様は休息が必要なんだぜ」

「あつれ、魔理沙は魔法使いじゃないの？ 疲れは魔法でどーにかなるって白蓮が言ってたよ」

「うっ、まあそれはそうだが……そもそもあいつは人間じゃないからな。魔法の系統も違うし」

「でも魔法使いなんですよ？」

「いや、なんというか……魔法使いにもいろいろあつてな……」

皮肉なのか天然なのか、結構痛いところをついてくる小傘であった。

「あーもう！ 誰か助けてくれよ!!」

魔理沙の悲痛の声がこだまする。

その声を聞きつけたのか、はたまた全くの偶然であろうか。魔理沙にとつての救世主が横から現れた。

「魔理沙、大丈夫かい？」

「こーりん！ ちょうどよかつたんだぜ。ささ、早くこいつをどつか連れてってくれ」

完璧すぎるタイミングに思わず愛称で呼んでしまった魔理沙。

しかし霖之助も練習に付き合われていて、魔理沙と同じ徹夜明けなのだ。しかも望んでではなく魔理沙に、「第三者の目が必要なんだぜ」などと言われて襟を強引につかまれるという全くのばつちりだ。

しかし霖之助に疲れの色は見えない。いつも通りの細い目とぼさぼさの白髪で、とても二十四時間寝ていないとは思えないだろう。

「つーかお前も十分化け物だな。なんでそんなピンピンしてるんだ？」

若さの秘訣を魔理沙が見上げて尋ねる。霖之助は自虐するように軽く笑って答えた。

「化け物って……僕は半妖だから十分バケモノといえるんじゃないか。それに徹夜なんてテストの採点で慣れているからね……」

「あつれ？ 優斗が全部やってくれるんじゃないのか」

「それこそ彼が一週間不眠不休になるよ。それに優斗が来る前は……」

「あ……そうだよな……」

教師根性のかけらもないダメ妖怪や神たちに、仕事を押し付けられたと目が示していた。魔理沙の脳内にスキマ妖怪や、ポルターガイストを使って演奏ばかりしている三姉妹が頭に浮かぶ。

そういえば優斗が来る前は霖之助がすべての面倒事を対処していたな。魔理沙は心中でそう思案して、頭を下げる。

「魔理沙はきついと思うから寝ているといい。小傘、弾幕ごっこを見に行こう」

「えー！ 魔理沙も一緒に……」

「ここから、わがままを言っちゃいけないよ」

「!? う、うん……」

無造作に小傘の頭に置かれた霖之助の手に何も言えなくなる。魔理沙はその自然で洗練された振る舞いにあきれ交じりの溜息を洩らした。

「よし、行くよ霖之助！ 相手を研究してやるんだ!!」

「今弾幕ごっこやってる相手とは当たらないと思うけど……まあ近いところで見ておこうか」

幼女の扱いがうますぎる霖之助に感心しながら、魔理沙は一日ぶりに体を横たえるのであった。

## 第五十九話 弾幕ごっこ大会一回戦 文&amp;椛VS白黒リ

リリー

「おお、もう始まつてるね！」

「今は1組と……リリーホワイトとブラックだから2組が戦つてるね」

小傘たちが試合会場へ行くと、すでに激しい空中戦が繰り広げられていた。

一試合目は文、椛ペアの1組と、リリーホワイト、リリーブラックペアの2組という対戦カードだった。

「もうすぐ春ですな。なんだか力がわいてくるね。弾が止まつて見えるよ」

「そうだね。でも油断しちゃだめですよ。相手も本気ですよ」

「気を付けるよ」

「ああ、いちいち語尾を伸ばすな！ そんなに私の恨み言を記事に書かれないの!!!」

「文様、あれはどうみても素ですよ。……強いのは確かですが」

文がペンを取り出して、猛烈にいろいろ書きなぐっている。椛はそれをたしなめているものの、リリー達をにらみつけて敵意をあらわにしていた。

ほわほわした笑顔のリリーホワイトと、きりつとして整った笑顔のリリーブラックに

文たちは苦戦していた。

黒白リリーが相手と聞いて、油断したのは事実だった。もちろん技量の差もあるが、そもそもリリーたちはスペルを持っていないため、速攻で倒せると踏んでいた。

だが文たちは肝心なことを忘れていた。

今日は3月14日。特に今日が特別な日というわけではないが、この季節が問題なのである。

「あいつら春になっただけでこんなに強くなるの？」

「さあ？ まあ今日はとても暖かいですからね」

「椀、あとスペル何枚残ってる？」

「私は3枚しか持っていないので、それらを使い切った時が負けですよ。まあわかりやすく言うと、あと1枚しかないんですが」

「だよね。私も1枚だけ……——来るっ！」

文が反射的に前を向くと、赤と青の弾が、大量にばらまかれていた。

「またこれ!! 動きにくいのよー！」

そこそこ密度もあり、不規則に動き回る弾は、1度当たっただけで負けとなる弾幕ごっこではなかなか厄介だった。

右、左、前、後ろ、あるいは上下を使って、三次元を駆使して何とか避ける。

「はあ……平気？」

「ご心配なく……と言いたいところですが、結構厳しいです」

弾は止まったものの、際限なく振ってくるランダム弾に、文たちの体力は少しずつ削られていた。

「もうちよつとだねー。そろそろ文さんたち事故りそうだねー」

「疲れてるのがよくわかりますねー。これが有名な、ジャイアントキリングというやつですかねー」

あいかわらず余裕しか見せないリリーたちを見て、文は決心した。

「正直リリーホワイトに使うのは大人げない気がするけど……あれ、いくわよ」

「了解です」

「ねえねえ、どうやら本気出しちゃうみたいだよー」

「避ける準備しておきますよー」

「わかったー」

文と椛は同時に懐からスペルカードを取り出す。文は少し腰を落とし、椛は剣を構えて、2人が出せる最大の合作スペカの準備をする。

「いくわよ！ 旋風『鳥居つむじ風』！」

文の両脇に、吹き荒れんばかりの竜巻が二つ出現する。

「さあ、吹っ飛んで来い！」

「そんな単調なスペル、あたるわけが……」

リリーホワイトが言葉を失った。

実際、文は竜巻をリリーホワイトとブラックの間に投げつけた。しかし、風が吹いている方向が、予想と異なっていた。

普通竜巻は風が巻き上がるものだ。だが現実には風がリリーたちの方へ吹いている。文たちとリリーたちの間に、一本の神風のような通り道ができた。

そこに突撃するのはもちろん、

「うらああああああ!!」

「うわーすごいなー」

剣を振りかざしている椛だ。先ほどまでであった10メートルの距離が急速に縮まる。

「終わりです！ 山窩『エクスペリズカナン』」

椛がスペルカードの紙きれを切り裂き、身体の周りに生み出した黄色の弾幕を至近距離から一気に放出する。

「うわー避けられないー」

すぐ近くにいたりリリーホワイトはたまらず被弾した。だが、もう一人、リリーのクルな方は、

「ごめんなさいホワイトー。けど下がから空きですよー」

妖精とは思えないすばやさで下に回り込み、華麗に回避していた。

リリーブラックの位置を視認した文は、ニンマリ笑った。

「かかったわね！ そらいけっ！」

織り込み済みとばかりに、もう一つの竜巻を操作した。

猛烈に吹き荒れる風の入り口にいたのは椛、出口は当然リリーブラック。

「もう一度おおおおお!!」

猛烈な追い風をもらって、椛が真上から突進する。

「は、速すぎますー」

ピチューン

「案ずるな、みねうちです」

審判のホイッスルが高らかになり、試合終了になった。

## 第六十話 どんでん返し

「勝者、いや、勝妖精リリー！」

だがその笛は、文と椀が想定していたそれとは正反対だった。

「ちよつと、どういふことよ！」

「しつかりピチュラせましたよね!! どう見ても私たちの勝ちじゃありませんか！」

2人そろって、審判の幽香に詰め寄る。

幽香は左手で傘をくるくるしながら、右手は文たちに突き付け、

「あなたたち……ルール違反よ」

「どこかです？」

「場合によつてはあることないこと書きますよ」

「はあ!!」

理解の悪さに若干顔が引きつったが、ため息でストレスを吐き出して説明し始める。

「いい、これは弾幕ごっこよ！ 物理攻撃禁止に決まつてるでしょ！ これ以上説明を  
求めるなら……成績下げるわよ」

先端を光らせた傘を勢いよく向け、鋭い眼光を光らせる。

「なっ、これは横暴です！ 教師という立場を悪用して1組を不利な状況にさせようという魂胆ですね！」

「何のメリツトがある！ 私は2年の担任よ!!」

「そもそもあれは物理攻撃に入りません！ みねうちですっ!!」

「思いつきり刃物向けた時点でアウトなのよ！」

「ああ、もうこれは何言ってもだめですね！ 椀、書きに帰りますよ！」

「いつもはロクなこと書かない文々。新聞ですけど、今回はお手伝いします！」

「勝手にやってなさい」

「ごめんなさい、負けてしまいました」

「あの分からず屋教師が……すみません」

「まあまあ、こればかりはしょうがないわ。私たちは運よく勝てたので、相殺してると思うわ」

「うまく私のキュウリが刺さったんだ！ 遅くて普通なら避けられちゃうんだけど……  
雛の能力とうまくかみ合った！」

雛にとりのコンビは、うまい具合に連携が決まったようだ。パチン、と軽やかにハ

イタツチして喜びを表現する。

雛は再び文たちに向き直り、

「ただ一つ奇妙なことがあったのよ」

「なんです？」

「審判がさとり先生だったんだけどねー、なんか途中でどつか行っちゃったんだ」

『むむつ、これはからかいチャーンズ！』なんてよくわからないことを放つて、飛んで行ったのよ」

「まあよくわからない性格してますからね」

記者モードに入った文がいろいろとメモを取る。この大会の様子は、文々。新聞で大特集を組むので、ネタは多く集めておきたいところだ。

「ほかに何か面白いことありませんか？」

「ああ、そういえば優斗は来てないみたい。まだ熱があるらしいよ」

「きつと大妖精さんに釘を刺されたんでしょうね。……優斗さんなら強引にでも来そう  
な気がしますよ」

「まさか、それはないわよ」

「さすがに大丈夫ですよ。——じゃあ私たちはゆつくり観戦しますとしますか」

## 第六十一話 消えた妖怪

「ふわー……すごい試合だったね」

小傘は文たちの試合を食い入るように見ていた。

「ああ、リリーの粘りも相当だったが、文たちの連携のほうが一枚上手だったね。結果は残念だったけど」

「これで対戦成績はどうなったの？」

「えっと、文たちが負けてにとりたちが勝ったから……これで2勝2敗かな？」

「ほーほー。次はどのペア？」

「大妖精と小悪魔だけど……まだ少し時間があるね。魔理沙を起こしに行くかい？」

「そうしよう！ そろそろ疲れも取れてるよねきつと！」

「はは……人間はそんなすぐに回復しないと思うけど……」

小傘を軽く受け流して、霖之助はゆっくりと歩きだす。小傘も後ろから追従して、二人は再び木の下へと戻っていった。

そこではあいかわらず、魔理沙がすやすやと寝息を立てていて夢の世界で冒険していた。もたれかかっている大木が不思議な安心感を放出している。

「すごいな……さつきと体制が全く変わってない」

「感心してる場合じゃないよ。ねーどうするの、もうお昼だし起こさないよ」

「そうだね、昼食はとっておいた方がいい。しかしここまで熟睡していると……」

「よっし！ こうなったら……」

「ちよちよちよ！ 今は大事な時間だからやめておいた方が……」

閉じた化け傘の先端部分を勢いよく向けた小傘を声を大きくしてたしなめる。さすがの霖之助でも、完全にコントロールできていない。

「ふむ……さつきから時間も経ったし、少しゆすれば起きるんじゃないか？」  
「そんなに自信があるならやってみてよ」

小傘が口をとがらせたので、やれやれといった様子で霖之助は魔理沙の目線までひざを曲げる。

「おーい、そろそろ起きてー」

肩をポンポンと叩くものの、やはり動かない。

「やっぱり起きないよ」

「ほら、時間だから」

霖之助を右手は方から頭へと動き、魔理沙のふわふわした金髪が軽くなでられる。

その整った横顔をぼんやりと眺めている小傘は思わず、

「うわ……魔理沙もつたいない」

霖之助に聞こえないよう、こっそりとつぶやいた。魔理沙に起きるよう念を送るが、届くことは無かった。

「だめだね……」

「ねーどうするの、もう大ちゃんとかあちゃんの試合始まつちゃうよ。それにお腹もすいたし」

「わかったわかった。じゃあ試合見に行くついでになんか買つて……ああ、屋台があるじゃないか」

もう一度魔理沙に背を向け、八目鰻の屋台へ向かったその時、

「霖之助先生！ ちょっといいですかっ!!」

「おや、そんなに息を切らしてどうかされたんですか?」

霖之助を呼ぶ声と共に、会場のほうから猛スピードで走ってくる教師がいた。

「はあ……はあ……」

「校長がそんなに慌ててどうするんですか」

「はは、すみませんね……ちよつと非常事態で」

校長の映姫は肩で息をしながら、右手を霖之助の腰にやった。

「さとり先生が……さとりが……逃げました……審判すっぱかして……」

怒りと焦燥が入り混じった、か細い声が少しずつ漏れ出る。

「とりあえず落ち着いて。——仕方ないですね、さとり先生ですから。僕が入ればいいんですね？」

「はい、すみません……」

「えっ、霖之助行っちゃうの？」

「ああ、悪いが魔理沙を連れて会場まで来てくれ」

## 第六十二話 小傘の助っ人?

「さて……どうしようか」

似合わない腕組みで、小傘はしたり顔を浮かべて考え込む。

異常なまでに起きない魔理沙をどう驚かせようか、そんな唐傘妖怪の矜持に関わる問題だ。やる気が起きないわけがない。傘で魔理沙の頭をはたくのは霖之助に止められている。かといって、大きな声で無理やり起こすのも芸がない。

しばらく魔理沙をじっと見つめていた小傘だったが、急に何か思いついたようで、「よっしー!」

魔理沙に背を向け走って行った。選手や観客の間を小さな体で器用に抜け、首を回してクラスメイトを探す。

「あつ、霊夢ー」

ちようど近くにいた霊夢の袖を引つ張った。

「……」

「ねー、ちよつといい?」

「……なによ」

始めは無視していた霊夢だが、すぐにあきらめて目線を小傘に向けた。

「何の用事か知らないけど、手短にお願いね」

「わあ、怖い顔。どうしたの?」

小傘に向けられた声色は明らかにとがっていた。目も半分しか開けておらず、上機嫌でないことが露骨に伝わってくる。

「いや、私のペアってアリスなんだけど、突然いなくなつたのよ。まったく……どーしてどいつもこいつもいなくなるのかしら。魔理沙も霖之助について行つたままどこかへ消えるし……」

魔理沙という単語が出て、小傘がばあつと笑顔になつた。

「魔理沙? それなら端っこの方で寝てるよ? 私、魔理沙を起こしてもらうために霊夢に声をかけたんだー」

「はあ? 寝てるってこの大事な時に……どこだよ」

大きなため息を一つついて、再びジト目になり小傘に尋ねる。指差した方向に、鬼よろしく険しい形相でのっしのっし歩いて行つた。

安らかに眠っている魔理沙の下に着くと、

「なんで起こさないのよ。もうそろそろ試合じゃないの?」

「ううん、私たちは最後だからまだいいの。それにちよつとつつかいたくらいじゃまった

く動かないし」

「まったく、一晩寝てないくらいで……別に起こしても構わないのよね？」

一転、霊夢の口角が上がった。彼女にしては珍しい、なにかいいことを思いついたように、小悪魔的な笑みを浮かべた。

「いいけど、霖之助先生があんまり手荒なまねはよせって」

「大丈夫よ、——とつても楽しくなれることだから……」

「それって……ひっ!!」

小傘がブルブル震えだす。霊夢の指十本すべてがリグルの虫よろしく蠢いていた。

「こちとらアリスが行方不明なのにそんなに気持ちよく寝てて……覚悟はできてる？」

「霊夢、もしかしてパルスィに取りつかれてる？」

鬼か悪魔か、未恐ろしい形相で魔理沙に肉薄する。

「さあ、最高の目覚めをご提供してあげるっ！」

あいかわらず微動だにしない魔理沙、その脇の下に霊夢の手が伸び、

ガシッ

「へっ?」

「そうだな、いい目覚めだと思うぜ。お前の間のぬけた顔が見れたからな」

なかった。魔理沙の細い腕が、霊夢の手首を手錠のように固く縛っていた。

「……いつから」

「小傘がいなくなつた時くらいかな？ 初めはいたはずらしくる小傘に逆襲しようかと思つてたが……まさかこんな大物が釣れるなんて驚きだぜ」

「まさか……もつと疑つとくべきだつたわね」

「——ああ、ところでハンムラビ経典つてしつてるか？ 外の世界の法律書らしいんだが、やられたらやり返そうつて考え方らしい。目には目を、齒には齒を、じゃあくすぐりには？」

「や、やめ……」

「私、こういうわかりやすい思考大好きだぜっ!!」

小傘が口をポカーンと開けている横で、霊夢の絶叫がこだました。

## 第六十三話 チルノ&amp;ミスティア

「はあ……はあ……なんで、私が……」

「それは自分の脇に聞くんだぜ。普段からさらしてるから敏感だろ？」

「それは煽りと受け止めていいのね？」

「そんな息絶え絶えで、まだ軽口叩く余裕があるなんて嬉しいぜ」

「はわわ……2人は今喧嘩してるの？」

「そんなことないわよ(ぜ)」

手痛いしつぺ返しを食らった霊夢は、いまだふらつきながらも力強く立ち上がった。

まだあぐらをかいて座っている魔理沙は再び指先の運動をはじめながら、

「おつ、どうした？ まだ出番じゃないだろ」

「ほかの試合を見に行くのよ。場合によっちゃ不戦勝だつてあり得るんだし」

クラス対抗のこの勝負、順位はクラス全体で勝った試合が多い順につく。全10試合の中の9戦目、10戦目に出場する霊夢&アリス、魔理沙&小傘組の前に決着する可能性もある。午前中には5試合が行われ、1組は3勝2敗で折り返してきている。

「なら私もついてくぜー。——おつ、意外と滑らかだな」

「ちよ、触らないでよ」

魔理沙が後ろから飛びつき、髪をなでる。そのまま霊夢の肩を持ち、会場まで向かう。「おお、やってるやってる」

霊夢が額に右手を当てながら、上空を見上げる。すでに派手な戦いが勃発していた。

「雪符『ダイアモンドブリザード』！」

1組の第7回戦、チルノ&ミスティアペアの試合は中盤を迎えていた。

チルノが放った2枚目のスペルカードで、会場全体が冷気に包まれる。

「寒っ！ まだ花冷えなのに勘弁してほしいぜ……」

魔理沙がぼやくが、これがチルノの闘い方だ。作戦が成功したチルノは、会心の笑みを作って、

「はっはっはっ、大成功！ どうだ、ここからはあたいのフィールドだぞ！」

「ふむ……妖精の割にはなかなかやりおるな」

「なんだっけ？ 優斗とかいう非常勤講師が手取り足取り教えてるとかいう話だけど」

「それはもう片方の妖精ではなかったか？ —— いずれにしても、侮れる相手ではなさそうだな」

対戦相手の布都と屠自古が油断なく構えている。それにまったく臆することなく、チルノは再び喋り出す。

「もう雑魚なんて言わせない！ 大ちゃんと一緒に妖精最強の道を駆け上がるんだ！」  
「とりあえずお主の仲間を心配するのが先決では？」

「なっ……—みすちー!! おのれっ、みすちーに何をやった!」

しかしチルノの独壇場は長くは続かなかつた。チルノの真横でミスティアが羽をしながらさせて動かなくなっていた。

ギリギリと歯ぎしりをして悔しがるチルノだが、ミスティアが戦意喪失した理由が布都たちにあるわけではない。その理由を屠自古が語りだした。

「えっと、そつちの妖怪確か雀よね？ 普通の雀って冬は暖かい地方に南下するのよ。けどこんな冷える中じゃ……」

「チルノ……あんた、あれほど私の近くで空気を冷やすなど……」

屠自古の解説が終わったと同時に、ミスティアの絞り出すような声が漏れる。どうやら翼だけでなく、指の一本さえを動かすことができていないらしい。

「所詮は妖精といったところか……終わらせるぞ屠自古」

「ああ、やってやんよ!」

平静を保っていた二人が一気に戦闘モードに入った。両者ともスカートのポケットからエース級のスペルカードを取り出し、

「天符『雨の磐船よ天へ昇れ』。さあ、われの導きについてこれるか？」

「雷矢『ガゴウジトルネード』！ 吹き飛ばがいい!!」

屠自古が放った矢型の雷が四方八方に飛び散る。

あいかわらず動けないミスティアはたまらずダウンするが、チルノはまだあきらめない。

「このくらい……妖精のすばしっこさをなめるなっ!」

元氣よく叫ぶチルノだが、肝心なことを忘れている。

「ならばこの波状攻撃は耐えられるかな?」

「つつっ!!」

白装束の袖を口に当て、不敵に笑う布都。これはチーム戦。屠自古1枚のスペカだけで倒す必要は全くない。

かなりの速さで進行する巨大な船に体勢を崩しているチルノはよげきすることができず、

ピチューン

「試合終了! 物部布都&蘇我屠自古ペアの勝利だよ!」

審判のリリカが高らかに宣言した